

当山世利原古墓群

当山宗地原近世墓群

世利原の近世墓

浦添大公園整備事業に伴う発掘調査報告書

浦添市教育委員会



遺跡遠景

(右側は当山世利原古墓群、左側は当山宗地原近世墓群。後方に浦添ようどれが見える。中央の川は牧港川)



当山世利原古墓群99-1号墓



当山世利原古墓群99-1号墓 内部



当山世利原古墓群04-3号墓 漆塗膜片出土分布



当山世利原古墓群（右が04-3号墓）



04-3号墓出土 漆塗膜片(目盛は1mm)



当山宗地原近世墓群02-1号墓遠景



世利原の近世墓

# 序 文

本調査報告書は、浦添大公園整備に先立ち沖縄県中部土木事務所の委託を受けて行った、当山世利原古墓群、当山宗地原近世墓群ならびに世利原の近世墓の発掘調査成果をまとめたものです。

浦添大公園は昭和43年に都市計画が決定された県営の総合公園で、総面積37.4ヘクタールの広大な公園です。公園はA～Cの3ゾーンに分かれており、Aゾーンは浦添グスクを題材として浦添のみならず沖縄のたどってきた歴史を理解するための「歴史学習ゾーン」、Bゾーンは子どもからお年寄りまでそれぞれの目的で活動できる「ふれあい広場ゾーン」、Cゾーンは自然観察会や各種イベントを開くことができる「憩いの広場ゾーン」として位置づけられています。これら三つのゾーンのうち、CゾーンとBゾーンについては既に供用が開始されており、現在はAゾーンの設計や整備が進められています。整備主体である沖縄県中部土木事務所と当市教育委員会は、平成9年度より公園整備にかかる協議、調整、発掘調査に取り組んでまいりました。

今回報告する遺跡は浦添市当山及び仲間に所在し、浦添大公園の各ゾーンに点在しています。これらの墓群の調査では、同地域の古琉球から近世にかけての墓の様相が明らかになってきました。

本書が学術研究や歴史学習の資料として、さらには文化財愛護思想の普及に活用されることを期待しております。結びに、発掘調査ならびに整理作業にご指導・ご助言いただきました神谷厚昭・土肥直美両先生に厚くお礼申し上げますとともに、事業の円滑な運営にご尽力くださった皆様に心から感謝申し上げます。

平成20年3月

浦添市教育委員会  
教育長 西原 廣美

## 例　言

1. 本報告書は、沖縄県浦添市当山に所在する当山世利原古墓群、当山宗地原近世墓群、世利原の近世墓の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、沖縄県中部土木事務所による浦添大公園整備に伴い、浦添市教育委員会文化課が実施した。
3. 本文の執筆分担は目次に示した。編集については仁王、佐伯、安斎が行った。
4. 石材の同定については神谷厚昭氏（沖縄県立博物館友の会）人骨の同定については土肥直美氏（琉球大学）にお願いした。
5. 発掘調査および整理作業の実施には、以下の臨時職員が参加した。  
新垣 智・浦崎祐子・大城竜也・小栗英輝・岸本麻希・木下秋海・喜納政英・金城 薫・古波藏保直・下地サヨ子・新城茂人・澤嶽永子・中所亜紀・仲村和弘・西垣理恵子・濱元若子・廣木ゆかり・北條真子・比嘉美智子・比嘉祐賢
6. 本調査に関わる出土遺物、実測図や写真などの調査記録は浦添市教育委員会文化課において保管している。広く利用されることを希望する。

## 凡 例

1. 本書で表示している北は座標北を示す。
2. 座標値は「第2図浦添大公園と当山世利原古墓群、当山宗地原近世墓群、世利原の近世墓」は日本測地系、その他は世界測地系を用いている。これは改正測量法が施行された平成14年4月を境としての異同である。
3. 基準高は全て海拔高を用い、メートル単位で表示した。
4. 遺構番号については、調査時および調査後に調査区ごとに付した番号を使用している。番号は1番から機械的に付与したため、遺構の時期や性格などに対応するものではない。
5. 遺構実測図は、対象により適宜縮尺を変え掲載し、図ごとにスケールで表示した。
6. 遺物番号は1番から通し番号を付与した。本文・挿図・写真図版の番号は一致する。
7. 遺物実測図の縮尺は原則として蔵骨器は1/6、その他は1/2であるが、必要に応じて異なる縮尺を用い、その旨をスケールで表示した。
8. 墓室・墓庭に関する記述において、特に明記のない限り左右は墓室奥壁を背にした場合に統一している。
9. 引用・参考文献は、各章や節の末尾に記した。

# 目 次

## 卷頭図版

序 文  
例 言  
凡 例  
目 次

第1章 報告の前提 .....	(仁王浩司) 1
第1節 位置と環境 .....	3
第2節 発掘調査の経緯と期間 .....	7
第2章 当山世利原古墓群 .....	9
第1節 遺構・遺物 .....	11
99-1号墓 .....	(仁王) 11
04-1号墓 .....	(佐伯信之) 31
04-2号墓 .....	(佐伯) 34
04-3号墓 .....	(佐伯) 34
第2節 04-3号墓出土人骨 .....	(北條真子) 39
第3節 当山世利原古墓群04-3号墓出土人骨の放射性炭素年代測定 .....	(パリノ・サーヴェイ株式会社) 42
第4節 当山世利原古墓群出土漆器の科学分析 .....	(四柳嘉章) 44
第5節 小結 .....	55
99-1号墓 .....	(仁王) 55
04-3号墓 .....	(佐伯) 55
第3章 当山宗地原近世墓群 .....	(仲宗根久里子) 57
第1節 遺構・遺物 .....	59
第2節 小結 .....	60
第4章 世利原の近世墓 .....	(佐伯) 63
第1節 遺構・遺物 .....	66
第2節 小結 .....	70
第5章 総括 .....	(佐伯) 75

図版  
報告書妙録

# 第1章 報告の前提

## 第1節 位置と環境

### 浦添市の地理的状況

浦添市は那覇市の北隣に位置しており、面積19.09km<sup>2</sup>、人口108,631人（2006年12月末現在）である。浦添市を地図で確認すると、市域は「要」を上（北）に置いた扇のような形をしていることが見てとれる。この場合、西側の親骨に当たる部分は東シナ海に面し、東側の親骨は宜野湾市と接すると理解することができよう。

大局的に見ると、浦添市は南東から北西へと傾斜しているが、その内部は起伏に富んでいる。特に浦添断層崖と呼ばれる琉球石灰岩の断層は浦添市の歴史を語る上で欠かすことができない存在である。この断層は浦添市北東側の南東から北西へ一直線に伸びており、北側には牧港川が流れる。比高差は20mにもおよび、この断層を宜野湾市側から眺めると、あたかも屏風のごとき様相を見せる。断層の南東端には首里城以前の王城として知られる浦添グスク、中央には英祖王父祖歴代の居城といわれる伊祖グスクという、浦添のみならず琉球史においても重要なグスクが所在している。

### 浦添市における近世墓調査

1990年（平成2年）に浦添市教育委員会が発行した『浦添市文化財悉皆調査報告書』には、市内の近世墓群として20箇所が認識されている。しかしながら、その後新たに確認した近世墓群などもあるため、市内に存在する近世墓の総数は相当な数にのぼるのは間違いない。

浦添市教育委員会では1983年（昭和58年）度に行ったチヂフチャヤ近世墓群の発掘調査を皮切りに、現在に至るまで数多くの近世墓の調査を行ってきた。そのいずれの調査においても貴重な情報を得ることができたが、特に1994年（平成6年）度に調査を行った伊祖の入め御拌領墓は、歴史書にあらわれない百姓の家族構成と系譜が解明された点で重要である（浦添市教委1996・1997）。

また、1999年（平成11年）度より、市南東部の区画整理事業地内に所在する前田・経塚の近世墓群の調査を毎年継続して行っている。この近世墓群は入り組んだ舌状台地に掘り込まれたフィンチャヤ墓（掘込墓）の群であり、その総数は1,000基に及ぶといわれる。調査の課程では墓同士をトンネルで縦横に連絡していた様子が確認され、沖縄戦において日本軍陣地としても使用されたことが明らかとなつた（安里・佐伯2003など）。

さらに当市では2004年（平成16年）度に近世墓を主題としたシンポジウムを開催した。『墓からわかる家族の歴史』と銘打たれたこのシンポジウムでは、考古学や文献史学、民俗学、形質人類学などの専門家が一堂に集い、多角的な議論を行っている（浦添市教委2004）。

このように、浦添市では沖縄県においても比較的古い段階から近世墓の発掘調査に力を入れると共に、近世墓研究に対する新しい方法論を模索しているところである。

### 浦添大公園と近世墓調査

浦添大公園は浦添市の仲間と当山、伊祖の3つの字にまたがる広大な県営公園で、面積は37.4haである。地理的には浦添断層崖の北東部分にあたる丘陵と、その北側に平行する牧港川の両岸を含む地域であり、北東端には浦添グスクを取り込む。標高は最も高いところで138mを測り、浦添市内において

も最も高いところに位置することから、公園からの眺望は極めて良好である。すなわち、眼下には宜野湾市の市街地がひろがり、晴れた日には慶良間諸島や残波岬まで望むことができる。

公園内は3つのゾーンに画されており、それぞれ歴史学習ゾーン（Aゾーン）、ふれあい広場ゾーン（Bゾーン）、憩いの広場ゾーン（Cゾーン）にゾーンニングされている。Aゾーンは浦添グスクとその周辺を含む地域17.18haであり、浦添グスクの散策を通じて沖縄の歴史を学べる場とする目的とした整備が計画されている。また、Bゾーン（8.56ha）はおおむね浦添グスクから北西側の浦添断層崖上を、Cゾーン（11.66ha）は牧港川とその両岸を占める地域であり、前者は子供から老人までが楽しめるスペースとして、後者は自然観察やイベントに供するスペースとして位置づけられている。

公園内には、Aゾーンの核をなす浦添グスク（国指定史跡）をはじめ、浦添貝塚（県指定史跡）、伊祖の高御墓（県指定建造物）、仲間後原遺跡、仲間後原近世墓群など、今も史跡や歴史遺産が数多く残されており、今回報告する当山世利原古墓群と当山宗地原近世墓群もまた公園内に存在する。

当山世利原古墓群と当山宗地原近世墓群はともに牧港川沿いに位置する。公園内を通る牧港川の両岸は共に切り立った崖となっており、当山世利原古墓群は西岸に、当山宗地原近世墓群は東崖に位置している。当山世利原古墓群は謎の多い墓群であり、『悉皆調査報告書』で世利原に18基の墓の存在が記されているものの、500分の1地形図には墓はほとんどプロットされていない。現地は牧港川沿いに公園の園路が通っており、崖面に掘込墓が複数口を開けている様子が確認できる。

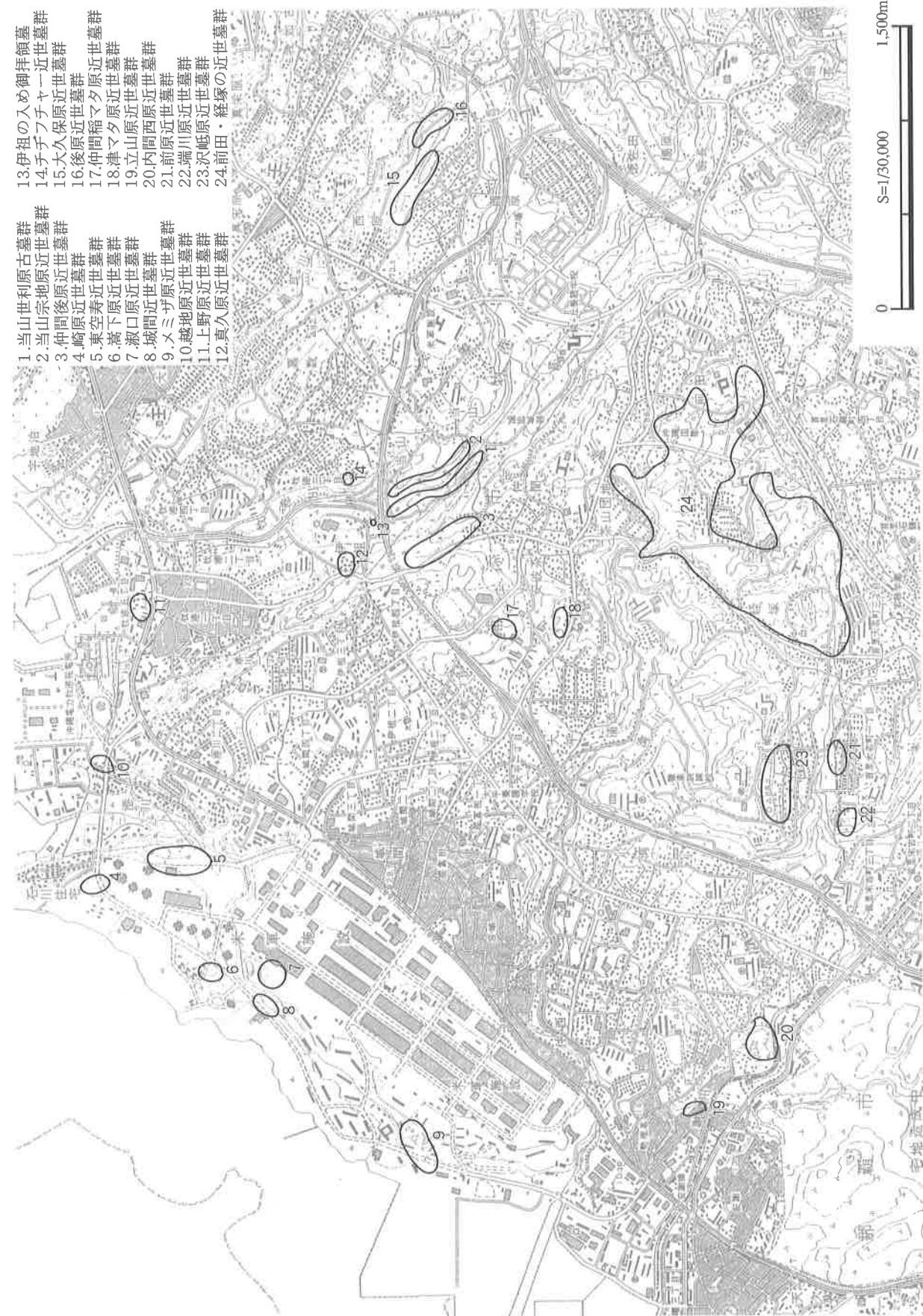
当山宗地原近世墓群は当山世利原古墓群にも増して実体のつかみ難い墓群である。『悉皆調査報告書』によれば宗地原には19基の墓が存在するとされているが、現況では墓群が存在すると思われる崖面は深い雑草で覆われ、個々の墓を識別することは容易なことではない。それを承知で現地へ赴くと、石灰岩の崖面に穿たれた7基の掘込墓を確認することができる。しかしこれも恐らく当山宗地原近世墓群に属する墓のはんの一部でしかなく、今後は当山世利原古墓群と共に、更に精度の高い踏査が求められる。

安里進・佐伯信之 2003「沖縄県浦添市の近世墓調査」『考古学ジャーナル』498

浦添市教育委員会 1996「伊祖の入め御拝領墓」『浦添市文化財調査報告書』第24集

浦添市教育委員会 1997「伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者」『浦添市文化財調査研究報告書』第25集

浦添市教育委員会 2004「墓からわかる家族の歴史 近世墓シンポジウム報告書」『浦添市文化財調査研究報告書』



第1図 浦添市の近世墓群



第2図 浦添大公園と当山世利原古墳群、当山宗地原近世墓群、世利原の近世墓

## 第2節 発掘調査の経緯と期間

浦添大公園は県の総合公園として1968年（昭和43年）に都市計画決定された公園である。それに伴い、浦添市教育委員会は沖縄県中部土木事務所からの委託をうけ、県営浦添大公園における発掘調査を行うこととなった。市教委では1997年（平成9年）度より近世墓やグスク時代集落、浦添グスクなどの発掘調査を毎年行っている。2007年（平成18年）度には、Aゾーン（浦添城跡）以外のグスク時代遺跡や印部土手の発掘調査の様子をまとめた報告書、『仲間後原遺跡 仲間あさと原の印部土手』を刊行した。

### 当山世利原古墓群

**99-1号墓** 99-1号墓は墓の前に厨子甕や人骨が散乱している状態であった。これらの遺物は牧港川沿いを通る園路から容易に見てとれる状況にあったため、市民からの依頼もあって遺物を回収することとなった。調査は1999年（平成11年）6月11日から15日まで行い、実測や銘書判読作業を中心に実施したが、掘削は行っていない。

**04-1・04-2・04-3号墓** 04-1、04-2、04-3号墓の調査は牧港川に架かる橋の工事に先だって行った。この橋は牧港川で分断されたCゾーンを繋ぐために計画されたものである。発掘調査は2004年（平成16年）9月9日から翌年3月14日まで行った。当初は同一崖面に掘り込まれる連続した3基の墓を調査する予定であったが、中央の1基（04-2号墓）は天井に大きな亀裂が確認されたため、調査は断念した。

### 当山宗地原近世墓群

**02-1号墓** この墓の調査も当山世利原近世墓群04-1、04-2、04-3号墓と同じく牧港川に架かる橋の工事に先だって行ったものである。すなわち、当山世利原の墓が橋の南側にあたるのに対し、この墓の属する群は北側にあたることである。発掘調査は2003年（平成15年）1月6日から3月5日まで行った。

**世利原の近世墓** この墓の調査はAゾーンの浦添グスク北西下に位置する「緑の森エリア」駐車場の造成工事に先立って行った。発掘調査は2005年（平成17年）11月21日から翌年1月19日まで行った。

## 第2章 当山世利原古墓群

## 第1節 遺構・遺物

### 99-1号墓

浦添大公園内を通る牧港川岸沿いの遊歩道から当墓に向けて約10m進むと、幅約6.7m、高さ約1.7mを測る、人頭大の自然石を無造作に積み上げた石垣が目につく。石垣の西側は墓への進入路とするため比較的緩やかなスロープ状となっている。

石垣を登りきると、幅約1.4m、長さ約5mの通路状の墓庭につながる。墓庭の東側から石垣下の斜面部分にかけて多数の遺物が散乱しており、特に前庭部東側にはボージャー厨子や甕などの厨子甕が幾重にも重なっていた。墓庭やその周辺で採集した厨子甕や転用厨子は40基を数える。これらの厨子甕に混じって砲弾片と考えられる鉄片を確認したことから、厨子甕が取り出された時期は沖縄戦以後であると考えられる。

墓室正面は、縦約3m、横約4.5mを測る岩穴入口を人頭大から差し渡し40cm程の石で構成した野面積みの石垣によって塞がれている。石垣の厚さは約60cmを測り、石垣オモテ面は裾部分を除く一面に漆喰が塗り込められている。

墓口は墓室正面やや東よりに開口しており、縦約1.3m、横約0.8mを測る。墓口天井部は薄く漆喰が塗られたアーチ状の石で構築され、アーチ石以外の墓口壁面には漆喰が塗られている。地面には石垣に平行する自然石の石列と、その5cm内側にやはり石垣と平行する切石による石列が存在する。これらの石列を横から見ると、自然石を用いたものは切石を用いたものと比べて10~20cm程高くなっている。

地面から約1.1mの部分には墓口を閉塞する施設の一部である木材が遺存している。この木材の上部には長袖に平行して溝が彫られており、下部には正面左から20cmの部分にホゾ穴が開いている。アーチ石の天井部にも木材の溝と接続するように溝状の彫り込みが見られることから、扉とアーチ石との間には板材がはめ込まれていたものと考えられる。

墓室は琉球石灰岩の崖を掘り込んで造られており、縦約2.8m、横約4.1m、高さ約2.4mを測る。平面プランは外部と接する北側が広く、内部へ行くに従って徐々に狭くなる。断面は奥へ向かうに従い天井が低くなる。墓室壁面北側には縦65cm、横1m、奥行き50cmと、縦40cm、横1m、奥行き34cmの堀込みが2カ所存在する。

墓室の内部ではサンゴ石灰岩製の石厨子を墓壁にそった状態で8基確認しており、北西から南を経て北東へ向かい1号石厨子・2号石厨子…8号石厨子と名付けた。

1号石厨子は身のみ正位置であり、前面にはこれに伴うと思われる蓋が、破碎された状態で散乱している。身の内部には原形を比較的良好に残す骨が容量の約半分の割合で残存していた。身部分正面右側には3行にわたって銘書を確認した。

2号石厨子は横倒しのものであり、直下にはこれに伴うと思われる破碎された蓋が存在する。身の内部には横倒しになっているものの、保存状態の良い骨が容量の約3分の2程度残存していた。身部分の墓壁に面する側には5行にわたって銘書が確認されたが、判読は困難であった。

3号石厨子は前倒しとなっているものであり、これに伴うと思われる蓋は身の前面にほぼ完形の状態で存在する。倒れていたものの、身の内部には焼けた骨片や炭化物が容量いっぱいに残存していた。

4号石厨子は前倒しとなっているものであり、3号石厨子の身と墓壁との間にはこれに伴うと思われ

る蓋が2つに割れた状態で存在する。身の内部には焼けた骨片や炭化物が容量の3分の1ほどの割合で残存していた。

5号石厨子は蓋・身共に正位置を保っており、他の石厨子よりも一回り大きなものである。内部には焼けた骨片や炭化物が容量いっぱいに残存していた。なお、身の正面右側には縦に並んだ黒色部分が存在し、銘書の可能性も考えられる。

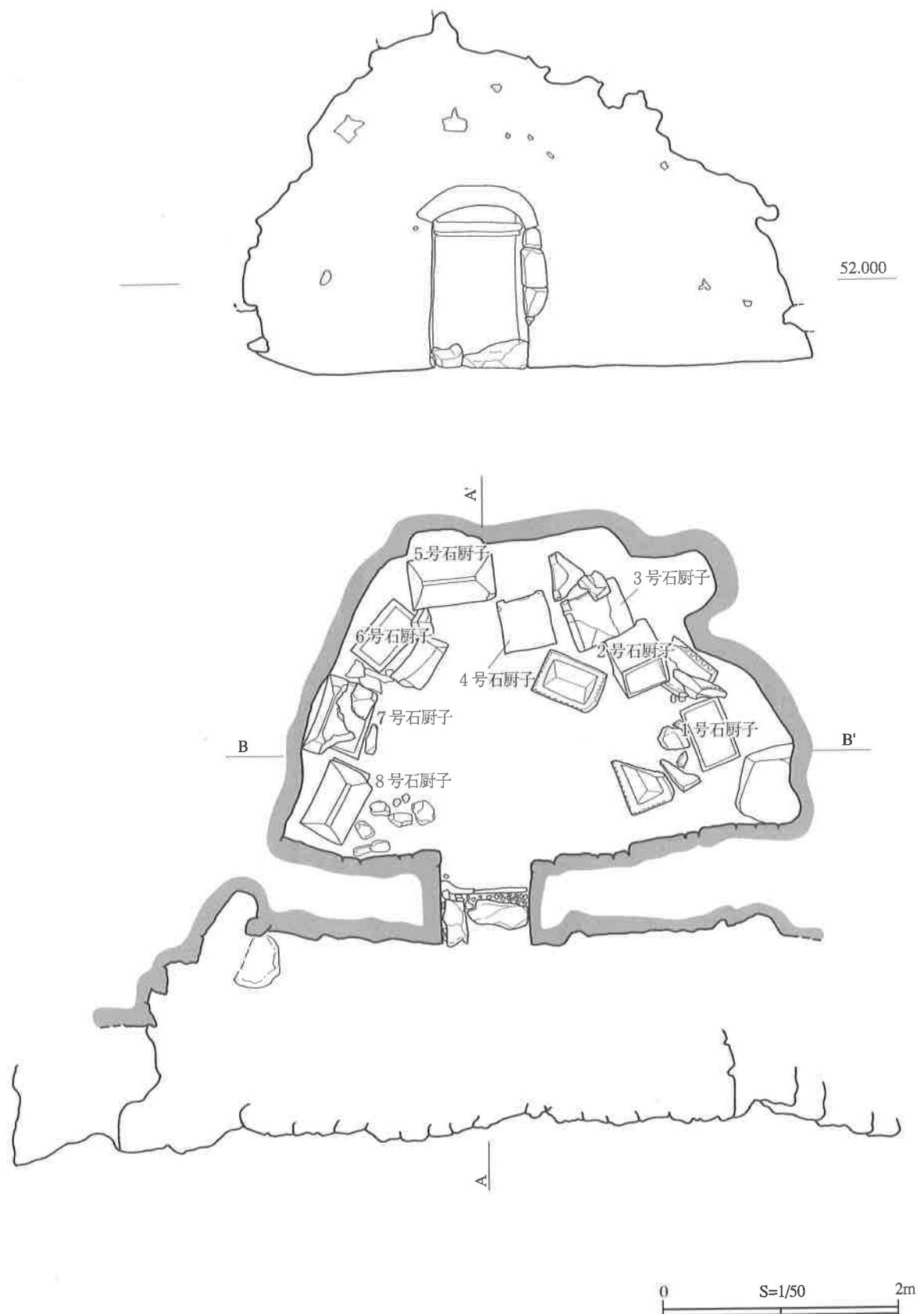
6号石厨子は身のみ正位置を保っており、前面にはこれに伴うと思われる蓋が破碎された状態で存在する。内部には焼けた骨片や炭が身の容量いっぱいに残存していた。

7号石厨子は蓋・身共に正位置を保っているものの、蓋部分が大きく欠損するものである。内部には焼けた骨片や炭化物が身の容量いっぱいに残存していた。

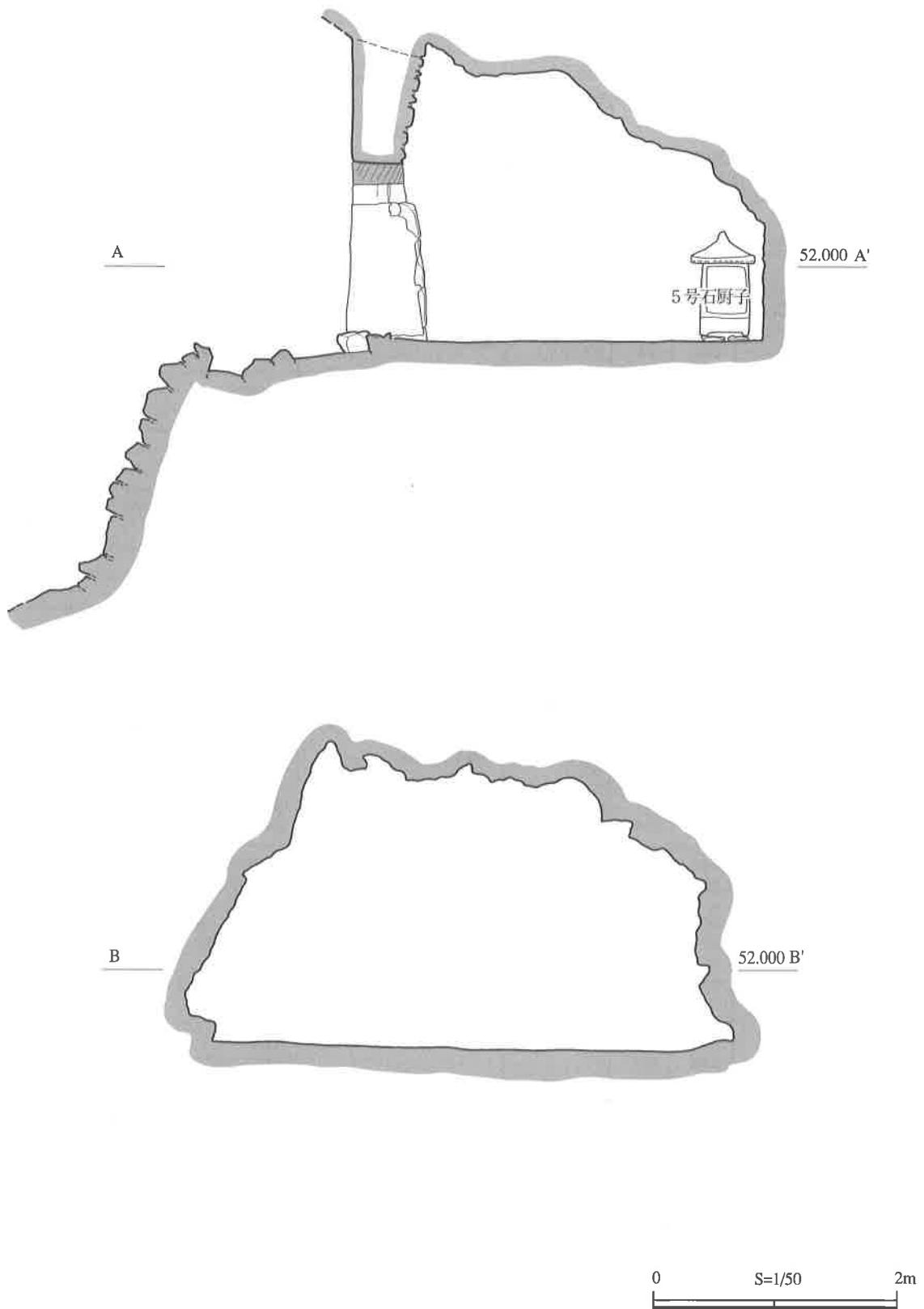
8号石厨子は蓋・身共に正位置を保っているものである。正面窓から見る限り内部には骨が身の容量いっぱいに残存していた。



第3図　当山世利原古墓群・当山宗地原古墓群と今回調査した墓



第4図 99-1号墓 立・平面図



第5図 99-1号墓 縦・横断面図

## 厨子甕身観察表

捕団No. 図版No. 遺物No.	種別	文様	計測値 (cm)		特徴		外面 外面下部	内面
			器高 口径	胴径 底径	窓 穿孔	その他		
第6図 図版5 1	ボージャー		48.5 30.0	38.4 19.5	角窓3 5	窓印、口縁目跡あり	回転横げ'・指げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第6図 図版5 2	ボージャー		55.4 29.7	44.0 22.8	丸窓1 4	窓印	回転横げ'・指げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第6図 図版5 3	ボージャー		50.4 -	34.0 17.8	角窓1、丸窓4 残7	口縁目跡あり	回転横げ'・指げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第6図 図版5 4	ボージャー		55.5 26.5	39.6 21.0	角窓3 5	口縁目跡あり	回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転横げ'
第7図 図版6 5	ボージャー		45.2 24.5	35.4 18.7	角窓3 3	窓印、口縁目跡あり	回転横げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第7図 図版6 6	ボージャー		50.5 24.0	36.3 19.6	角窓1、丸窓4 穿孔ナ(?)	窓印	回転横げ'・指げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第7図 図版6 7	ボージャー		50.7 25.0	37.8 20.8	角窓1、丸窓4 7	底部有紋	回転横げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第7図 図版6 8	ボージャー		49.3 26.0	37.6 20.3	角窓1、丸窓2 残5	口縁目跡あり	回転横げ'・指げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第8図 図版7 9	ボージャー		47.6 27.2	38.4 21.1	角窓1、丸窓2 残4		回転横げ'・指げ'・ヘナデ 回転ヘラ削り	回転横げ'
第8図 図版7 10	ボージャー		48.0 27.4	35.4 19.5	角窓1、丸窓4 5	窓印、口縁目跡あり	回転横げ'・指げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第8図 図版7 11	ボージャー		- -	34.7 19.0	角窓1、丸窓4 5		回転横げ'・指げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第8図 図版7 12	ボージャー		47.9 28.0	37.8 20.9	丸窓3 穿孔数不明	窓印	回転横げ'・指げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第9図 図版8 13	ボージャー	有	53.5 -	42.4 23.7	角窓3 残4	口縁歪み著しい	回転横げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第9図 図版8 14	ボージャー	有	52.7 25.0	38.1 21.4	角窓3 7	口縁目跡あり	回転横げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第9図 図版8 15	ボージャー		48.5 25.3	35.8 20.2	角窓1、丸窓4 9		回転横げ'・指げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第9図 図版8 16	ボージャー		46.5 27.0	36.2 20.3	角窓1、丸窓4 5	窓印、口縁目跡あり、口縁 の歪み著しい	回転横げ'・指げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第10図 図版9 17	ボージャー	有	50.1 24.8	35.9 20.2	角窓3 6	窓印	回転横げ'・指げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第10図 図版9 18	ボージャー		46.7 27.6	37.2 20.8	角窓1、丸窓2 5		回転横げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第10図 図版9 19	ボージャー		50.7 28.7	37.1 20.9	角窓3 不明	窓印、口縁の歪み著しく、 成形後もしくは焼成時に下 部で潰れている	回転横げ'・指げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第10図 図版9 20	ボージャー	有	46.1 25.0	34.7 20.1	角窓3 4	底に刻紋、口縁目跡あり	回転横げ'・指げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第11図 図版10 21	ボージャー		49.0 27.2	34.5 20.0	角窓1、丸窓2 残3		回転横げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第11図 図版10 22	ボージャー		48.6 26.8	36.6 21.5	角窓1、丸窓2 6	窓印、口縁面取りあり	回転横げ'・指げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'
第11図 図版10 23	ボージャー	有	49.2 24.8	35.6 21.1	角窓3 7		回転横げ' 回転ヘラ削り	回転横げ'

挿図No. 図版No. 遺物No.	種別	文様	計測値(cm)		特徴		外面 外面下部	内面
			器高 口径	胴径 底径	窓 穿孔	その他		
第11図 図版10 24	ボージャー		50.9 25.0	34.3 20.3	角窓3 1	口縁目跡あり	回転横げ 回転ヘラ削り	回転横げ
第12図 図版11 25	ボージャー		47.2 25.1	34.9 20.6	角窓1、丸窓4 6	窓印、底に刻紋	回転横げ・指げ 回転ヘラ削り	回転横げ
第12図 図版11 26	ボージャー		50.8 23.2	33.8 21.2	残4		回転横げ・指げ 回転ヘラ削り	回転横げ
第12図 図版11 27	ボージャー		53.6 26.8	35.0 22.3	角窓1 5・半月形	窓印	回転横げ・指げ 回転ヘラ削り	回転横げ
第12図 図版11 28	ボージャー		49.0 26.3	32.5 21.4	角窓3 4・半月形	外面下部火ぶくれ著しい	回転横げ・指げ 回転ヘラ削り	回転横げ
第12図 図版12 29	ボージャー		- -	- 20.4	- 残3		回転横げ 回転ヘラ削り	回転横げ
第12図 図版12 30	転用		- -	- 21.8	- -		回転横げ 回転ヘラ削り	回転横げ
第13図 図版12 31	転用		64.7 16.9	36.6 19.8	- 無し	口縁目跡あり	回転横げ 回転ヘラ削り	回転横げ
第13図 図版12 32	転用		- -	33.9 18.5	- 無し	窓印	回転横げ 回転ヘラ削り	回転横げ
第13図 図版13 33	転用		- -	35.5 19.2	- 無し		回転横げ 回転ヘラ削り	回転横げ
第13図 図版13 34	転用		47.4 23.7	38.9 21.8	- 無し		回転横げ 回転ヘラ削り	回転横げ
第14図 図版13 35	転用		- -	26.4 16.6	- 無し		回転横げ 回転ヘラ削り	回転横げ
第14図 図版13 36	転用		- -	19.0	- 無し		回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転横げ
第14図 図版14 37	転用		- -	36.8 20.5	- 無し		回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転横げ
第14図 図版14 38	転用		- -	29.0 17.0	- 無し		回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転横げ
第14図 図版14 39	転用		56.3 25.8	42.0 19.3	- 無し	肩部に繩状の横帯、口縁目 跡あり	回転横げ・指げ 回転ヘラ削り	回転横げ
第14図 図版14 40	転用		- 16.5	36.8 -	- -	窓印	回転横げ・ヘナデ -	回転横げ

石厨子内人骨一覧表

	男性	女性	性別不明					合計	遺物
			成人	若年	小兒	幼児	乳児～胎児		
1号石厨子	2	1			2	1		6	
2号石厨子	2							2	炭・木片・獣骨(魚の下顎)
3号石厨子※	4	3						7	炭・布片・鉄片・
4号石厨子※		1	2					3	炭・鉄片
5号石厨子※	3	2	1			1		7	炭・釘・キセル・陶片
6号石厨子※	2	1	3		1			7	炭・鉄片・ガラス片・サンゴ
7号石厨子※	4	2	1		1	1		9	炭・釘・鉄片
8号石厨子※	3	3				1	1	8	炭・鉄片
計	20	13	7	0	4	4	1	49	

※焼骨・火葬骨の細片のみで詳細は不明 (確認できた個体数のみ記載)

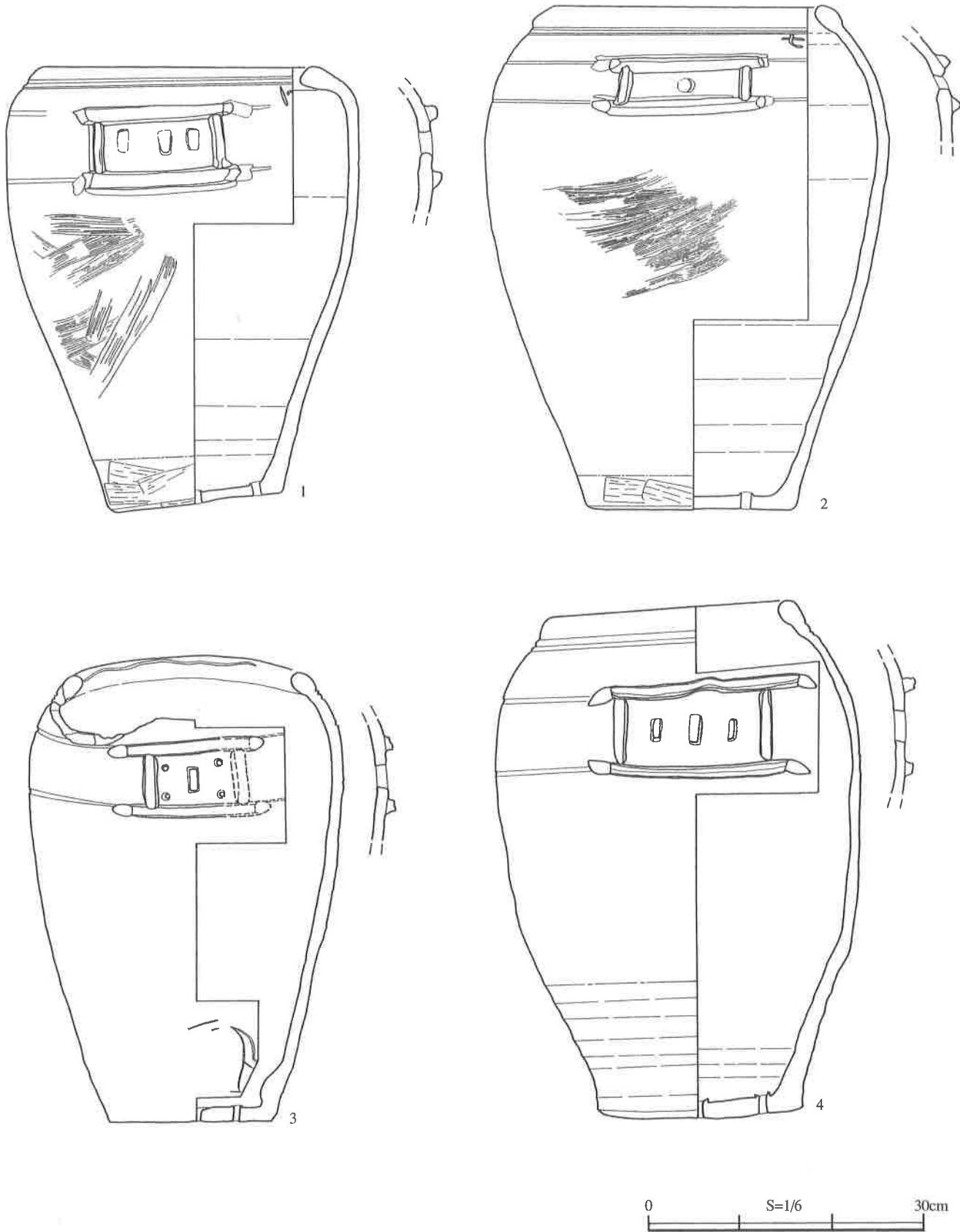
## 厨子蓋観察表

挿図No. 図版No. 遺物No.	種別	外径 内径	器高 体部高	器面調整・装飾	銘書
第15図 図版15 1	つまみ付き笠形蓋	31.0 28.5	15.1 10.4	つまみ裏に穴あり。つまみ台1段。台上凹線1本。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。体部外面に櫛描の波状文。	…間切和納村 □□□中城□□□ 雍正□年壬辰 七月十日
第15図 図版15 2	つまみ付き笠形蓋	34.0 32.2	12.5 9.4	つまみ裏に穴あり。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。	
第15図 図版15 3	つまみ付き笠形蓋	28.5 27.4	12.0 8.3	つまみ裏に穴あり。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。体部外面に櫛描の波状文。	□つき 島袋 □□□
第15図 図版15 4	つまみ付き笠形蓋	30.6 29.5	14.5 11.0	つまみ裏に穴あり。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。	
第15図 図版15 5	つまみ付き笠形蓋	30.2 29.2	12.2 10.0	つまみ裏に穴あり。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。体部外面に櫛描の波状文。	
第15図 図版15 6	つまみ付き笠形蓋	29.1 28.5	12.7 9.1	つまみ裏に穴あり。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。	
第15図 図版15 7	つまみ付き笠形蓋	28.4 27.6	10.5 8.2	つまみ裏に穴あり。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。	□□□□ 儀保筑登之
第15図 図版15 8	つまみ付き笠形蓋	30.8 29.7	12.0 9.4	つまみ裏に穴あり。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。	玉城間切和納村 □□新□ 雍正三年壬辰 七月十日 □□□城 仲門
第15図 図版16 9	つまみ付き笠形蓋	31.0 30.2	12.2 9.3	つまみ裏に穴はあるが、つまみ自体は中空でない。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。	
第15図 図版16 10	つまみ付き笠形蓋	33.1 32.6	8.8 7.0	つまみ裏に穴なし。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。体部外面上部に2本凹線。	
第15図 図版16 11	つまみ付き笠形蓋	32.6 31.6	11.3 8.3	つまみ裏に穴なし。つまみ台1段。台上凹線1本。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。体部外面に櫛描の波状文。	
第15図 図版16 12	つまみ付き笠形蓋	29.6 28.7	9.3 7.0	つまみ裏に穴なし。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。	
第15図 図版16 13	つまみ付き笠形蓋	30.9 30.2	9.3 7.1	つまみ裏に穴なし。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。	
第15図 図版16 14	つまみ付き笠形蓋	30.4 29.4	11.5 8.8	つまみ裏に穴なし。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。体部外面頂上に2本の凹線。	
第15図 図版16 15	つまみ付き笠形蓋	30.2 29.0	10.8 8.5	つまみ裏に穴なし。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。体部外面頂上に2本の凹線。	
第15図 図版16 16	つまみ付き笠形蓋	28.7 28.0	9.5 -	つまみ欠損だが裏に穴なし。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。	毎秋 うし□女子 まか戸
第15図 図版17 17	つまみ付き笠形蓋	30.0 29.0	10.1 8.2	つまみ裏に穴なし。体部外面上部丁寧な回転ヨコナデ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。体部外面に1本の凹線。	
第15図 図版17 18	つまみ付き笠形蓋	29.5 28.5	10.5 8.9	つまみ裏に穴なし。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。	
第16図 図版17 19	笠形蓋	32.6 32.0	8.9 -	つまみなししたが台あり。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。体部外面頂上はナデ調整で、台上に凹線1本。	
第16図 図版17 20	笠形蓋	32.0 31.5	7.7 -	つまみなし。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。体部外面頂上は無調整。	
第16図 図版17 21	笠形蓋	29.0 26.7	9.8 -	つまみなし。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。体部外面頂上は無調整。	
第16図 図版17 22	笠形蓋	29.0 28.0	8.5 -	つまみなし。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。体部外面頂上は無調整で、墨により文様が描かれる。	□□上之□口男子 □川筑登之 子七月四日

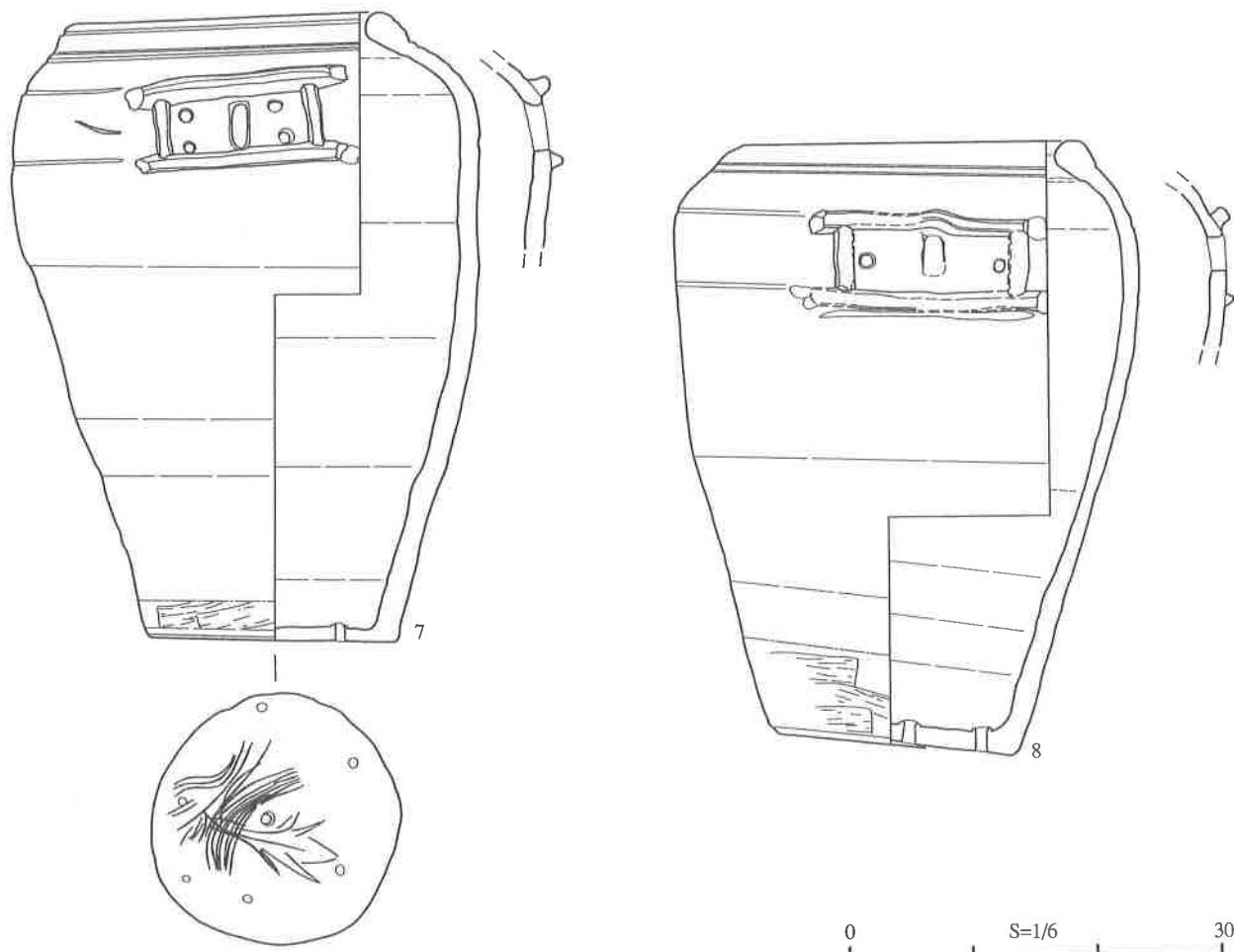
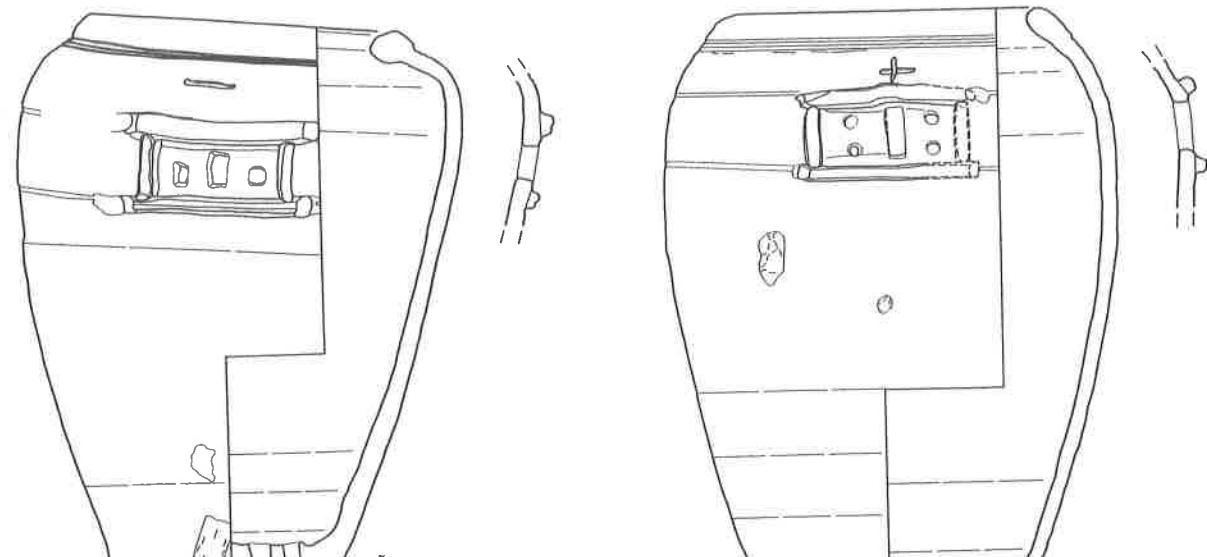
挿図No. 図版No. 遺物No.	種別	外径 内径	器高 体部高	器面調整・装飾	銘書
第16図 図版17 23	つまみ付き笠形蓋	31.1 31.1	- 6.0	全体に焼成時変形。つまみ欠損。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。	
第16図 図版17 24	つまみ付き笠形蓋	29.6 28.8	- -	つまみ欠損。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。	
第16図 図版18 25	マンガン釉鰐形蓋	24.5 19.2	- -	つまみ裏の穴の有無は不明。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。体部外面上部に1本凹線。外面にマンガン釉かかる。	
第16図 図版18 26	マンガン釉鰐形蓋	24.6 18.1	11.9 7.0	つまみ裏に穴あり。体部外面上部回転ヘラケズリ。下部回転ヨコナデ。内面回転ヨコナデ。外面にマンガン釉かかる。	

石厨子観察表

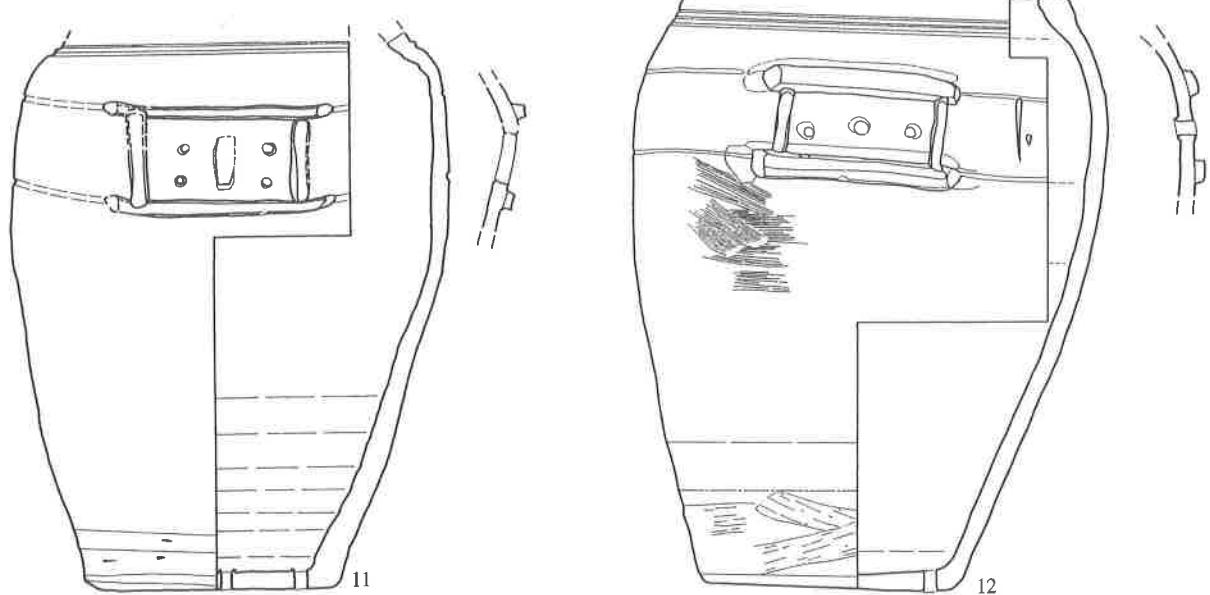
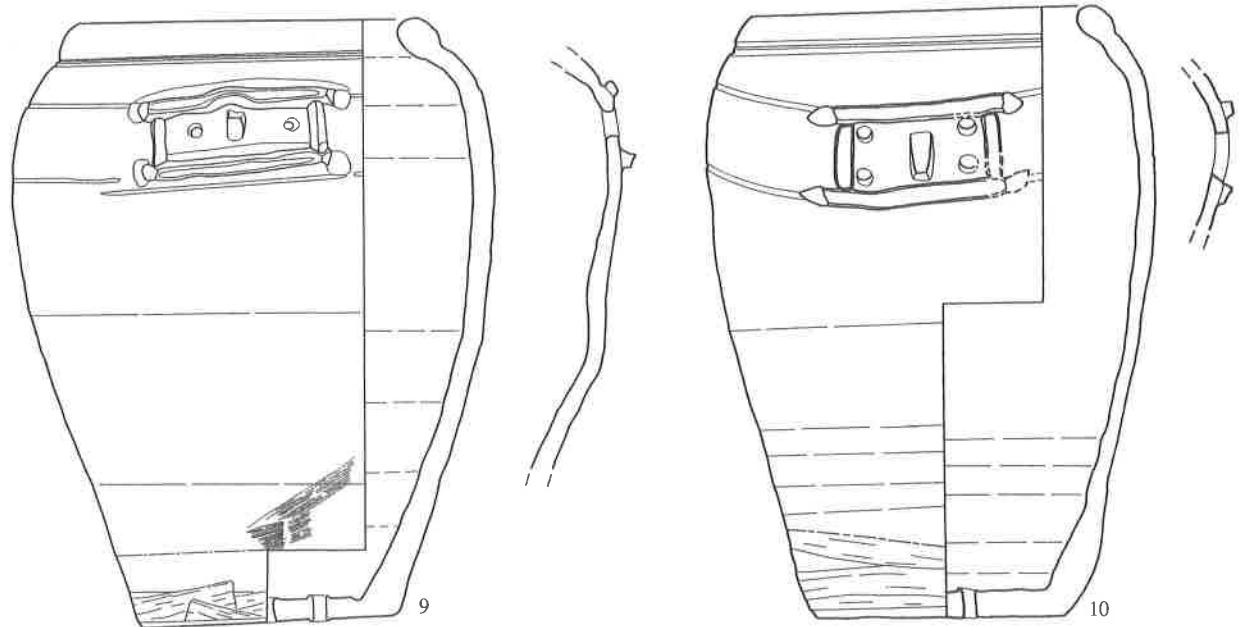
挿図No. 図版No. 遺物No.	種別	幅 高さ 奥行き (cm)	銘書	備考
図版4 1	石厨子身	58 46 33	西原村樽津□□□ □□□仁□□□ 未八月七□	琉球石灰岩製。正面に窓孔あり。赤色顔料による着色あり。
図版4 1	石厨子蓋	66 23 43		琉球石灰岩製。正面と左右の軒には方形の垂木を表現。赤色顔料による着色あり。
図版4 2	石厨子身	48 42 40	銘書あるが内容不明	琉球石灰岩製。正面に窓孔あり。
図版4 2	石厨子蓋	56 19 47		琉球石灰岩製。正面と左右の軒には方形の垂木を表現。
図版4 3	石厨子身	46 38 33	銘書あるが内容不明	琉球石灰岩製。正面に窓孔あり。赤色顔料による着色あり。
図版4 3	石厨子蓋	54 22 43		琉球石灰岩製。正面と左右の軒には方形の垂木を表現。赤色顔料による着色あり。
図版4 4	石厨子身	47 48 33	銘書あるが内容不明	琉球石灰岩製。正面に窓孔あり。赤色顔料による着色あり。
図版4 4	石厨子蓋	55 23 43		琉球石灰岩製。正面と左右の軒には方形の垂木を表現。赤色顔料による着色あり。
図版4 5	石厨子身	64 55 36	銘書あるが内容不明	琉球石灰岩製。正面に窓孔あり。赤色顔料による着色あり。
図版4 5	石厨子蓋	71 29 45		琉球石灰岩製。正面と左右の軒には方形の垂木を表現。赤色顔料による着色あり。
図版3 6	石厨子身	55 50 38		琉球石灰岩製。正面に窓孔あり。
図版3 6	石厨子蓋	57+ 28 55+		琉球石灰岩製。
図版3 7	石厨子身	58 45 38		琉球石灰岩製。正面に窓孔あり。赤色顔料による着色あり。
図版3 7	石厨子蓋	64 23 52		琉球石灰岩製。正面と左右の軒には方形の垂木を表現。赤色顔料による着色あり。
図版3 8	石厨子身	48 45 33		琉球石灰岩製。正面に窓孔あり。赤色顔料による着色あり。
図版3 8	石厨子蓋	60 25 40		琉球石灰岩製。正面と左右の軒には方形の垂木を表現。赤色顔料による着色あり。



第6図 99-1号墓 厨子甕身実測図1

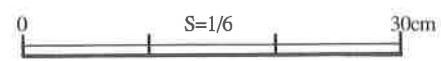
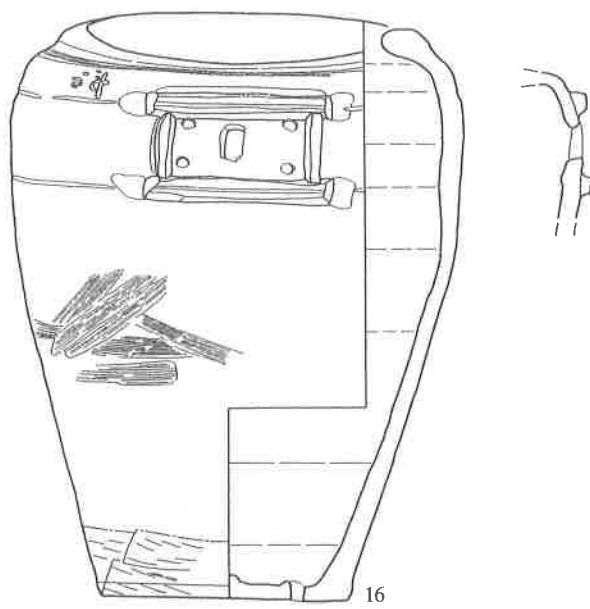
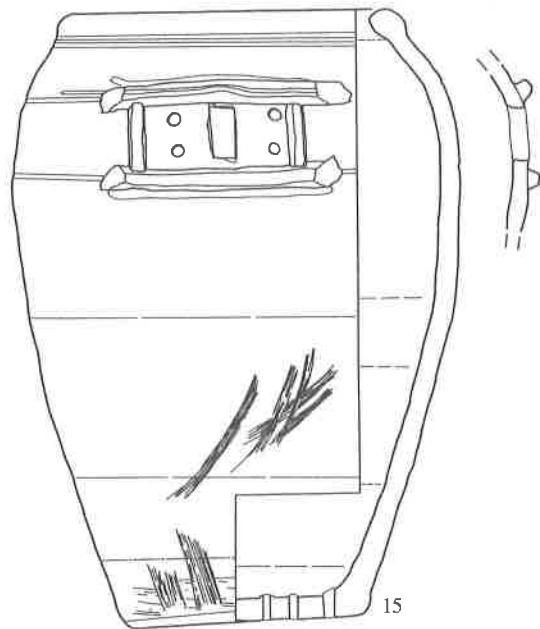
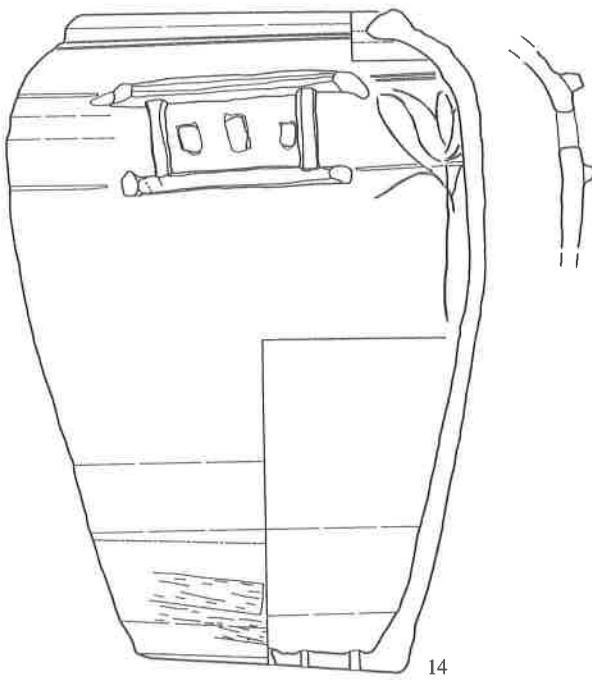
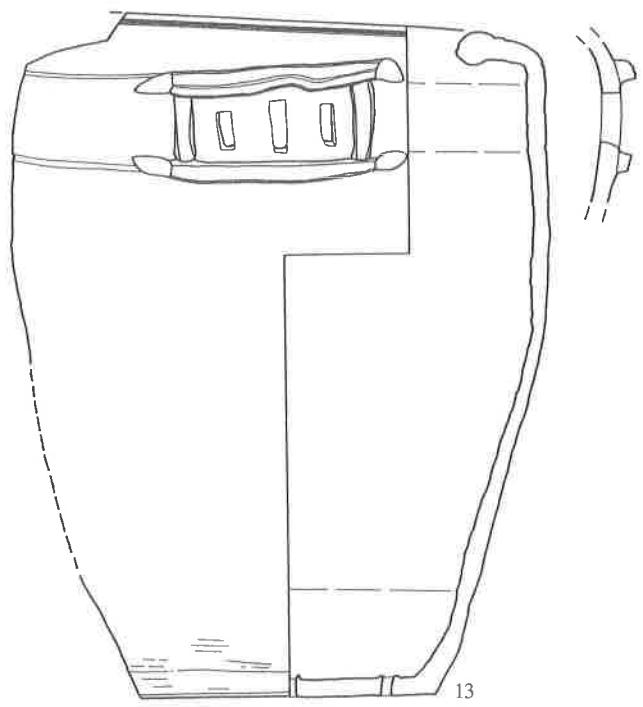


第7図 99-1号墓 厨子壺身実測図2

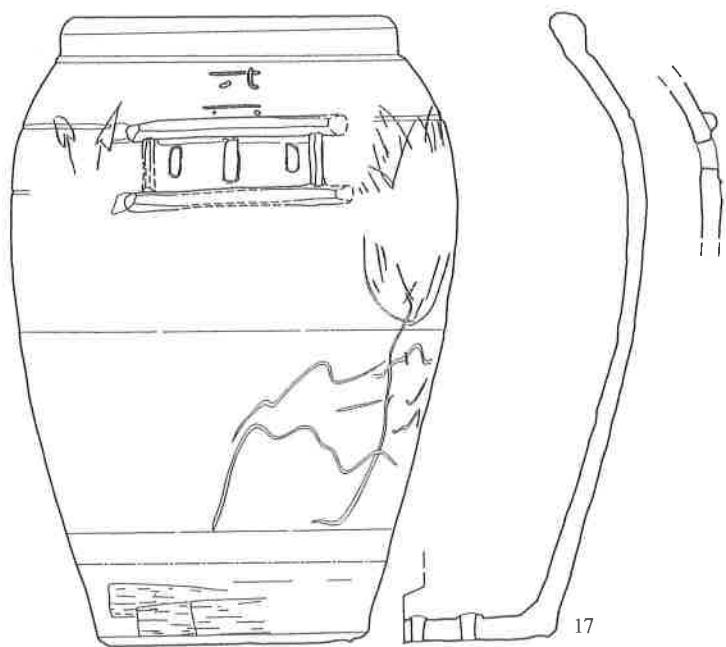


0 S=1/6 30cm

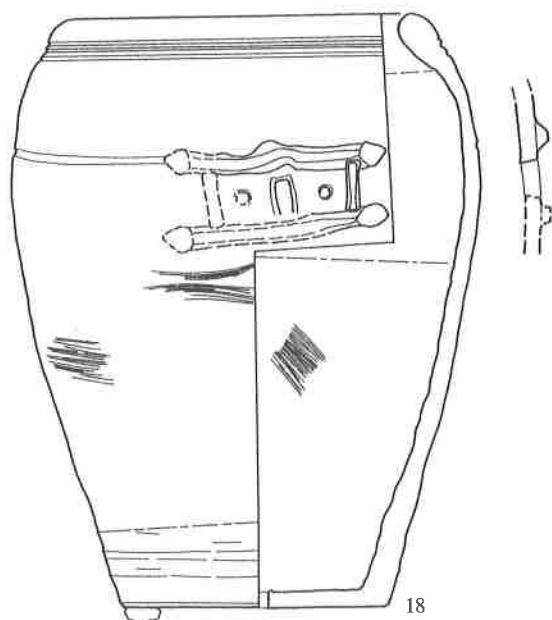
第8図 99-1号墓 厨子甕身実測図3



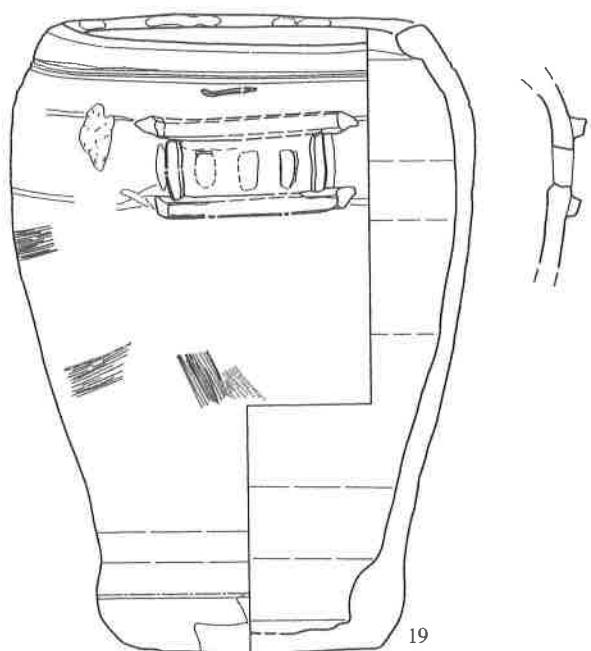
第9図 99-1号墓 厨子壺身実測図4



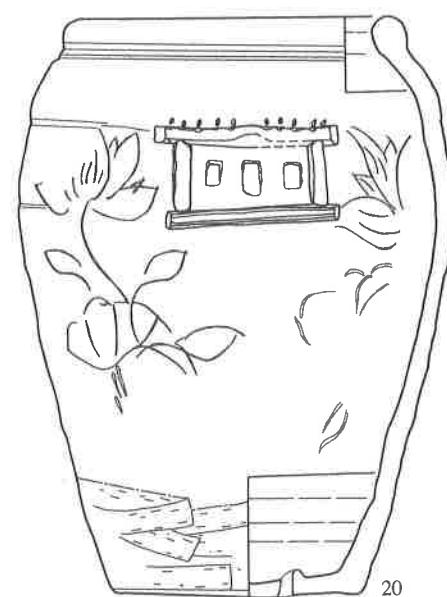
17



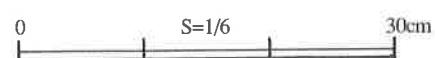
18



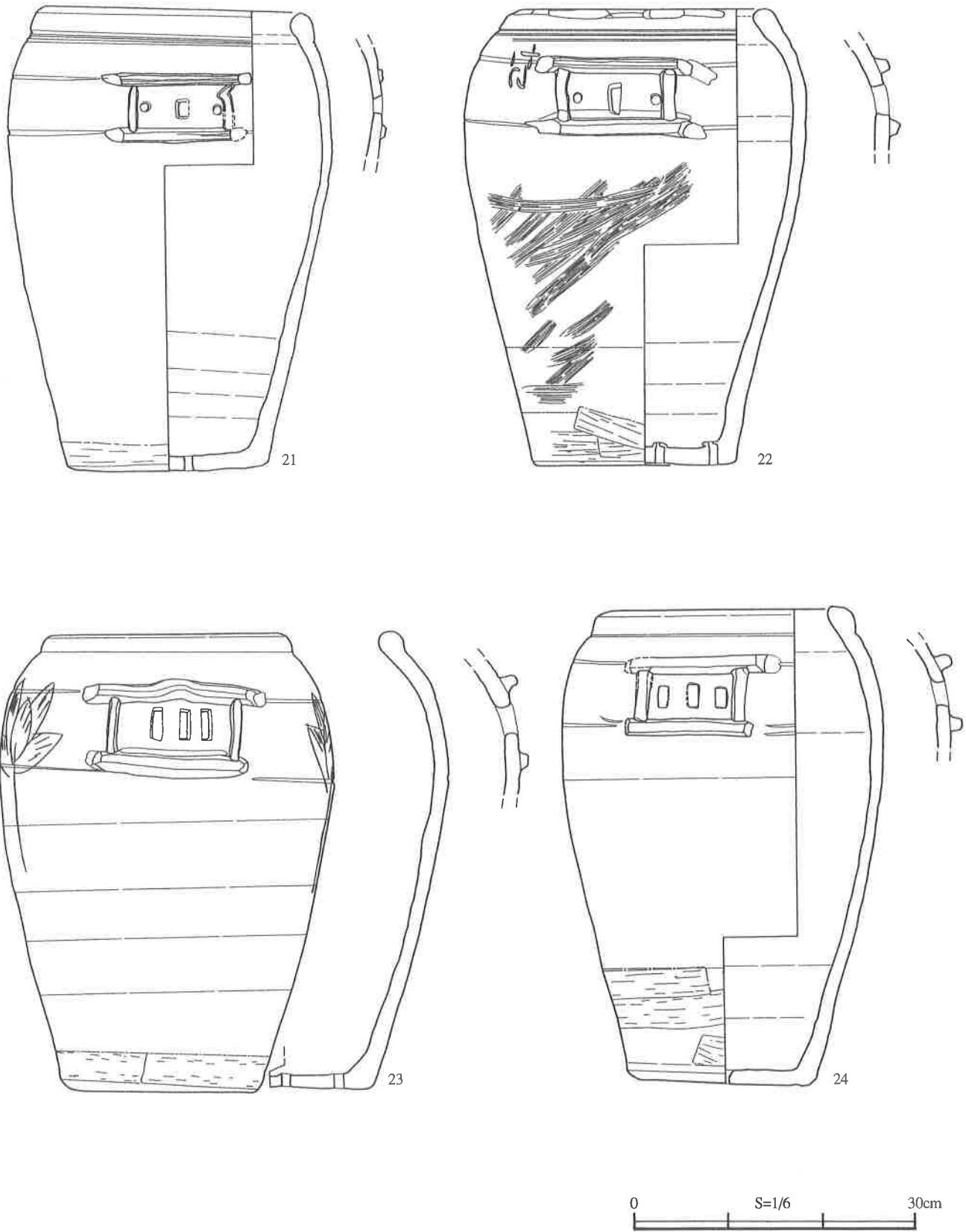
19



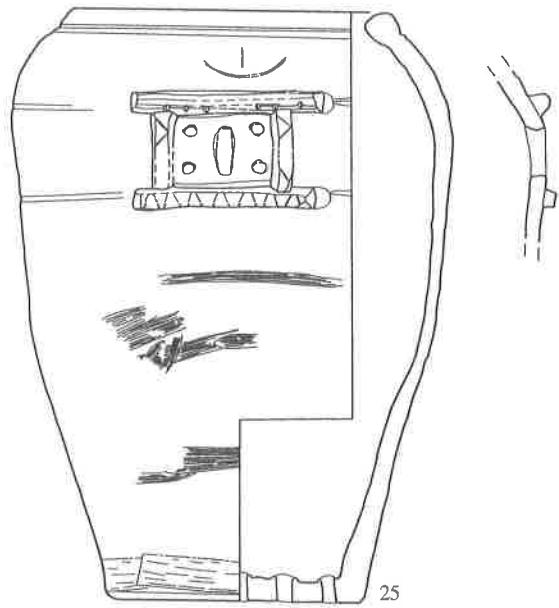
20



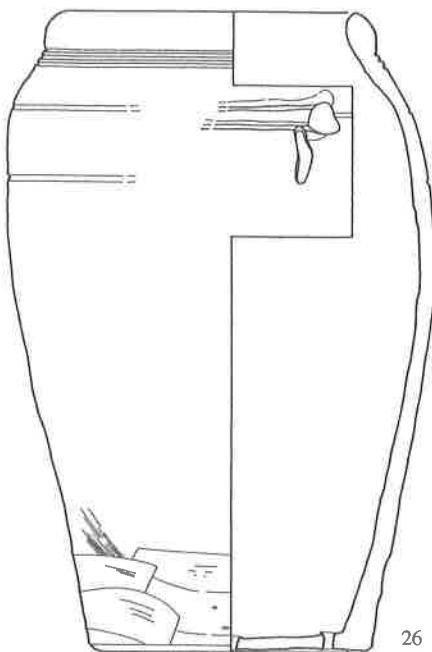
第10図 99-1号墓 厨子甕身実測図5



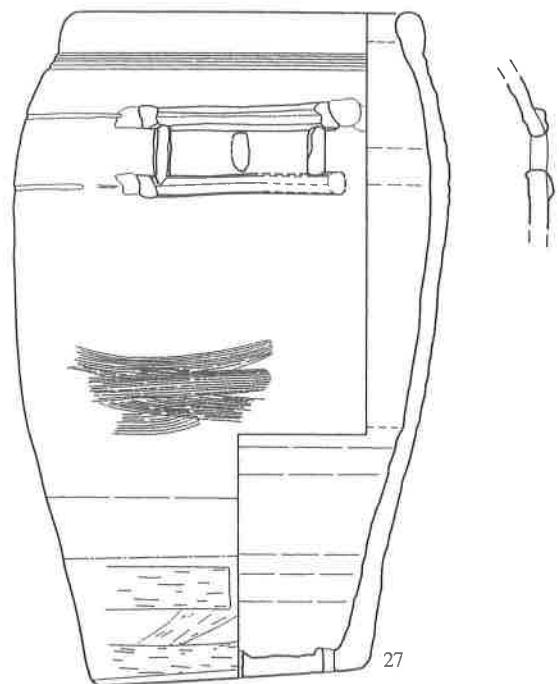
第11図 99-1号墓 厨子甕身実測図6



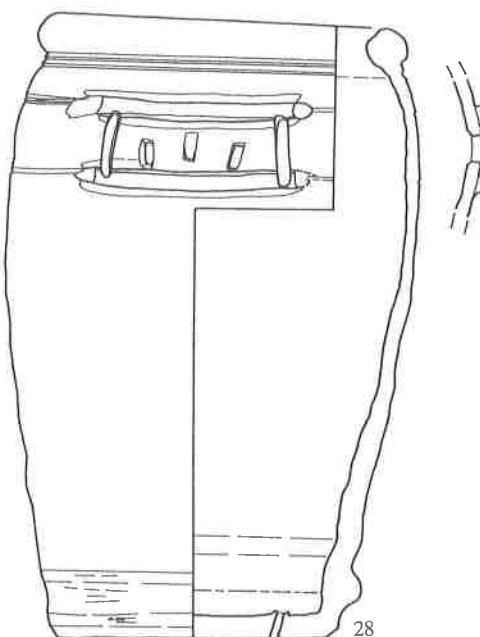
25



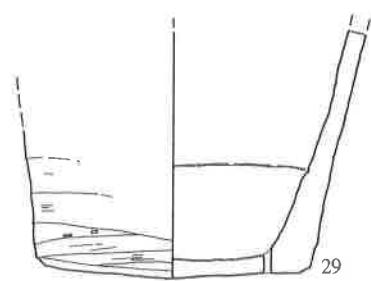
26



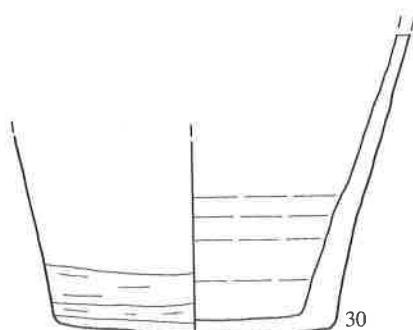
27



28



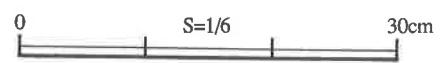
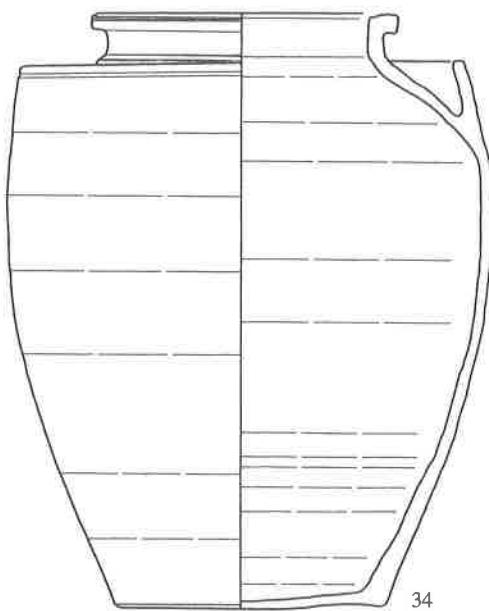
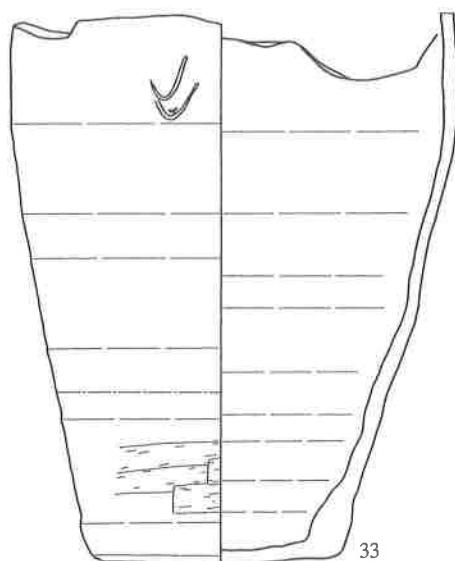
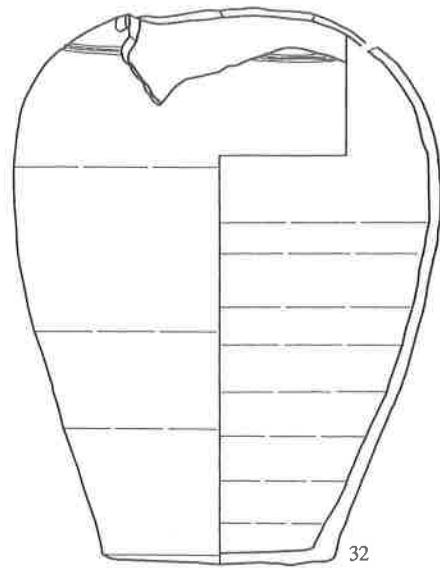
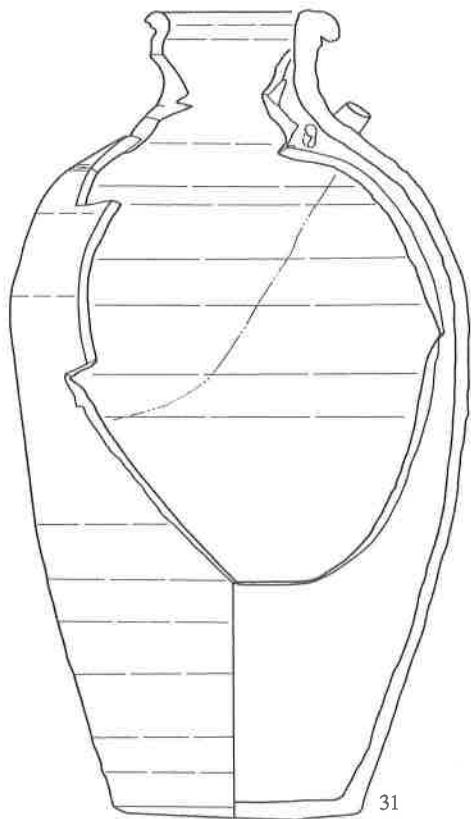
29



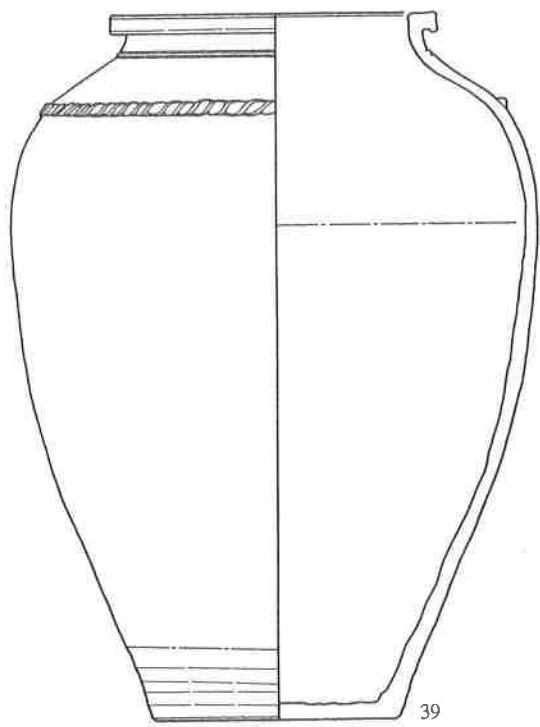
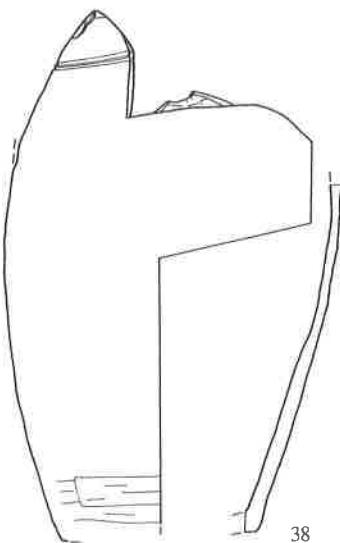
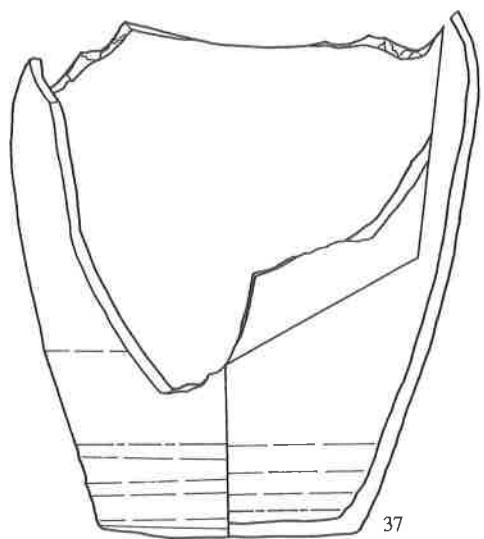
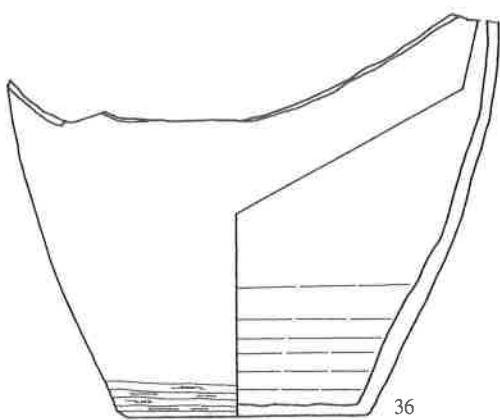
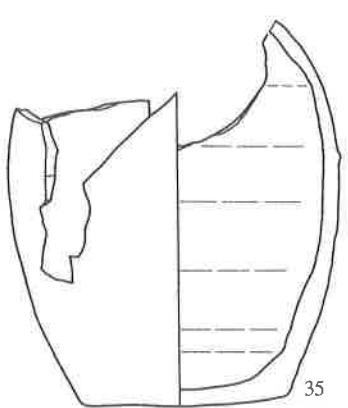
30

0 S=1/6 30cm

第12図 99-1号墓 厨子甕身実測図7

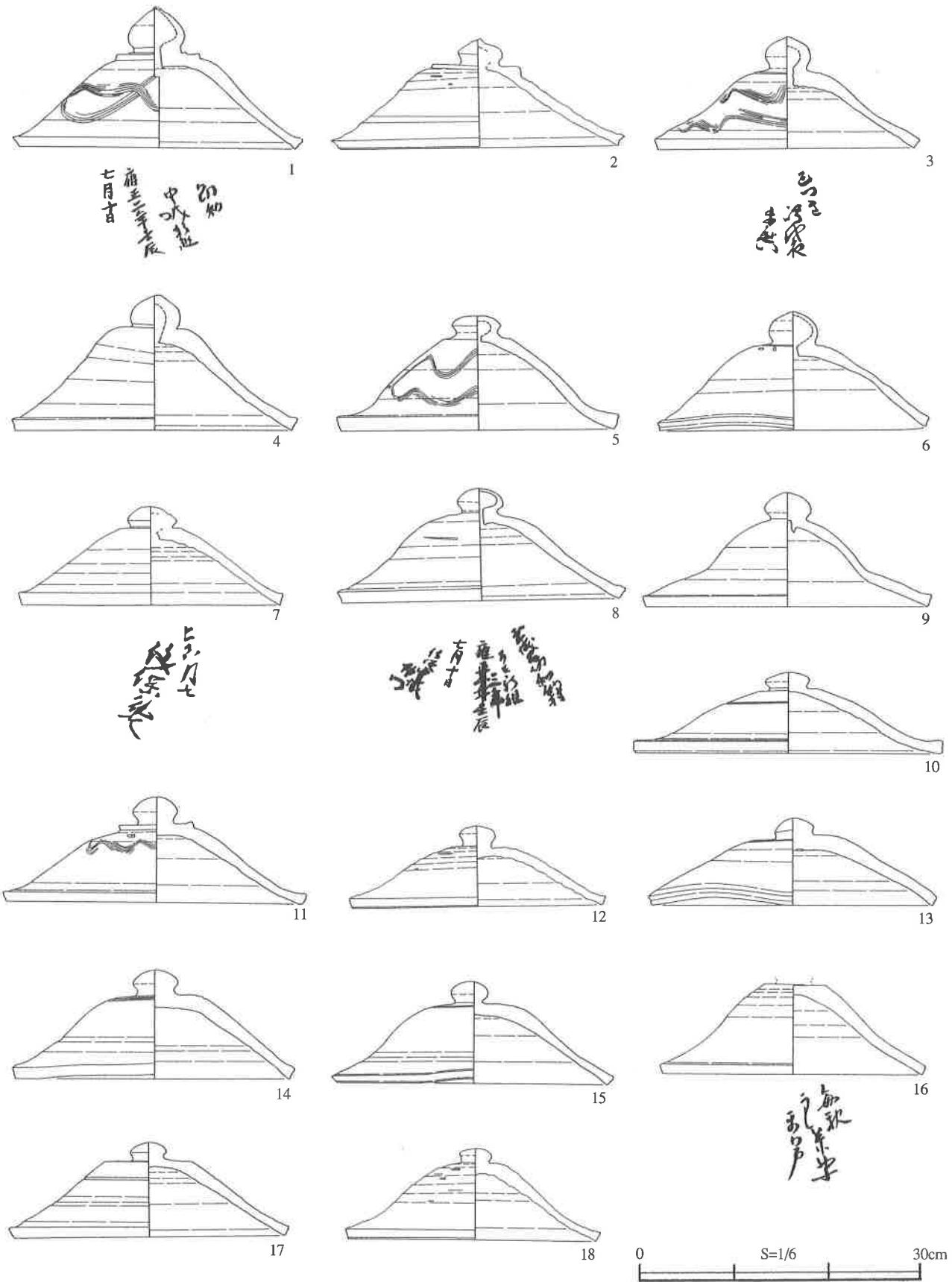


第13図 99-1号墓 転用厨子実測図1

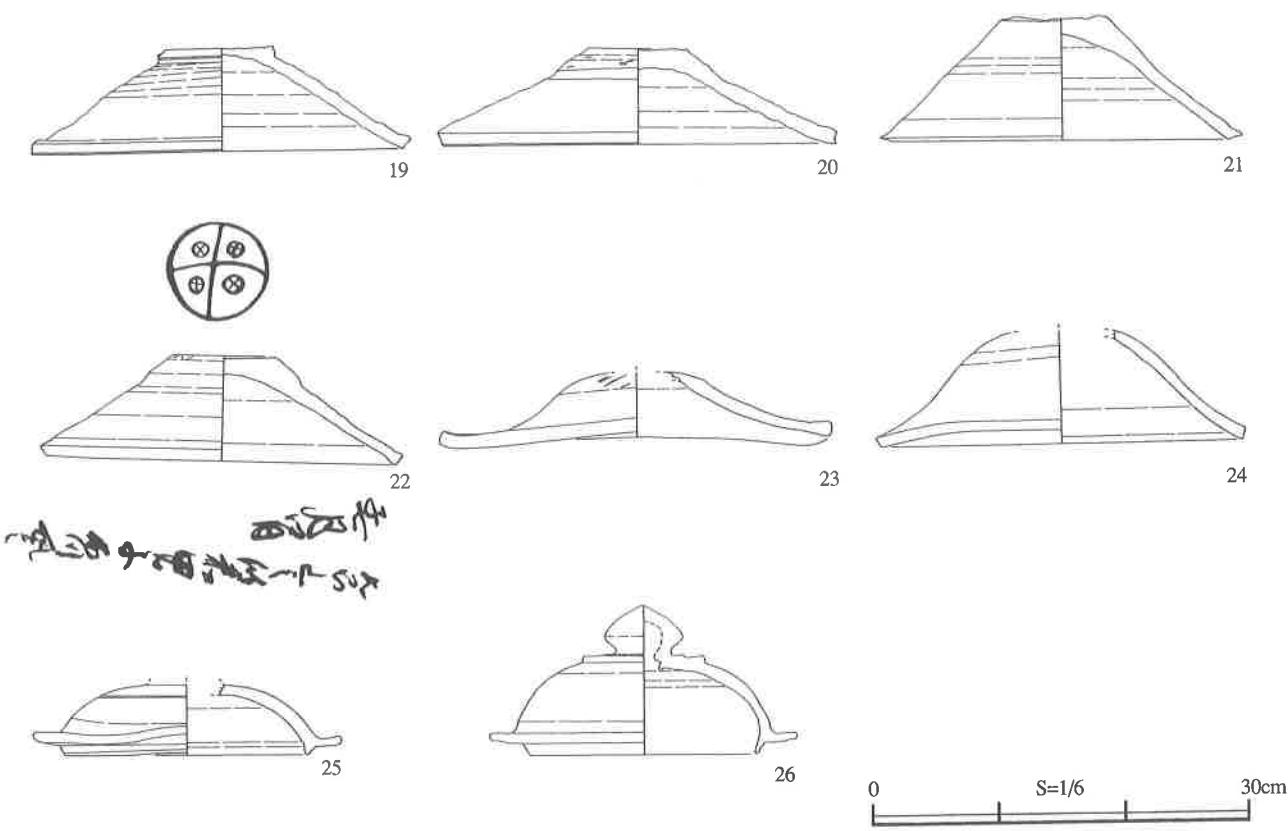


0 S=1/6 30cm

第14図 99-1号墓 転用厨子実測図2



第15図 99-1号墓 厨子蓋実測図4



第16図 99-1号墓 厨子蓋実測図2

## 04-1号墓

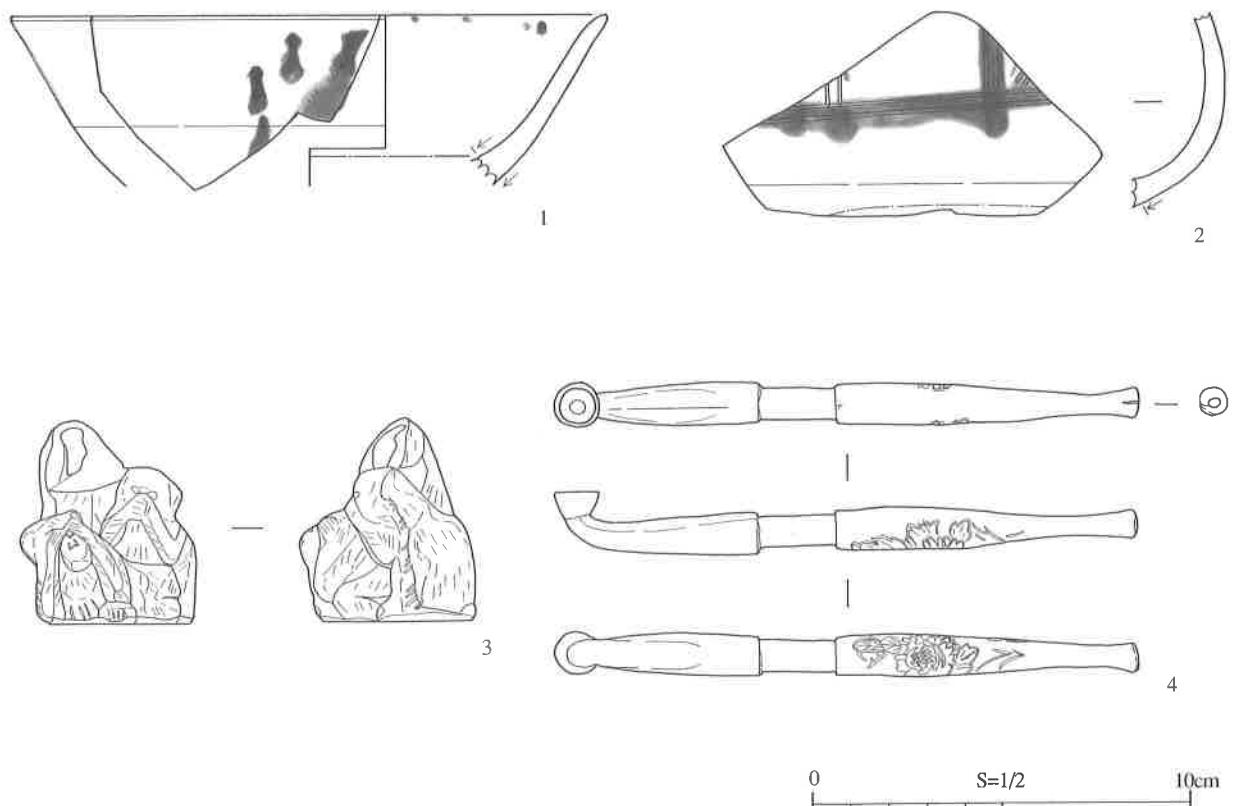
岩盤に横穴を掘り墓室をつくる。墓室床は、凹凸のある岩盤面に石灰岩の粉を数cmの厚さで固く敷きならし使用面を成形している。

現状では墓口を閉塞する構造物はない。墓室の掘削口は、墓室の幅・高さに比べやや小さい程度である。しかし出入口の天井はほぼ水平に加工されその左右端、特に左側が顕著にはぞ穴状に加工されているため木材を横に渡していたようである。また墓口の左手床で岩盤をくり抜いたピットを確認、墓口上部の水平加工部分の真下にあたるため、渡していた横材を支える柱のためのピットである。上部水平加工部とピットの間の墓口壁面にも柱にあわせた“えぐり”がある。ピットは墓口中央側の掘方がいびつで断面も上に開くように傾斜しており、柱材を設置するためのものと考えられる。ピットの埋土は石灰岩の粉で、それを除去すると石灰岩礫が数個出土。このピットと対になる墓口右手にもピットがあるが、岩盤の凹凸が激しく左手のものに比べ明確ではなく、柱材にあわせた墓口壁面の加工も確認できない。

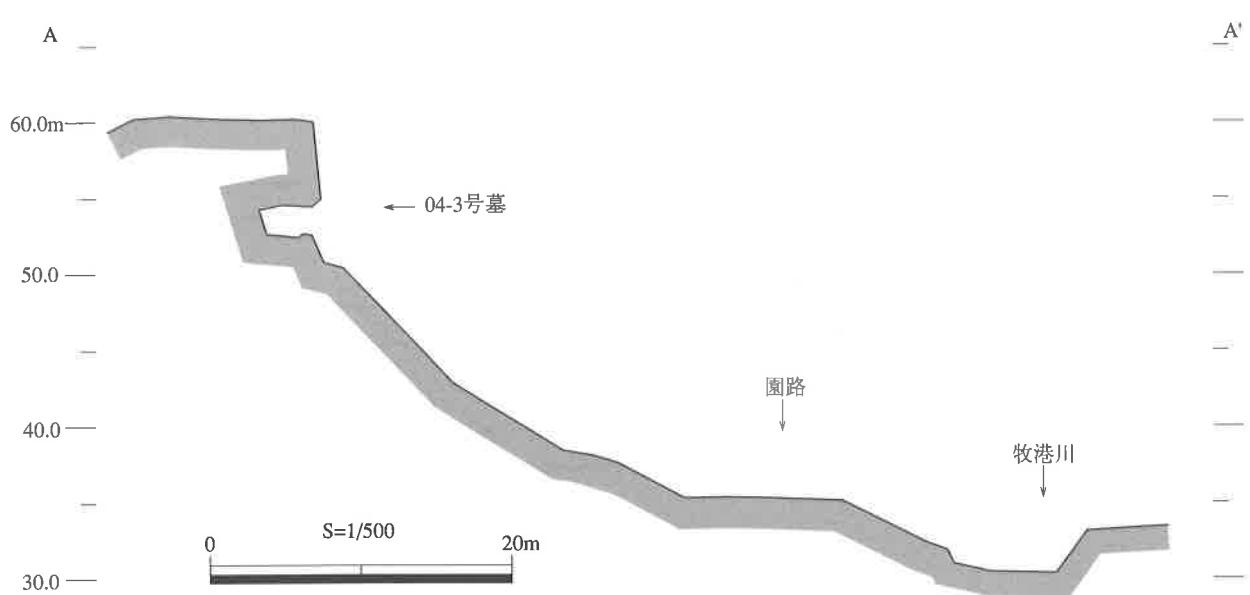
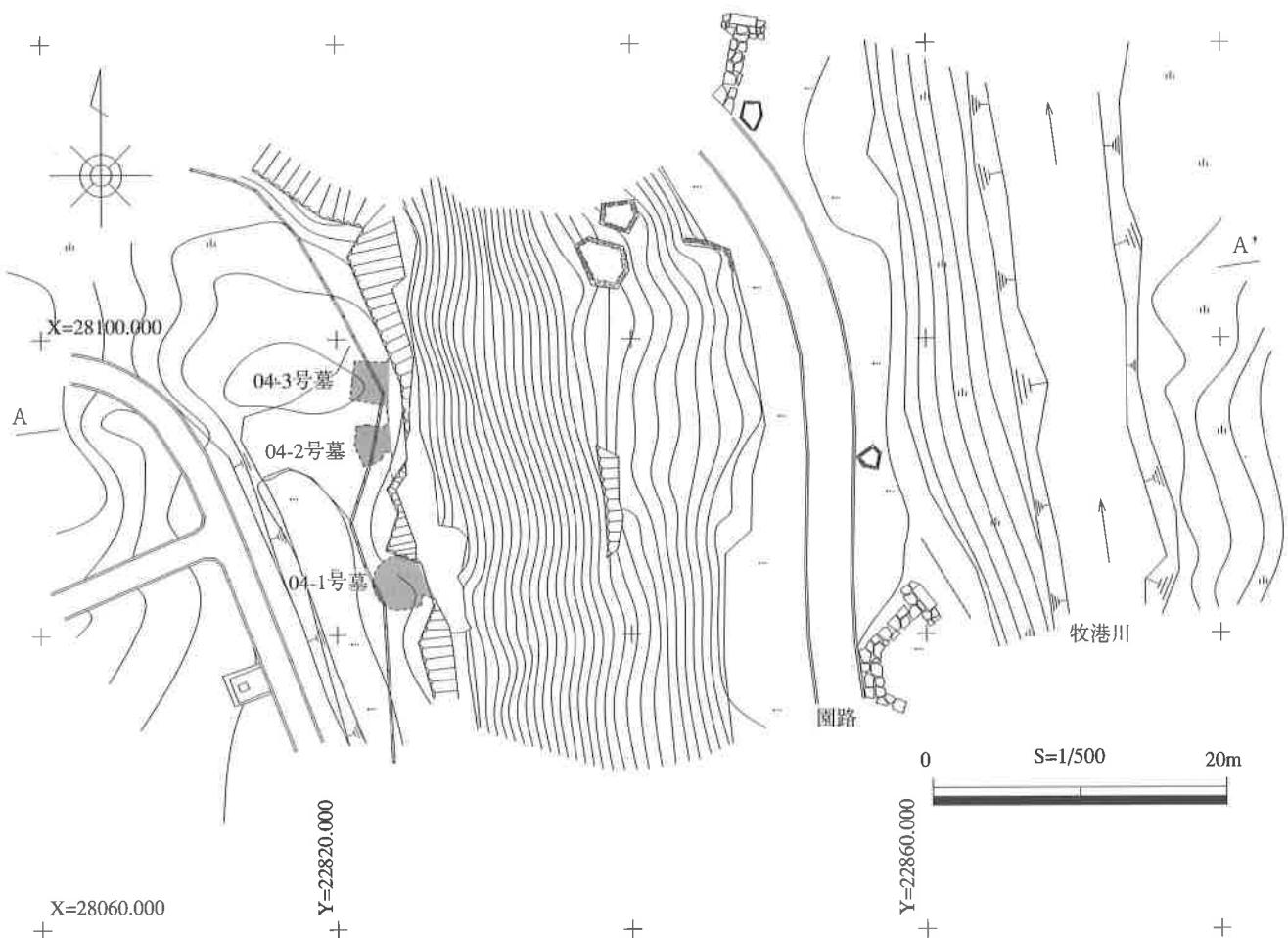
墓庭には一部平坦な岩盤が露出しており庭面とみられる。露出していない場所には赤土が堆積しているが、その下に石灰岩小礫を含む造成土がある。

墓は移転されており、墓庭の堆積土から人骨片と陶器・磁器片が得られている。

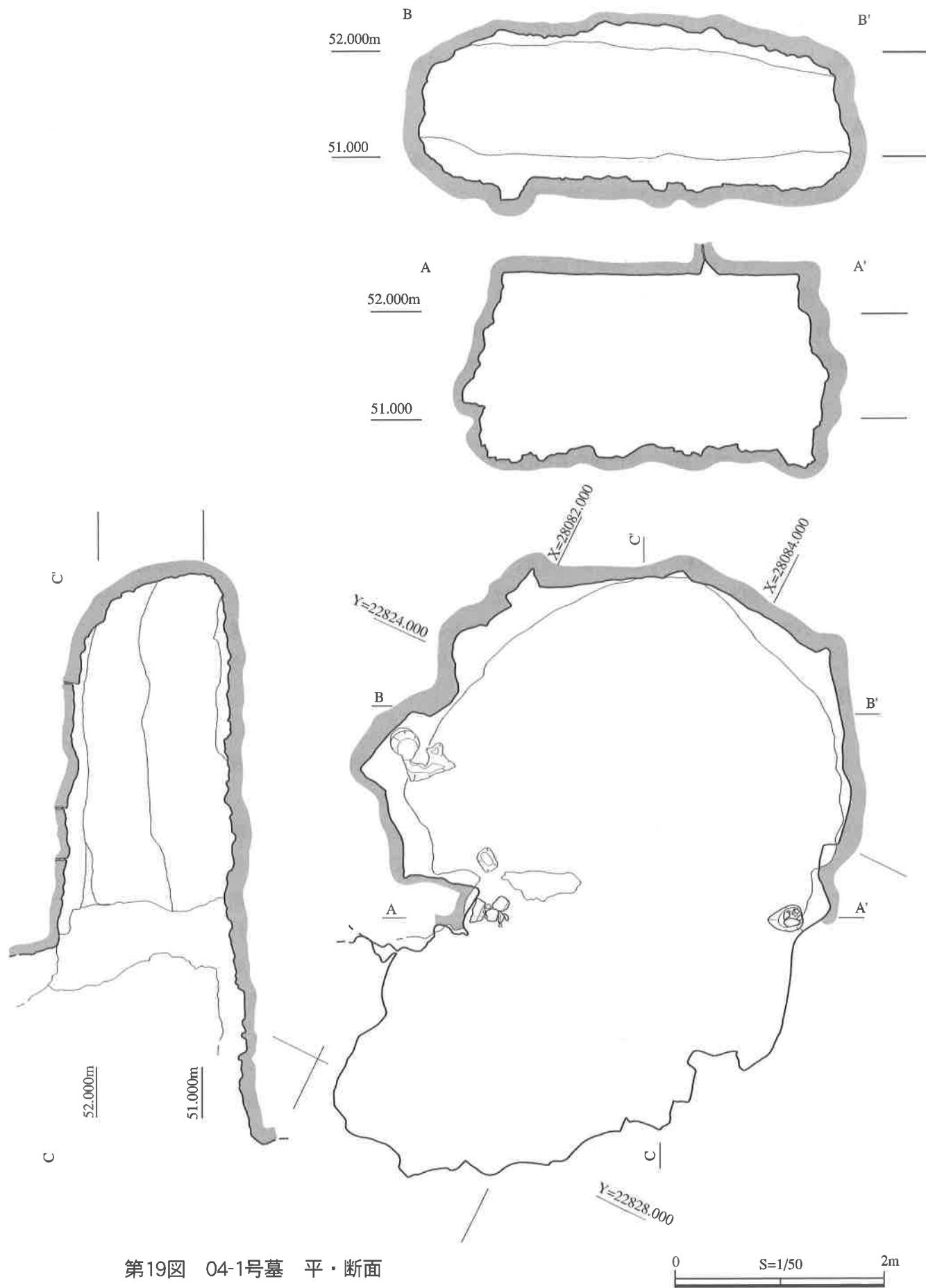
第17図1は沖縄産施釉陶器の碗。素地は黄褐色、内外面とも白化粧、外面に呉須と鉄釉で模様を描き全体に透明釉を施す。2は沖縄産施釉陶器の酒注の胴部。素地は黄褐色、外面は灰白色釉を施し底部近くに灰色釉で底部は搔き取る。模様を描いた沈線を呉須でなぞる。内面は灰白色。3は表採資料で素焼きの三猿の置物。前後二つの型成形で中空、底面に約3mmの空気抜きの孔を開ける。中央の「聞かざる」の顔面は欠失。



第17図 04-1号墓 出土遺物



第18図 調査区周辺 平・断面



第19図 04-1号墓 平・断面

4は帰属遺構は不明だが、04-2号墓との中間の堆積土から出土したキセルである。雁首・羅字・吸口とも銅製。吸口に牡丹が刻まれる。雁首にも何かしらが刻まれているようだがはつきりしない。

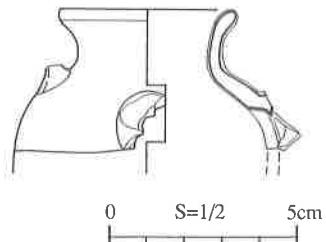
#### 04-2号墓

岩盤に横穴を掘り墓室をつくるが、天井の岩盤には無数に亀裂があり崩落の危険性があるため墓室の発掘は行わなかった。

現状では墓口を閉塞する構造物はない。墓室には頭部よりひとまわり小さい石灰岩塊が複数あったが、閉塞石であったのか天井・壁からの剥落か否か不明。他に入骨と木材が散乱していた。

墓庭に相当する場所はないが、崩落により消失した可能性もある。

墓室で表採遺物を得ている。図は青磁の水注。素地は白色で緻密。



第20図 04-2号 表採遺物

#### 04-3号墓

墓室の層序については第21図のように層名をつけたが説明を加えておく。

第3層は墓室の奥寄りに存在する層で断面では第4層との重なりが確認できなかった。第3層は表土・第1層と第5層に挟まれており、第2・4層との前後関係はわからない。しかし第3層と第4層から人骨が出土しておりこの両層の人骨を比較すると、お互いその層にない種類の骨がもう一方の層から出土していること、両層から同一人物とみられる人骨が出土していること、第4層から大量に出土した漆塗膜片がわずか2点ではあるが第3層からも出土していることから両層は密接な関係にあるとみられ、両層の間に第2層とした層が存在する可能性は低い。そして第5章総括で述べるように墓の変遷を考えた上で層序を把握し層名をつけた。

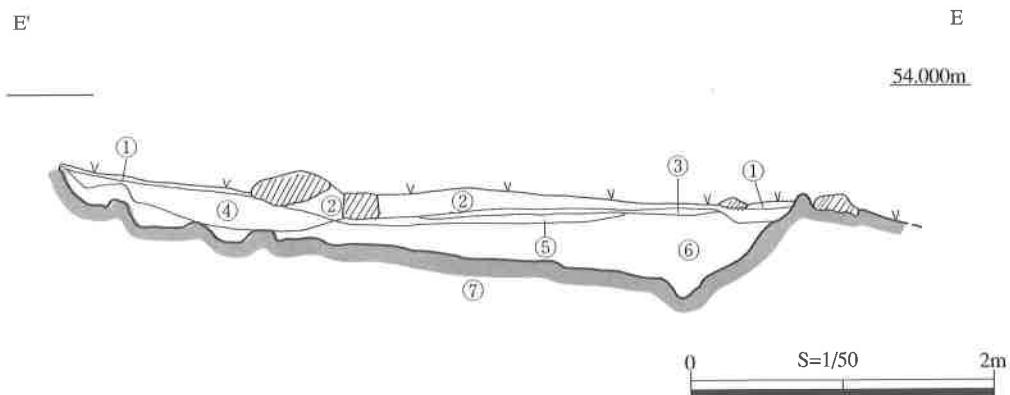
他の2基と同様、岩盤に横穴を掘り墓室をつくるが墓室を塞ぐ構造物はない。現状での墓口側壁に木材を立てられるような凹みが確認できるが、加工によるものか否か明確でない。

墓室左半分の表土からごく少量の骨片が出土。同様に右側で表土除去作業を行うが、この時墓奥では表土の下にある第3層も、墓口近くでは第5層上面まで掘削してしまう。第3層から大量の人骨が出土していたが、すでにほとんどが取り上げられていたため出土状況は不明。実際に掘削した作業員に確認したところ人骨はバラバラに散らばっている状態であったという。まだ取り上げられていない人骨もあったが小型のものや破片が多く、これだけでは全体の概要はうかがえなかった（なお第3節で述べる放射性炭素測定の試料は、調査員が発掘・取り上げを行った出土層が明確なものを使用している）。この段階で墓中央では第2層上面が露出していた。同層はしまりが良く、またごく薄く木片かと思われる有機物が堆積しており一時期の使用面であろう。

墓室中央から墓口に存在する第2層の下には第4層があり、この第4層から微細ではあるが大量の漆塗膜片（うるしとまくへん）と少量の鉄釘が出土した。朱漆塗りの木製厨子（漆龕）が安置されていたと考えられる。漆塗膜片は墓室の中央やや奥側に特に集中して分布していた。

第5層上面の墓室四隅から礎石が出土。材質は礎石1～3までいすれも細粒砂岩が凝固したいわゆる「ニービの骨（フニ）」である。礎石1は4点に破損分割していたが長径約30cm・短径約23cm、厚さ約3cmを測る。礎石2は直径約35cm、厚さ約7～2cm、礎石3は方形で約25×18cm、厚さ約12cmである。

## 04-3号墓



①10YR6/3にぶい黄橙・極細砂。〔表土〕

②10YR6/4にぶい黄橙・極細砂、中砂～粗砂含む。しまりがなくぼろぼろ。砲弾片やアルミ製コイン出土。〔第1層〕

③10YR6/4にぶい黄橙・極細砂～細砂、中砂をわずかに含む。しまり良。層上面にごく薄く有機物（木片？10YR4/3にぶい黄褐）がある。〔第2層〕

④10YR6/4にぶい黄橙・極細砂、中砂～粗砂含む。しまり良。この層から人骨片のほとんどが出土したとみられ、断面でも人骨が確認できた。〔第3層〕

⑤10YR5/4にぶい黄褐・極細砂～細砂。しまりなし。細骨片を多量に含み、土層というより細骨片層か〔第4層〕

⑥10YR7/4にぶい黄橙・極細砂～細砂、極粗砂～直径5cm前後の礫含む。しまりやや良。層中から礫石と同質とみられる石片数点出土。層上面は礫石設置時の使用面か。〔第5層〕

⑦岩盤

第21図 04-3号墓 墓室土層断面

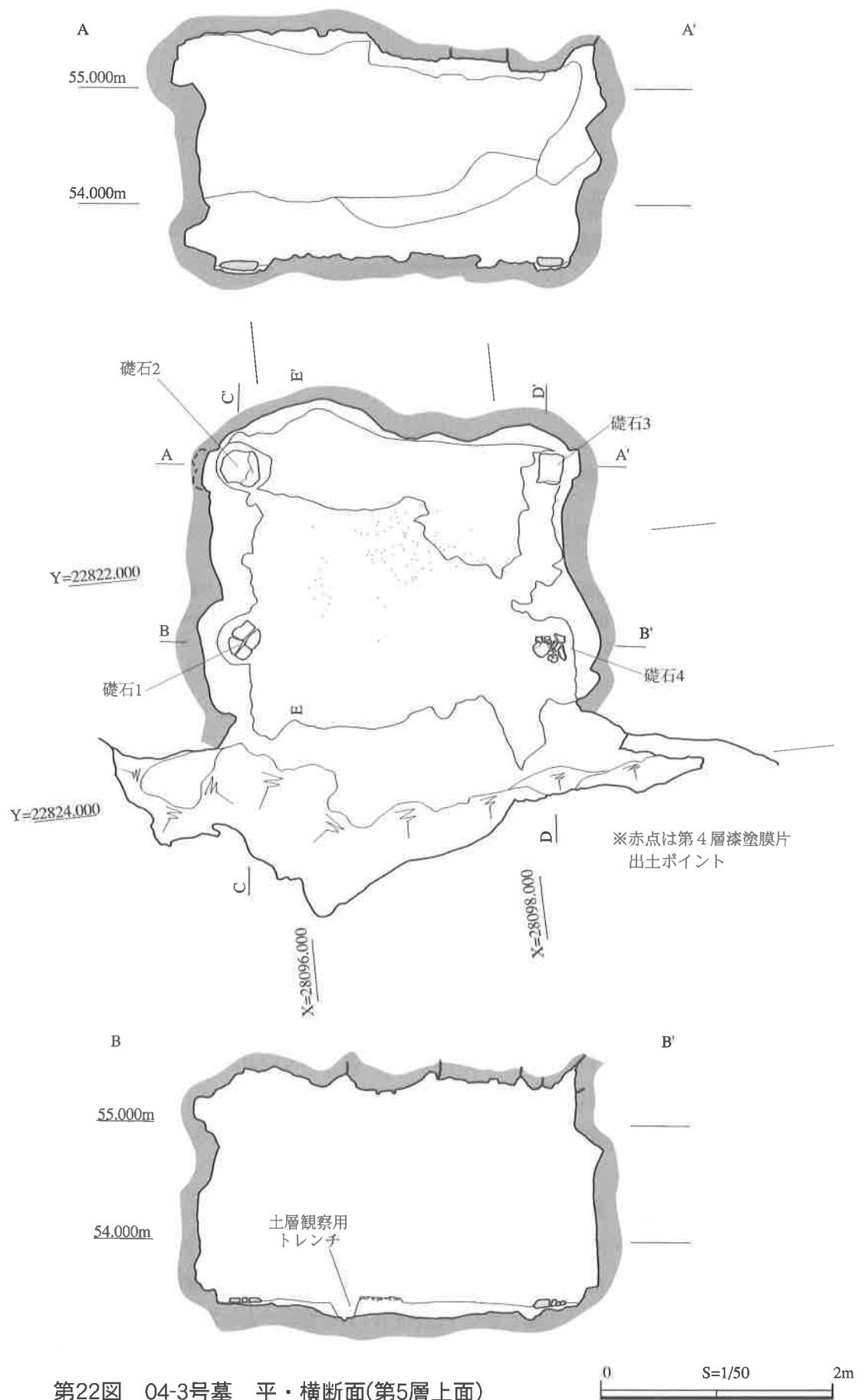
いずれの礫石もひとまわり大きく岩盤を掘り凹めたところに石灰岩の粉を厚さ1～2cmほど充填してから設置されている。礫石4は他の三つから考えられるプランの位置に直径約25cmの範囲に石灰岩礫10個前後が集まっているものである。その後の作業でこの“集石礫石”の規模より大きめで位置が若干ずれるピットが確認できた。これら礫石設置のためのピット底面の岩盤は平坦に加工されていた。

第5層から礫石1～3と同質とみられる石片が数点出土しており、このことから同層は礫石を設置するための造成層と考えられる。第5層下の床面の岩盤は墓口方向に、かつ墓室中央に向かって下り傾斜をもって加工されているが、墓口部分は堤防のように掘り残されている。

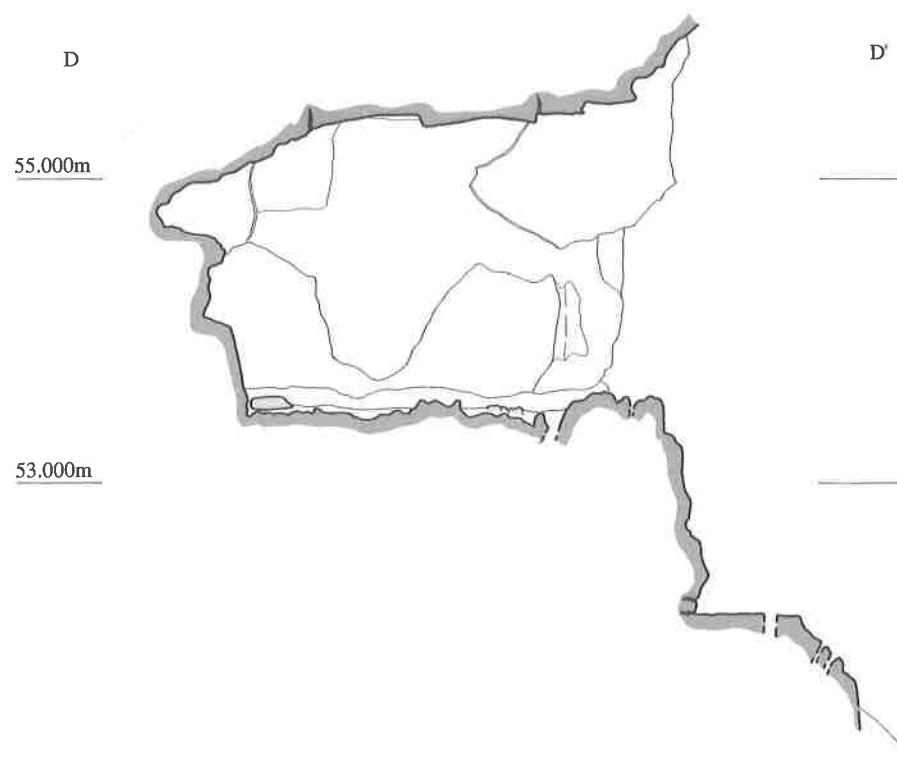
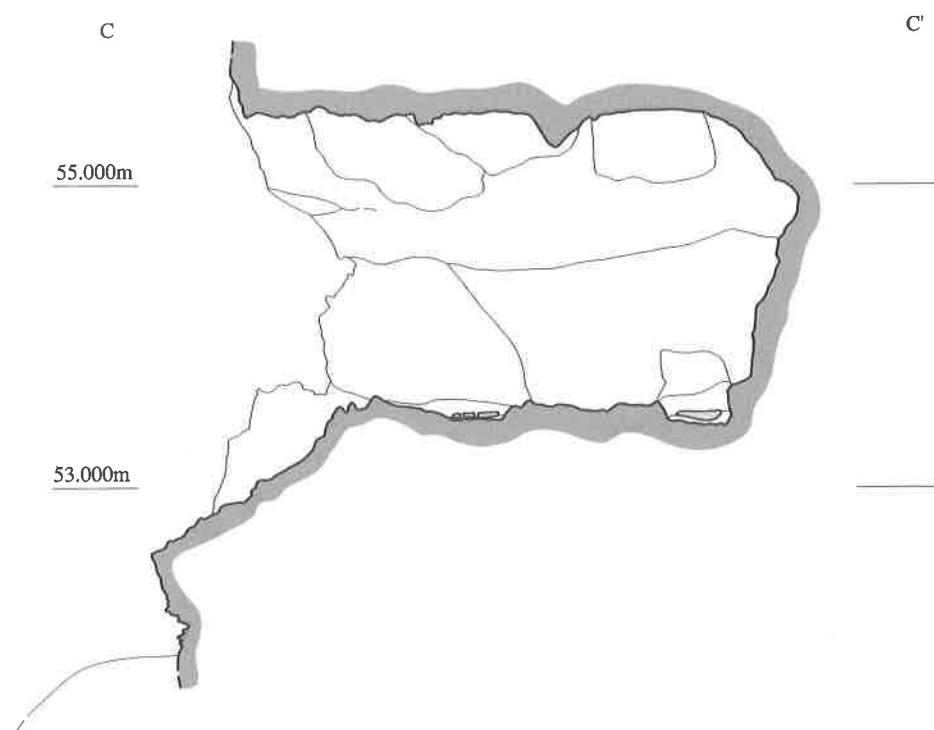
遺物は先に述べたように第4層から漆塗膜片と鉄釘が出土している。鉄釘は劣化が激しく図化に耐えない。漆塗膜片は第4節に譲り、その他は次の2点のみである。

第26図2は銅釘で全体的に錆膨れをおこし先端部は剥離している。長さ3.5cm。第2層（第4層上面）出土。

1は洪武通寶の当三錢で、背面には摩滅が著しいが「三錢」と鋳出される。錢径3.40cm（縦）・3.37cm（横）、内径2.77cm（縦）・2.66cm（横）、厚さ0.16～0.17cm、重さ8.77g。この遺物は“第5層”的掘削を開始してすぐに出土した。出土時点であらためてその層を確認したが、その場所は墓室壁面に極めて近いため層の厚さ自体が極めて薄くすぐ下は凹凸のある岩盤であった。このような状況では層の把握が困難で第5層からの出土か断言できない。ただし出土地点はすでに取り上げた第3層人骨が出土した範囲であることから、第4～5層の遺物と判断できる。

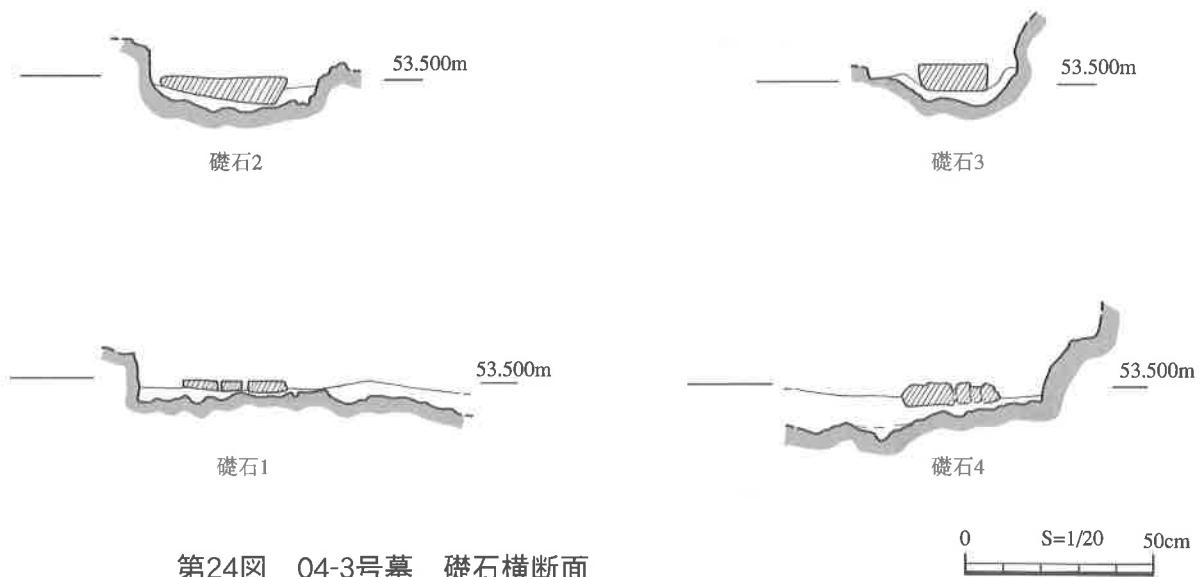


第22図 04-3号墓 平・横断面(第5層上面)

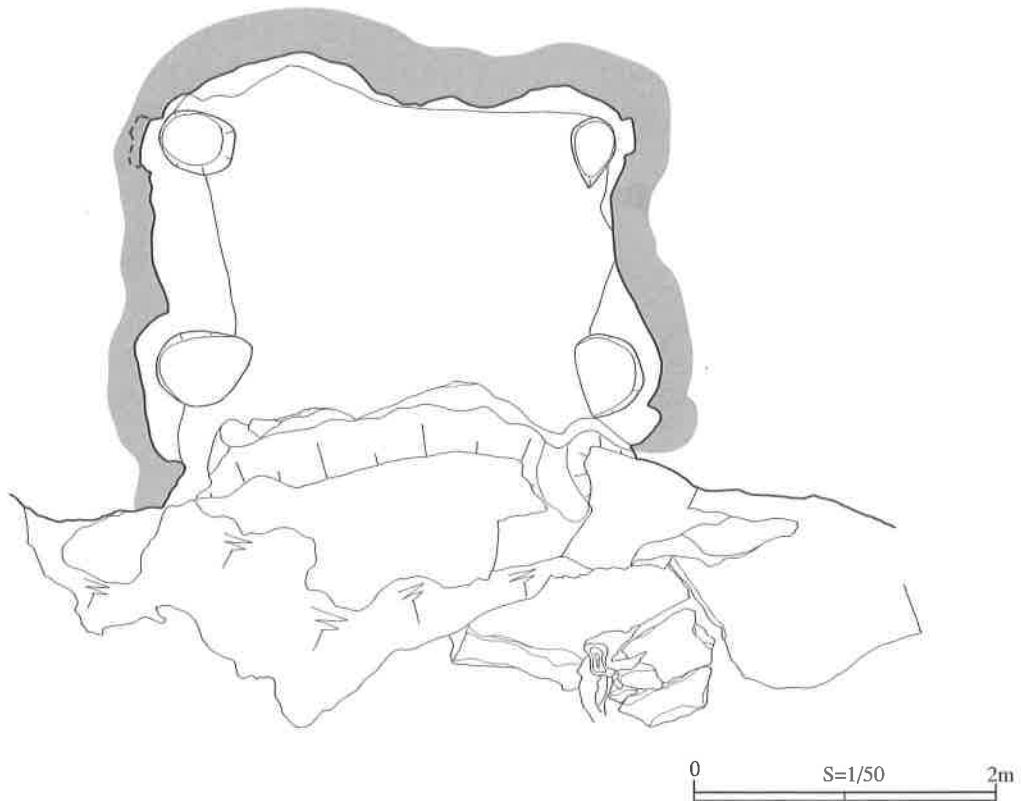


第23図 04-3号墓 縦断面

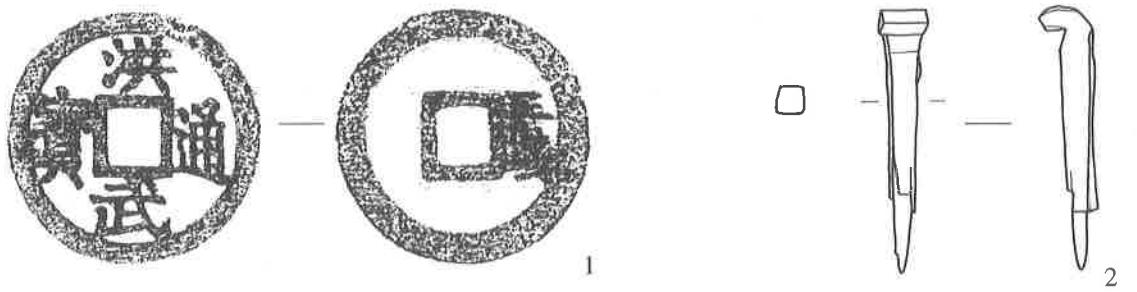
0 S=1/50 2m



第24図 04-3号墓 磊石横断面



第25図 04-3号墓 完掘平面(岩盤面)



第26図 04-3号墓 出土遺物

0 S=1/1 5cm

## 第2節 04-3号墓出土人骨

3層、4層より大量の人骨が出土した。3層の人骨は長骨など割と大きな部位が多く比較的保存状態もよかつたので、識別は容易であった。それに対し4層の人骨は風化が進んだためと思われる微細な骨片と小さな骨や歯が多くかった。個体の特定は難しかったので、識別できた部位の中で最も多い数から最小個体数を推定した。

年齢区分は一般的に人類学で用いられているもので、乳児（出生～1歳）、幼児（1～約6歳）、小児（約6～約14歳）、若年（約14～約20歳）、成人（約20歳以上であるが詳細は不明）とした。

### 最小個体数

年齢区分 出土層	誕生前後	乳児	幼児	小児	若年	成人	合計
3層	0	1	1	1	0	2	5
4層	1	1	3	2	2	4	13
合計	1	2	4	3	2	6	18
割合	6%	11%	22%	17%	11%	33%	100%

※小児と若年に関しては年齢差が明らかであったので、その個体に関しては合計した。

最小個体数ではあるが被葬者の構成をみてみると、未成人は67%で全体の半分以上を占めている。時代は違うが近世墓人骨での未成人骨の構成割合は小禄ガジャンビラ：25.0%、銘苅古墓群：27.0%、ナーチューモ：33.0%である。今回はあくまで最小個体数での構成なので簡単に比較することはできないが、それでも近世に比べて未成人の死亡率の高さを示していると考えた場合、成人骨では加齢による形態の変化があまり確認できなかった事や、歯もひどく擦り減った歯は少なく咬耗度はBrocaの2度程

度であった事などから、熟年未満で亡くなっている人が多いと考えられ、未成人の死亡率は高く成人の長寿率の低い当時の生活環境の厳しさがうかがえる。

以下、確認できた部位と推定年齢を述べる。

### 3層出土人骨

乳児 未萌出m<sub>2</sub>

下顎骨片、上腕骨片、肩甲骨片、肋骨片

幼児 m<sub>2</sub>、未萌出I<sup>1</sup>・C・I<sub>2</sub>・C・P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>

四肢骨片、未癒着尺骨下端、椎弓片、指骨片

小児 未癒着骨→8歳頃

成人 I<sub>2</sub>×2・C×2、上顎P×2、下顎P×4、M<sup>3</sup>

未萌出M<sup>3</sup>

擦り減り方に差のあるM<sub>1</sub>×3

下顎骨片、第2頸椎、胸椎、腰椎（やや骨棘あり）、鎖骨片、肋骨片、橈骨、第3中手骨、指骨、大腿骨、脛骨（右）×2（サイズ差あり）、腓骨中足骨、距骨、踵骨、趾骨

### 4層出土人骨

誕生前後 未萌出c・i<sup>2</sup>・i<sup>1</sup>

乳児 歯根未形成のc・m<sup>1</sup>・m<sup>2</sup>・m<sub>1</sub>、歯冠形成中P<sup>1</sup>・M<sup>1</sup>・M<sub>1</sub>→約1歳

歯根形成中のm<sup>1</sup>・c→約1歳

頭蓋骨片、鎖骨片、四肢骨片、指骨骨端、肩甲骨片、椎体（腰）、腓骨片、指骨、肋骨片、咽頭結節

幼児 (M<sup>1</sup>)・m<sup>2</sup>・m<sup>1</sup>・i<sup>2</sup>・i<sup>1</sup>・m<sup>1</sup>・(M)×2・m<sub>2</sub>・m<sub>1</sub>・(I<sub>1</sub>・I<sub>2</sub>)・m<sub>2</sub>・(M<sub>1</sub>)→約2歳

未萌出I<sup>1</sup>・C・P<sup>1</sup>・M<sup>1</sup>・M<sub>1</sub>→約3歳

c・m<sup>1</sup>・m<sub>2</sub>、歯冠形成中I<sup>1</sup>→約4歳

下顎骨片、四肢骨片、肋骨片

小児 Broca 0～1度のm<sub>1</sub>、未萌出M<sup>1</sup>・P<sup>2</sup>→約7歳

歯根形成中のM<sub>1</sub>・P<sub>1</sub>→約9歳

m<sup>1</sup>・m<sup>2</sup>・m<sub>2</sub>、歯根形成中M<sup>1</sup>・M<sup>2</sup>・I<sub>1</sub>・C・P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・M<sub>1</sub>・M<sub>2</sub>→約7～8歳

未癒着骨端：脛骨下端・足の第1中節骨・腓骨・橈骨・指骨上端、橈骨骨頭、指骨、椎骨、頸椎

若年 I<sup>1</sup>・I<sup>2</sup>・C・M<sub>2</sub>、未萌出M<sup>3</sup>→12歳未満

未萌出第3大臼歯、指骨未癒着骨端→15歳頃

上腕骨片、骨端未癒着の指骨、未癒着骨端、第5中足骨、下顎片、未癒着上腕骨骨端

成人

Broca 0～1度のI・C・P<sup>1</sup>・M<sup>1</sup>・M<sup>2</sup>・M<sup>3</sup>・P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・M<sub>1</sub>・M<sub>2</sub>・M<sub>3</sub>

Broca 2度のC・M<sup>1</sup>・M<sup>2</sup>・M<sup>3</sup>・M<sub>1</sub>・M<sub>2</sub>

Broca 2～3度I<sub>2</sub>・M<sub>2</sub>

Broca 3度のM<sup>2</sup>

頭蓋骨片、舌骨、鎖骨、肋骨片、胸椎、腰椎、椎骨、上腕骨、尺骨片、橈骨、手根骨（小菱骨、大菱骨、有頭骨、有鈎骨、舟状骨、月状骨）、第1中手骨、第3中手骨、第4中手骨、第5中手骨、手の中節骨、手の基節骨、手末節骨、脛骨、膝蓋、腓骨、踵骨、足根骨（方形骨、足の舟状骨（右）×4、内側楔状骨）、第1中足骨、第5中足骨、足の第1中節骨、足の第1末節骨（右）×4（左）×4。

今回の調査で特徴的な事は4層では手根骨、足根骨、手足の基節・中節・末節骨まで見られる事である。こういった細かな部位が見られる事は他の場所から移葬したとは考えにくくここで腐らせた可能性が高いと思われる。また、乳幼児に関してもここで腐らせたとしか思えないような小さな骨や歯が確認できたので、同じ場所で成人と未成人の一次葬と二次葬が行われたと考えられた。尚、焼骨は見られなかつた。

この他に今回の調査で表土剥ぎの際に取り上げた人骨についてもいくつか特徴的な事例があつた。まず、全体的に人骨にサイズ差がみられるので、成人男女が混ざっていたことは確かであるが、その中でも目立って大きい鎖骨、上腕骨、橈骨、仙骨、脛骨、踵骨、中足骨が見られた。部位の重複が見られなかつたため同一人物とみなし、計測したところ上腕骨が約32cm、脛骨が約34cmで、推定身長約164cmの男性がいたと思われる。また、別の人には右上腕骨に骨折痕が見られた。

#### （参考文献）

具志川市の文化財第5集《ジョー（門）ミーチャー墓調査概報》 2003 具志川市教育委員会

沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書第26集 ナカンダカリヤマの古墓群 2005 沖縄県立埋蔵文化財センター

「人間史をたどる」－自然人類学入門－ 片山一道・五百部裕・中橋孝博・齊藤成也・土肥直美 1996 朝倉書店

## 第3節 当山世利原古墓群出土人骨の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

当山世利原古墓群は、沖縄県浦添市に所在し、牧港川の谷の両岸に迫る石灰岩の崖に分布している。今回の発掘調査では、左岸側の崖に構築された20基近くの墓のうち、北端の3基が対象とされた。3基はいずれも空き墓とされたが、そのうちの1基からは、大量の人骨と漆の塗膜片が出土している。

今回の分析調査では、これらの出土した人骨を対象に放射性炭素年代測定を実施し、当山世利原古墓群の年代に関する資料を作成する。

### 1.試料

試料は、04-3号墓とされた墓の墓室内の埋積土から出土した人骨12点である。墓室内の埋積土は、発掘調査所見により、表土の下位に第1層から第5層まで分層されている。人骨は第3層から第5層までの層位にわたって出土しているが、これらのうち、3層からは残りの良好な大型人骨が出土し、第4層からは細骨片とともに鉄釘や漆塗膜片が出土している。また、第5層は造成土とされ、上面に礎石が据えられている。第5層の下位は石灰岩の岩盤である。

本分析の試料とされた12点の人骨のうち、試料番号1~4は第3層から、試料番号5~11は第4層から、試料番号12は第5層から、それぞれ出土したものである。試料の年齢や部位などの詳細は結果と共に表1に示す。

### 2.分析方法

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

### 3.結果

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。第3層から出土した試料では、試料番号2が最も古い $690 \pm 40$ BPを示し、試料番号3が最も新しい $550 \pm 40$ BPを示す。第4層から出土した試料では、試料番号5が最も古い $740 \pm 40$ BPを示し、試料番号11が最も新しい $410 \pm 40$ BPを示す。第5層から出土した試料番号12は $700 \pm 40$ BPを示す。

暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。測定誤差を $\sigma$ として計算させた結果を表2に示す。第3層から出土した試料では、13世紀末から15世紀前半頃までの年代が得られている。第4層から出土した試料では、13世紀半ばから17世紀初頭頃までの幅広い年代が得られ、第5層出土の試料番号12は13世紀後半から14世紀後半の年代となる。上述の結果では、各層位間の年代差が明瞭ではないものの、全体として概ね13世紀から16世紀にかけて年代値がばらつくこ

とから、長期にわたり継続的に使用されていたことが窺える。今後も、他の墓室における炭化物や骨等の測定例の獲得により、当山世利原古墓群についてさらに詳細な年代資料が得られると考えられる。

表1. 放射性炭素年代測定結果

資料番号	層	登録番号	年齢	部位	資料の質	補正年代BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代BP	Code.No
1	3	010-2	乳児	上腕骨片	骨	640±40	-12.75±0.80	440±40	IAAA-42443
2	3	010-7	成人	腰椎(やや骨棘あり)	骨	690±40	-11.70±0.71	470±30	IAAA-42444
3	3	010-8	成人	胸椎	骨	550±40	-14.25±0.59	380±40	IAAA-42445
4	3	017-1	成人	胸椎	骨	670±40	-13.12±0.72	480±30	IAAA-42446
5	4	006-2	成人	踵骨	骨	740±40	-12.41±0.67	540±40	IAAA-42436
6	4	007-6	若年	第5中足骨	骨	470±40	-9.78±0.85	220±40	IAAA-42437
7	4	007-10	成人	肋骨	骨	650±40	-13.74±0.62	470±40	IAAA-42438
8	4	007-11	成人	橈骨片	骨	490±40	-19.25±0.66	390±40	IAAA-42439
9	4	018-9	小児	距骨(右)	骨	530±40	-14.16±0.58	350±40	IAAA-42440
10	4	018-8	成人	中足骨	骨	610±40	-11.55±0.84	390±40	IAAA-42441
11	4	018-10	成人	鎖骨(右)	骨	410±40	-7.44±0.62	120±40	IAAA-42442
12	5	041	成人	距骨(右)	骨	700±40	-9.78±0.85	450±40	IAAA-42447

1)年代値の算出にはLibbyの半減期5,568年を使用。

2)BP年代値は1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差  $\delta$  (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

表2. 暗年較正結果

資料番号	層	補正年代(BP)	暗年較正年代(cal)		相対比	Code.No		
1	3	637±40	cal AD 1,291	- cal AD 1,319	cal BP 659	— 631	0.405	IAAA-42443
			cal AD 1,351	- cal AD 1,390	cal BP 599	— 560	0.595	
2	3	685±35	cal AD 1,276	- cal AD 1,302	cal BP 674	— 648	0.678	IAAA-42444
			cal AD 1,367	- cal AD 1,382	cal BP 583	— 568	0.322	
3	3	553±35	cal AD 1,323	- cal AD 1,347	cal BP 627	— 603	0.425	IAAA-42445
			cal AD 1,392	- cal AD 1,421	cal BP 558	— 529	0.575	
4	3	670±36	cal AD 1,280	- cal AD 1,306	cal BP 670	— 644	0.558	IAAA-42446
			cal AD 1,363	- cal AD 1,385	cal BP 587	— 565	0.442	
5	4	741±36	cal AD 1,252	- cal AD 1,288	cal BP 698	— 662	1.000	IAAA-42436
6	4	470±36	cal AD 1,421	- cal AD 1,447	cal BP 529	— 503	1.000	IAAA-42437
7	4	652±36	cal AD 1,286	- cal AD 1,312	cal BP 664	— 638	0.456	IAAA-42438
			cal AD 1,358	- cal AD 1,387	cal BP 592	— 563	0.544	
8	4	486±39	cal AD 1,415	- cal AD 1,443	cal BP 535	— 507	1.000	IAAA-42439
9	4	531±36	cal AD 1,330	- cal AD 1,338	cal BP 620	— 612	0.133	IAAA-42440
			cal AD 1,397	- cal AD 1,433	cal BP 553	— 517	0.867	
10	4	605±37	cal AD 1,304	- cal AD 1,332	cal BP 646	— 618	0.408	IAAA-42441
			cal AD 1,337	- cal AD 1,365	cal BP 613	— 585	0.397	
			cal AD 1,384	- cal AD 1,398	cal BP 566	— 552	0.195	
11	4	406±37	cal AD 1,440	- cal AD 1,495	cal BP 510	— 455	0.843	IAAA-42442
			cal AD 1,509	- cal AD 1,510	cal BP 441	— 440	0.016	
			cal AD 1,601	- cal AD 1,615	cal BP 349	— 335	0.141	
12	5	703±37	cal AD 1,268	- cal AD 1,298	cal BP 682	— 652	0.872	IAAA-42447
			cal AD 1,370	- cal AD 1,379	cal BP 580	— 571	0.128	

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。

2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)付記した誤差は、測定誤差  $\delta$  (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

## 第4節 当山世利原古墓出土漆器の科学分析

漆器文化財科学研究所 四柳嘉章

### I. 分析の方法

漆器は階層や価格に応じた各種の製品が生産され、その品質が考古学的には所有階層復元の手がかりとなる。この品質差を材料や技術的側面から評価する場合、肉眼による表面観察では使用や廃棄後の劣化を含めた表面の塗りと加飾部分でしか判断できず、それも専門的な経験に左右される。しかし漆器本来の耐久・堅牢性は塗装工程にあり、この塗膜の下に隠された情報は、塗膜分析によって引き出される<sup>1)</sup>。

塗膜分析は漆器の内外面数箇所から数mmの塗膜片を採取し実体顕微鏡頭で観察した後、ポリエステル系樹脂に包埋後その断面を研磨のうえプレパラートに接着し、さらに研磨を加えて (#100~3000) 金属・偏光顕微鏡で観察する方法である。サンプルである手板試料と比較検討しながら塗装工程や下地材料の同定を行うが、これによって表面観察ではわからない時代的地域的な特色、製品の品質が把握できるので、遺跡における所有階層の推定やデータが集積されれば製品の流通問題にも迫ることができる。また塗料の直接的な分析は、赤外線を固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて照射して、分子構造を解析するフーリエ変換赤外分光法 (F T—I R) を、赤色顔料の分析にはエネルギー分散型蛍光X線分析法を用いた（後述）。なお、本稿で用いる用語については基本的には漆工用語に従うこととし、意味が曖昧で誤解をまねくものについては、以下のように規定して使用する。

#### ①赤色漆

赤色の主な顔料である朱(HgS)やベンガラ ( $Fe_2O_3$ ) が未同定の場合には「赤色漆（未同定）」と最初に断って使用し、同定済みは「赤色（朱）漆」「朱漆」「ベンガラ漆」などと表記する。よく使われる「赤漆（あかうるし）」は「赤漆（せきしつ）」（木地を蘇芳で染め透漆を施したもの）との混同をさけるために用いない。内外面とも赤色漆の場合は、未同定は「総赤色（未同定）漆」、同定済みの場合は「総赤色（朱）漆」、あるいは慣例による「総（惣）朱」「皆朱」「朱漆器」などを用いる。

#### ②黒色漆と黒色系漆

黒色の顔料である炭素粒子や鉄系化合物粒子などを含むものを「黒色漆」、まぎらわしいが黒色顔料を含まないものを「黒色系漆」として区別する。なぜならば「黒色系漆」においては、黒色顔料を含まずとも漆自体の表層が茶黒色に変質し、さらに下地色を反射して肉眼では黒色に見えるからである。近年の筆者の調査では古代以来こうした方法が一般的と考えられるので、技術や材料科学の上からも両者の区別が必要となっている。未同定の場合は、はじめに「黒色漆（未同定）」とことわる。内外面とも黒色漆の場合は「総黒色漆」、同じく黒色系は「総黒色系漆」（いわゆる「総黒」は両者を含んだもの）、内面赤色外面黒色は「内赤外黒色漆」、同じく「内赤外黒色系漆」とする。赤色顔料が同定されている場合は「内朱外黒色漆」あるいは「内赤（ベンガラ）外黒色漆」などと呼称する。

#### ③下地の分類—漆下地と渋下地

一般の粗い鉱物粒子を用いたものは「地の粉漆下地」、珪藻土使用は「珪藻土漆下地」、より細かい砥の粉類似は「サビ漆下地」、膠使用は「地の粉またはサビ膠下地」、炭粉は漆を用いたものは「炭粉漆下地」、柿渋を用いたものは「炭粉渋下地」、油煙・松煙によるものは「黒色漆下地」とする。

## II. 分析結果

### 表面観察

すべての塗膜片は朱漆で、微細片であるため形態復元は困難であるが、分析番号65（図版3）などに針葉樹の柾目痕が付着しているので容器ではありえず、木棺が妥当と考えられる。以下個別の報告では表面観察は省略する。

### 塗膜分析

#### 分析番号041（図版1-1）

①黒色漆下地層。層厚25 $\mu\text{m}$ 前後。黒色顔料は0.3 $\mu\text{m}$ 以下の均一で微細な粒子であり、油煙と考えられる。②漆層。層厚37~50 $\mu\text{m}$ 。③朱漆層。層厚は130 $\mu\text{m}$ 前後で厚い。朱粒子は長径20 $\mu\text{m}$ 以下の不ぞろいな多角形粒子が粗く分散している。

#### 分析番号065（図版1-1）

①黒色漆下地層。層厚50 $\mu\text{m}$ 前後。黒色顔料は0.3 $\mu\text{m}$ 以下の均一で微細な粒子。②漆層。層厚15~37 $\mu\text{m}$ 。③朱漆層。層厚74 $\mu\text{m}$ 前後。朱粒子は長径30 $\mu\text{m}$ 以下の不ぞろいな多角形粒子が粗く分散。

#### 分析番号067（図版1-1）

①黒色漆下地層。層厚7~100 $\mu\text{m}$ 。黒色顔料は0.3 $\mu\text{m}$ 以下の均一で微細な粒子。②漆層。層厚34~100 $\mu\text{m}$ 。③朱漆層。層厚20 $\mu\text{m}$ 前後。朱粒子は長径24 $\mu\text{m}$ 以下の不ぞろいな多角形粒子が粗く分散。

#### 分析番号080（図版1-1）

①黒色漆下地層。層厚7~37 $\mu\text{m}$ 。黒色顔料は0.3 $\mu\text{m}$ 以下の均一で微細な粒子。②漆層。層厚7~44 $\mu\text{m}$ 。③朱漆層。層厚44 $\mu\text{m}$ 前後。朱粒子は長径20 $\mu\text{m}$ 以下の不ぞろいな多角形粒子が粗く分散。

#### 分析番号112（図版なし）

①②漆層は剥離のため不明。③朱漆層。層厚は厚く200 $\mu\text{m}$ 前後。朱粒子は長径20 $\mu\text{m}$ 以下の不ぞろいな多角形粒子が粗く分散。

#### 分析番号151（図版1-1）

①黒色漆下地層。層厚12~61 $\mu\text{m}$ 。黒色顔料は0.3 $\mu\text{m}$ 以下の均一で微細な粒子。②漆層。層厚37 $\mu\text{m}$ 前後。③朱漆層。層厚は71~100 $\mu\text{m}$ 。朱粒子は長径24 $\mu\text{m}$ 以下の不ぞろいな多角形粒子が粗く分散。

#### 分析番号171（図版1-1）

①黒色漆下地層。層厚12~69 $\mu\text{m}$ 。黒色顔料は0.3 $\mu\text{m}$ 以下の均一で微細な粒子。②漆層。層厚20~42 $\mu\text{m}$ 。③朱漆層。層厚44 $\mu\text{m}$ 前後。朱粒子は長径20 $\mu\text{m}$ 以下の不ぞろいな多角形粒子が粗く分散。

#### 分析番号178（図版1-2）

①黒色漆下地層。層厚24~74 $\mu\text{m}$ 。黒色顔料は0.3 $\mu\text{m}$ 以下の均一で微細な粒子。②漆層。層厚7~24 $\mu\text{m}$ 。③朱漆層。層厚113 $\mu\text{m}$ 前後。朱粒子は長径24 $\mu\text{m}$ 以下の不ぞろいな多角形粒子が粗く分散。

#### 分析番号180（図版1-2）

A片 ①黒色漆下地層。層厚不明。黒色顔料は0.3 $\mu\text{m}$ 以下の均一で微細な粒子。②漆層。層厚44 $\mu\text{m}$ 前後。③朱漆層。層厚は厚く最大431 $\mu\text{m}$ 。朱粒子は長径12 $\mu\text{m}$ 以下の不ぞろいな多角形粒子が粗く分散。④漆層。層厚100 $\mu\text{m}$ 前後。部分的に油煙と思われる微細な黒色粒子が含まれている。

B片 ①黒色漆下地層。層厚24~64 $\mu\text{m}$ 。黒色顔料は0.3 $\mu\text{m}$ 以下の均一で微細な粒子。②漆層。層厚24~54 $\mu\text{m}$ 。③朱漆層。層厚62 $\mu\text{m}$ 。朱粒子は長径32 $\mu\text{m}$ 以下の不ぞろいな多角形粒子が粗く分散。

#### 分析番号183（図版1-2）

①黒色漆下地層。層厚49  $\mu\text{m}$ 前後。黒色顔料は0.3  $\mu\text{m}$ 以下の均一で微細な粒子。②漆層。層厚100  $\mu\text{m}$ 前後。③朱漆層。層厚49  $\mu\text{m}$ 前後。朱粒子は長径20  $\mu\text{m}$ 以下の不ぞろいな多角形粒子が粗く分散。

分析番号187（図版1-2）

①黒色漆下地層。層厚12～61  $\mu\text{m}$ 。黒色顔料は0.3  $\mu\text{m}$ 以下の均一で微細な粒子。②漆層。層厚147  $\mu\text{m}$ 前後。③朱漆層。層厚は厚く245  $\mu\text{m}$ 前後。朱粒子は長径24  $\mu\text{m}$ 以下の不ぞろいな多角形粒子が粗く分散。

分析番号195（図版1-2）

①黒色漆下地層。層厚10～30  $\mu\text{m}$ 。黒色顔料は0.3  $\mu\text{m}$ 以下の均一で微細な粒子。②漆層。層厚49～100  $\mu\text{m}$ 。③朱漆層。層厚12～24  $\mu\text{m}$ 。朱粒子は長径25  $\mu\text{m}$ 以下の不ぞろいな多角形粒子が粗く分散。

分析番号196（図版1-2）

①黒色漆下地層。層厚24  $\mu\text{m}$ 前後。黒色顔料は0.3  $\mu\text{m}$ 以下の均一で微細な粒子。②漆層。層厚24  $\mu\text{m}$ 前後。③朱漆層。層厚90  $\mu\text{m}$ 前後。朱粒子は長径25  $\mu\text{m}$ 以下の不ぞろいな多角形粒子が粗く分散。

## 赤外分光分析

分光学（Spectroscopy）は「光と物質との相互作用によって生じる光の強度やエネルギー変化を調べる学問」<sup>2)</sup>と定義され、固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて赤外線を照射していくと、分子の固有振動と同じ周波数の赤外線が吸収され、分子構造に応じたスペクトルが得られる。このスペクトルから分子構造を解析する方法を赤外線吸収スペクトル法という<sup>3)</sup>。

漆塗膜の分析にはフーリエ変換赤外分光法（FT-IR）を用いた。赤外光は近赤外（波数14000～4000cm<sup>-1</sup>、波長700nm～2.5  $\mu\text{m}$ ）、普通赤外（波数4000～400cm<sup>-1</sup>、波長2.5～25  $\mu\text{m}$ ）、遠赤外（波数400～10cm<sup>-1</sup>、波長25  $\mu\text{m}$ ～1mm）に分けられるが、ここでは普通赤外光を用いる。波数は1cm当たりの波の数で、振動数を光速度で割ったものであり、波長の逆数である。FT-IRは普通赤外の場合は波数4000～400cm<sup>-1</sup>の光を2つの光束に分割し、1つは固定し（固定鏡、ミラーA）、他方の光路長は可動ミラー（可動鏡、ミラーB）を用いて変化させる。つまり干渉計から位相の異なる光が出るわけで、2つの光束間の距離が変化すると干渉の結果、加え合わされた部分と差し引かれた部分の系列が生ずることによって、強度の変化が起こる。すなわち干渉図形が得られる。フーリエ変換という数学的操作を行うと、干渉図形は時間領域から振動数領域のスペクトル点の1つに変換される。ピストンの長さを連続的に変化させ、ミラーBの位置を調節し、光束Bの光路を変化させる。この変化させた各点において、次々とフーリエ変換を行うと完全な赤外スペクトルが得られる<sup>4)</sup>。このようにして得られたスペクトルをあらかじめ得られている基準のスペクトルと比較検討することによって、塗装液及び顔料の同定ができる。

分析用試料は1～2 mgを採取しKBr（臭化カリウム）100mgとともにメノウ鉢で磨り潰して、これを錠剤成形器で加圧成形したものを用いた（錠剤法）。条件は分解能4cm<sup>-1</sup>、積算回数16、アポダイゼーション関数Cosine。こうして測定した赤外線吸収スペクトルを図1～10（ノーマライズ）に掲載した。縦軸は吸光度（Abs）<sup>2</sup>、横軸は波数（カイザー）である（測定機器は日本分光製FT-IR 420）。

図1は朱漆塗膜の赤外線吸収スペクトルで、基準データは岩手県浄法寺產生漆（①、1992作製）である。漆にはない1559cm<sup>-1</sup>、1430cm<sup>-1</sup>、875cm<sup>-1</sup>、726cm<sup>-1</sup>の吸収がみられる。これらは遺構床面の石灰岩が付着したもので、塗膜が微細で危弱なために十分除去できなかつたことによる。これらの吸収を除けば、2925cm<sup>-1</sup>、2850cm<sup>-1</sup>、1720～1718cm<sup>-1</sup>（カルボン酸）、1650～1630cm<sup>-1</sup>（糖タンパク）、1465cm<sup>-1</sup>

図1 朱漆塗膜の赤外線吸収スペクトル

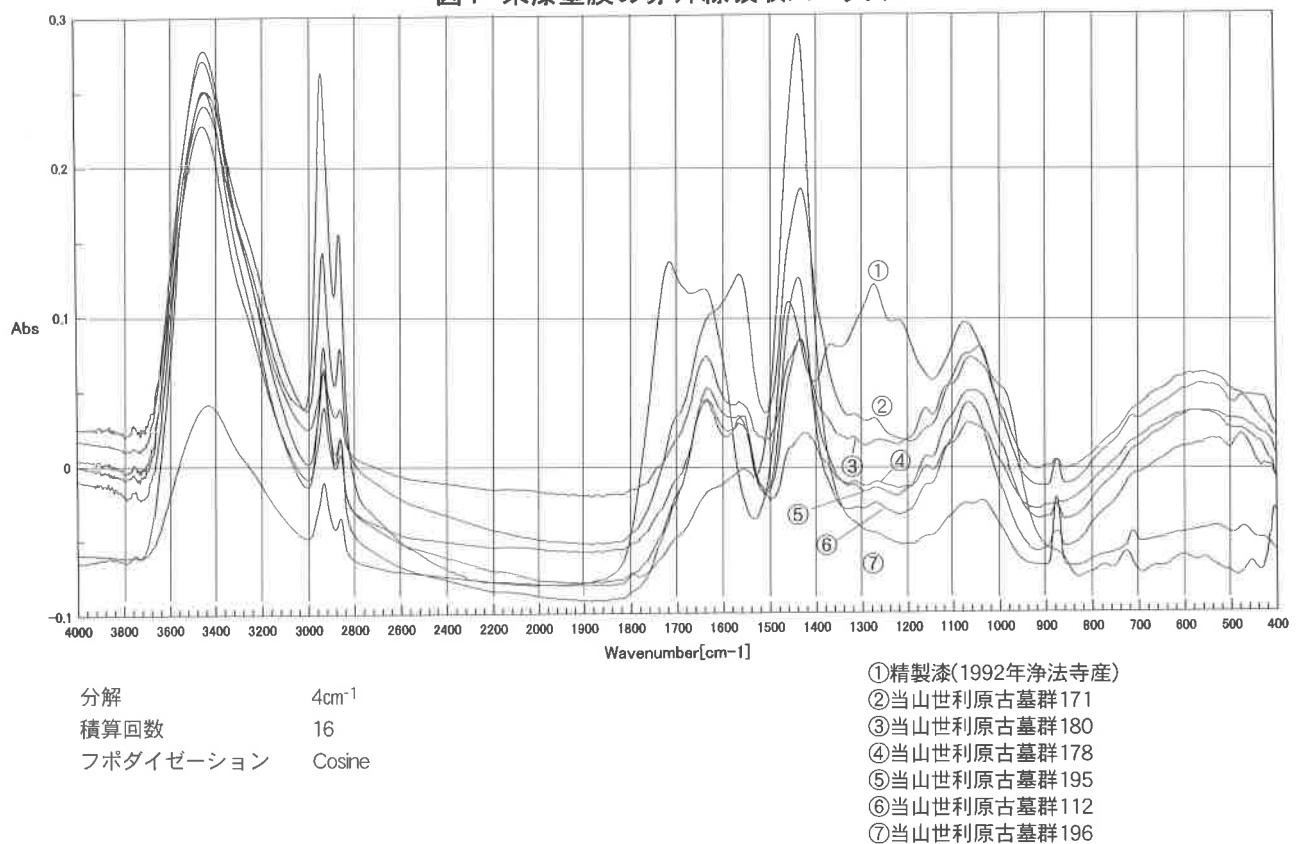


図2 下地の赤外線吸収スペクトル

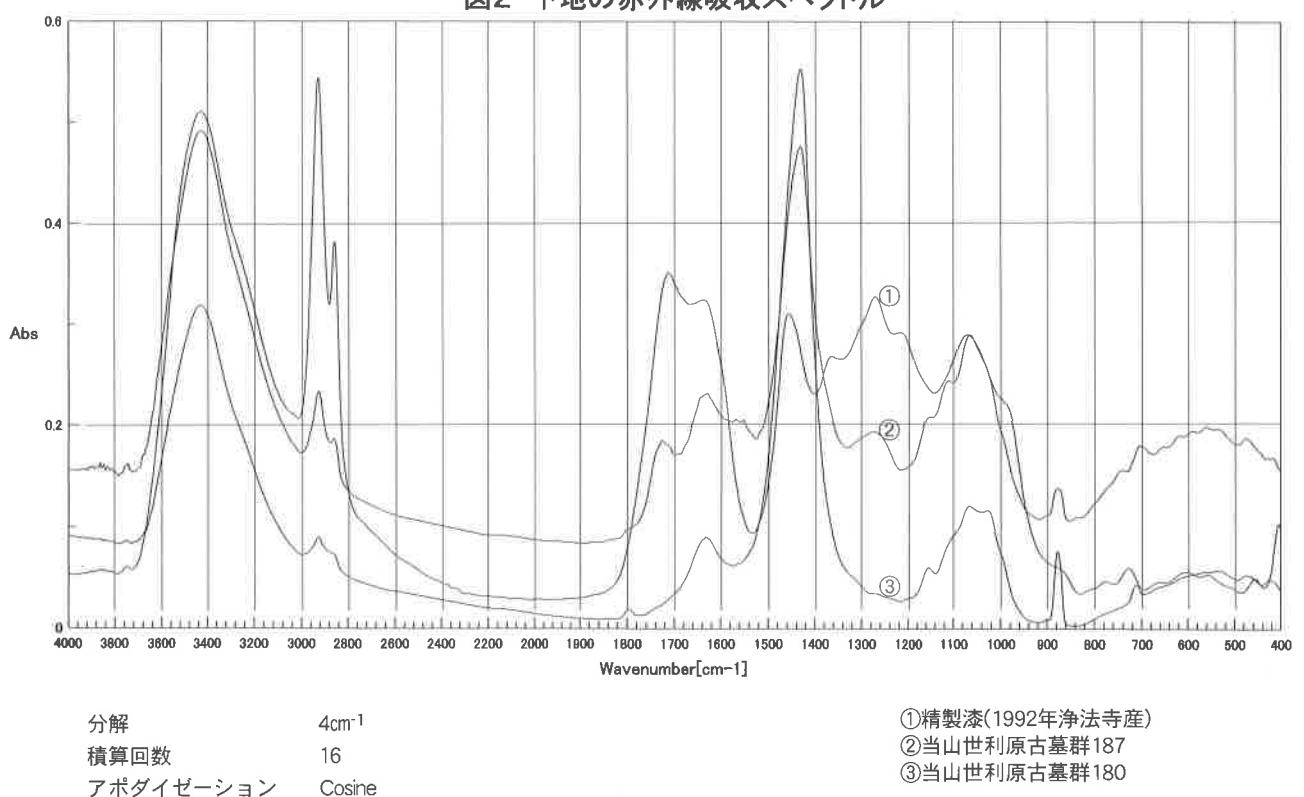


図3 蛍光X線定性分析スペクトル(No.66)

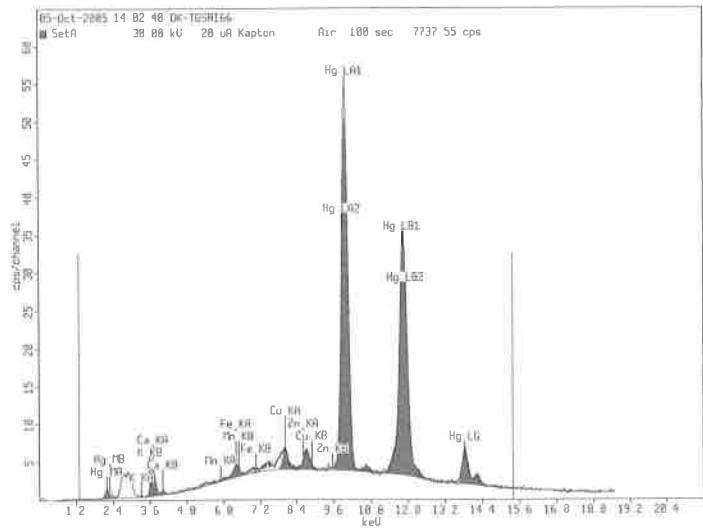


図4 蛍光X線定性分析スペクトル(No.180)

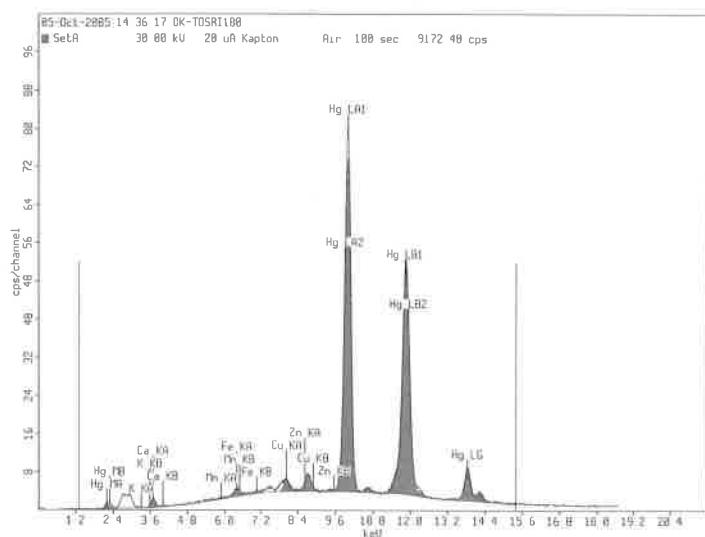
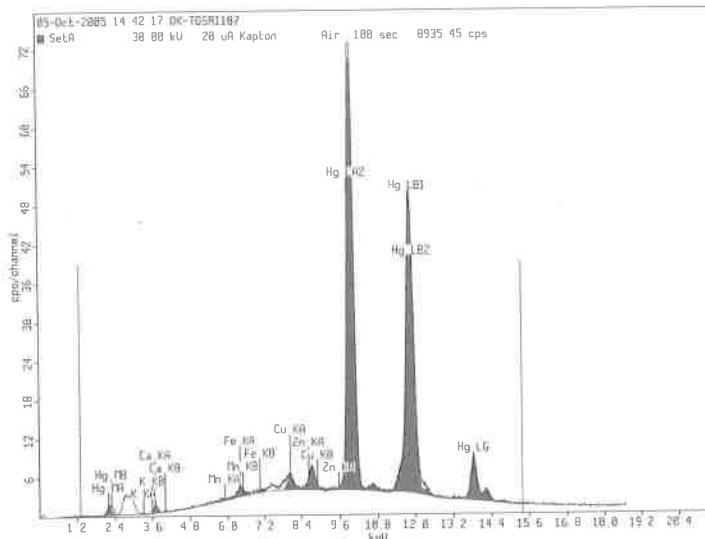


図5 蛍光X線定性分析スペクトル(No.187)



(活性メチレン基)、 $1280\text{cm}^{-1}$  (フェノール)、 $1062\text{cm}^{-1}$  (ゴム質) の吸収と顕微鏡観察所見を総合して漆下地と判断される。

図2は下地の赤外線吸収スペクトルで、ここでも石灰質の吸収みられ③において顕著である。②では一部木質 (セルロース) の吸収がみられるものの、上述の漆同定要素をみたしている。

### 蛍光X線分析

蛍光X線分析は試料にX線を当てると、元素特有のX線 (特性X線ないし固有X線) が発生 (放出) する。この波長と強度を測定することによって元素の定性や定量分析を行う。分析条件は下記の通り。

使用機器：パナリティカルPW4025、エネルギー分散型蛍光X線分析装置。

使用管球：RHターゲット 9 W。

検出器：高分解能電子冷却Si半導体検出器。

測定条件： $30\text{kV}$ 、 $4\mu\text{A}$ 、 $20\mu\text{A}$ 、フィルター Kapton、100sec。

測定室雰囲気：大気。測定部分の径 1 mm。

測定結果：全ての赤色塗膜の分析を行い、代表的なものを図3～5に示した。赤色顔料はすべて朱 (HgS) である。

### III. 小 結

浦添市当山世利原古墓は県営浦添大公園の一角に所在し、石灰岩の崖面に横穴を掘ったもので、20基ほどが営まれている。うち04-3号墓から漆塗膜片が多数検出された。

04-3号墓は佐伯信之氏によると、横穴内の床面を石灰岩粉で造成し、4本柱の木製建物を置き、中央に漆塗り木製厨子 (漆龕) が安置されていたという。厨子が朽ちた後、清掃されており基数は不明とされている。したがって出土塗膜片をすべて調査し、主なものを図版に掲載した。結論的にはみな同じ塗装工程であることが判明した。

塗装工程は木胎の上に油煙と考えられる黒色漆下地層+漆層+朱漆層の三層構造である。下地に黒色漆下地を用いる例は、北山王とその一族、または第一尚氏系北山監守一族の墓と推定される今帰仁村百按司墓で確認している。

百按司墓は奥の方から1～3号墓と呼ばれており、1号墓3号棺には「弘治十三年九月某日」(1500年)の銘が存在し、初期琉球漆器の定点として知られている<sup>5)</sup>。1号棺(6脚)では布着せの上に地の粉漆下地が施されており、浦添ようどれの漆龕と共通している。ところが後出の3号棺(10脚)では、下地の地の粉がなく木胎に直ちに黒色漆が施されていた。黒色顔料の特定については、顕微鏡的には松煙よりも細かく均一な油煙類と識別され、赤外分光分析から、胡麻油の可能性が高いと判断した<sup>6)</sup>。

3号棺の塗装工程は、下記のようだ。

側板外面 黒色漆層+漆層+漆層+朱漆層

側板内面 黒色漆層+漆層+漆層

脚 黒色漆層+漆層+漆層+朱漆層

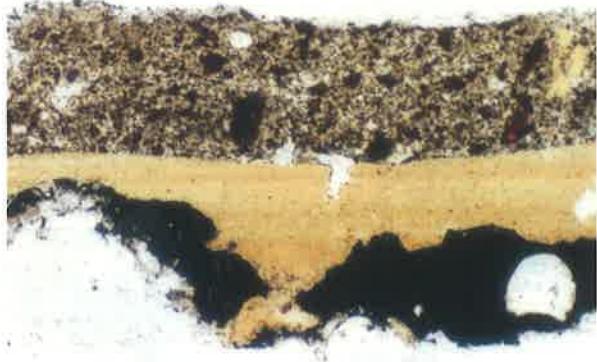
以上から見ると、当山世利原古墓04-3号墓の塗装工程は、ほとんど同じ技術系譜にあることが知られる。墓の年代は人骨の放射性炭素年代測定から、12点が13～16世紀前半と算定されていることからも、

厨子（漆龕）は16世紀前後と見て大過ないと思われる。

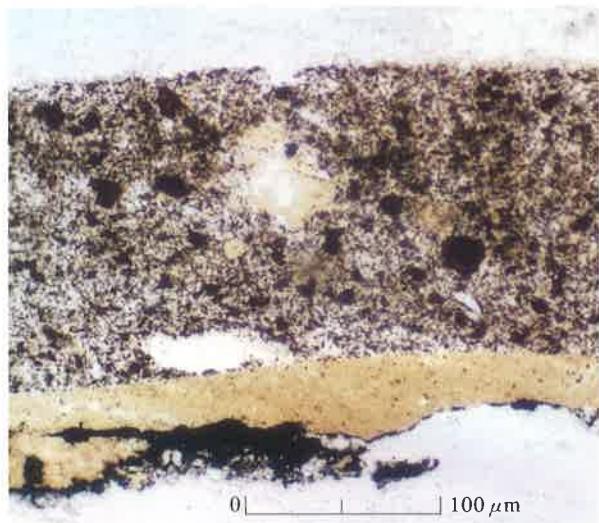
末筆ながら本調査にあたっては浦添市教育委員会文化課グスク整備係宮里信勇・佐伯信之氏からご教示をいただいた。深謝申し上げる。

#### 註

- 1) 四柳嘉章「考古資料の修復と文化財科学－福井県家久遺跡・礫榔墓出土漆器の事例から」『國學院大學博物館学紀要』第27号、2003
- 2) 尾崎幸洋『分光学への招待』産業図書、1997
- 3) 山田富貴子「赤外線吸収スペクトル法」『機器分析のてびき』化学同人、1988
- 4) SILVERSTEIN・WEBSTER、荒木峻・益子洋一郎ほか訳『有機化合物のスペクトルによる同定法—MS、IR、NMRの併用 第6版』東京化学同人、1999
- 5) 德川義宣「琉球の漆工芸」『琉球漆器』徳川美術館、1978  
荒川浩和「琉球の漆工芸」『琉球漆器の美展』浦添市、1983  
荒川浩和「百按司墓の漆龕－琉球漆工藝資料」『漆工史』第6号、1983
- 6) 四柳嘉章「琉球漆器の髹漆技法について—塗膜の科学的分析報告（一）」『浦添市美術館紀要』第6号、1997  
四柳嘉章「百按司墓唐櫃形漆龕の科学分析」『百按司墓木棺修理報告』今帰仁村教育委員会、2004



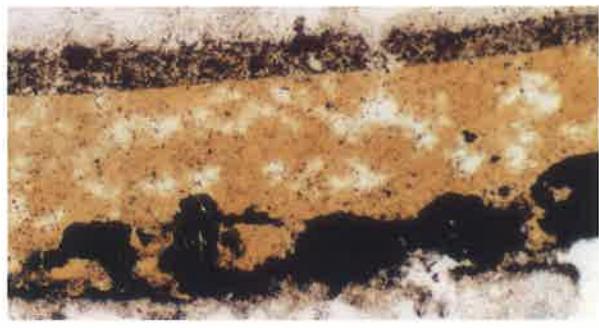
No.65  $\times 260$



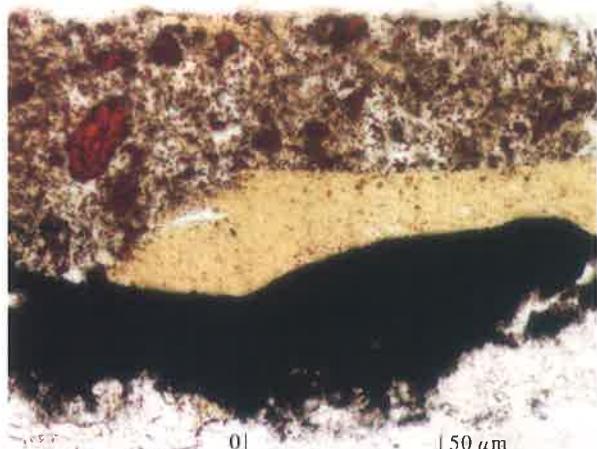
No.41  $\times 260$



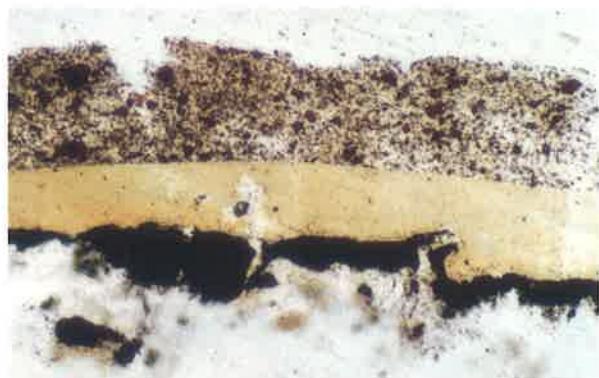
No.67  $\times 260$



No.69  $\times 260$



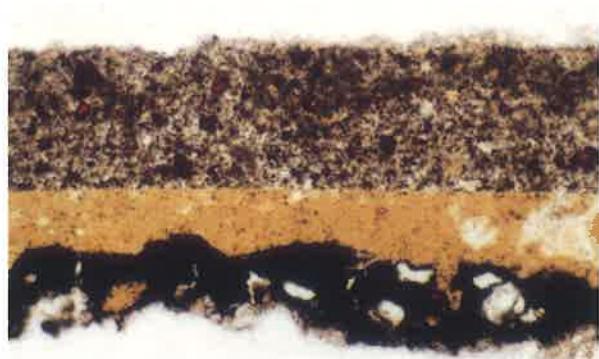
No.80  $\times 520$



No.171  $\times 260$



No.151  $(\text{反射光}) \times 260$

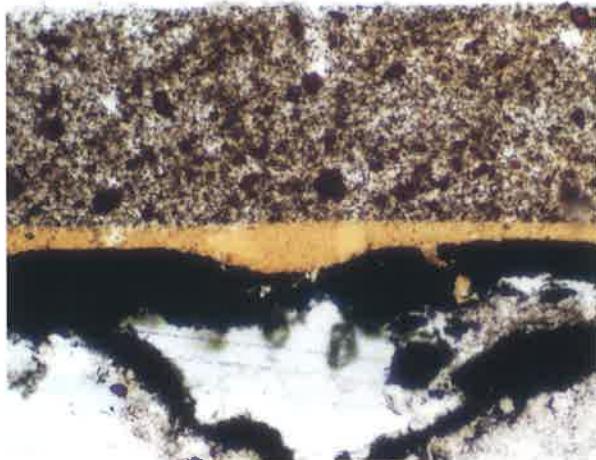


同左  $\times 260$

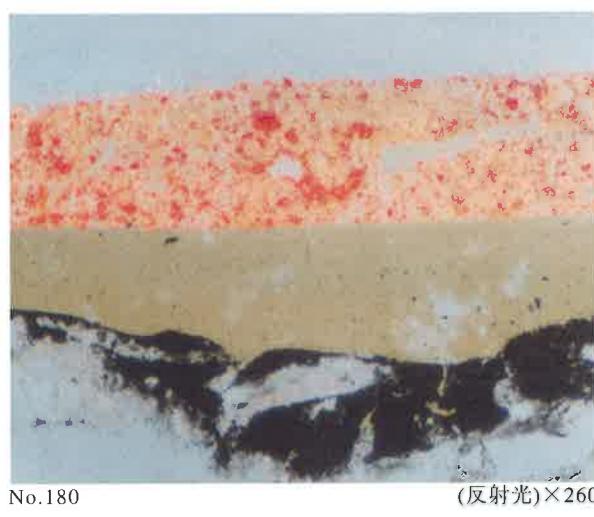
漆器塗膜層断面の顕微鏡写真



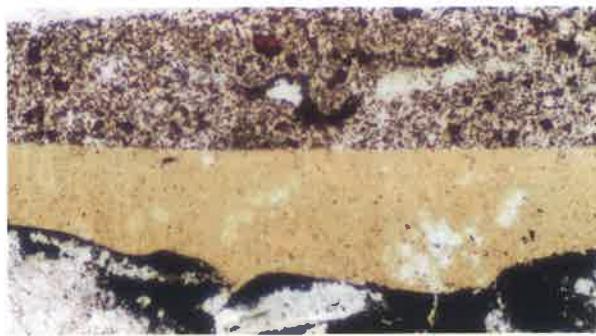
(反射光)×260



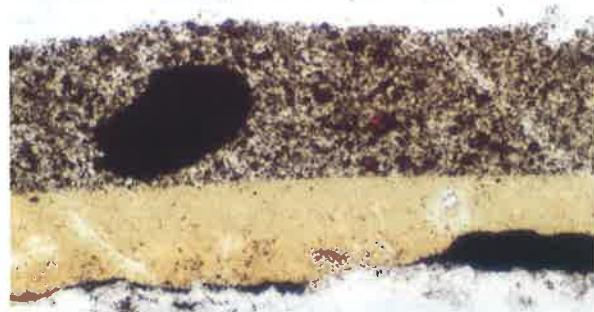
×260



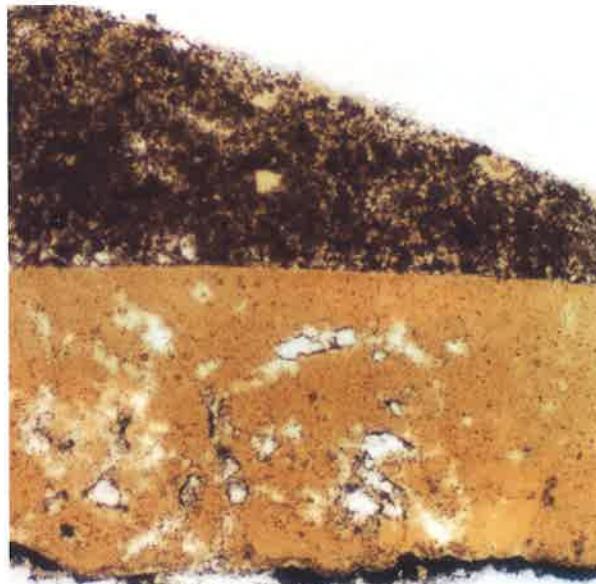
(反射光)×260



×260



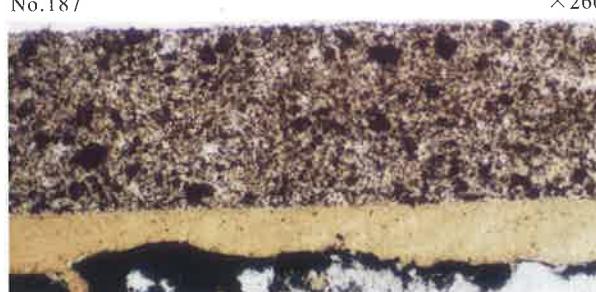
×260



×260



×520



×260

漆器塗膜層断面の顕微鏡写真



No.178 表面

×26



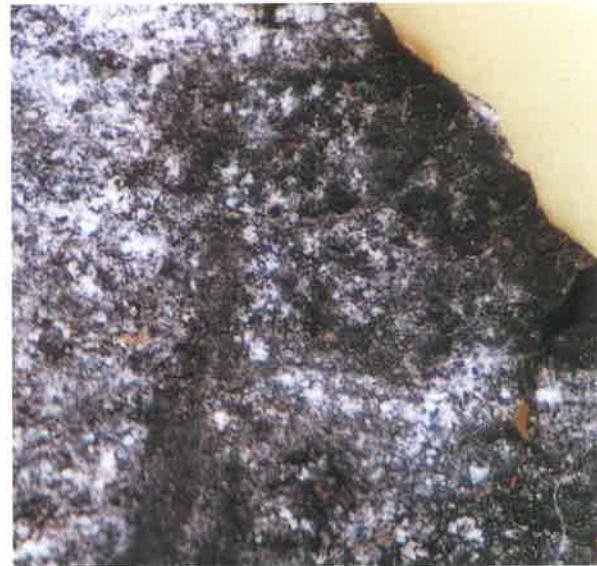
No.65 裏面

×26



No.195 表面

×26



No.80 裏面

×26



No.80 表面

×26



No.187 裏面

×26

漆器塗膜片表裏面写真

## 第5節 小結

### 99-1号墓

今回の調査は掘削を伴うものではなかったため、発掘調査の成果としてはきわめて限定されたものである。以下に知見をまとめておきたい。

当山世利原古墓群99-1号墓の造成された時期については明らかにすることはできなかったが、第15図8の銘書に書かれた年代が「雍正」であるため、少なくとも18世紀前半には墓として使用されていたと思われる。銘書の判読によると、当墓に葬られたのは旧浦添間切西原村や旧玉城間切和名村に関係のある人物などであることが想像されるが、その具体的な関係については今後詳細に調査を進める必要がある。

構造に関わる問題としては墓口の閉塞方法が挙げられる。閉塞に關係する木材が墓口に残存していることから、墓口の閉塞には木製の扉を使用していたと思われる。ただ、墓口壁面の漆喰には扉を固定するための痕跡は認められないため、木製扉の固定にあたっては墓口壁面や設置部分には木製の枠がはめ込まれていた可能性が考えられる。

将来の墓室内的調査によっては、礎石や漆の塗膜片等が出土することは十分に考えられる。今回の調査はその序章と位置づけた上で、今後の調査に期待したい。

### 04-3号墓

04-3号墓は人骨の取り上げに関してミスを犯しているがおおよそ以下のようない状況が考えられる。

造成層である第5層から礎石と同質の石片が出土しており、礎石の加工・設置と第5層の造成は同時期と考えられる。また同層から少量の人骨片が出土しているが、あるいは礎石設置（のための加工・造成）以前からここに墓があった可能性も示唆している。礎石の上には柱が立ち、この人工洞穴の容積に等しい一間×一間（幅約2.7m、奥行約1.5m）の木造構造物（木櫛）が構築され、この木櫛内に骨を納めた朱漆塗りの木製厨子（漆龕）が納められていた。塗膜片は墓室中央やや奥寄りから集中して出土しており、この場所に木製厨子が安置されていたのだろう。この木製厨子について、漆塗膜片の分析（第4節）によれば、漆の塗装工程は今帰仁村百按司墓の弘治13年（1500）銘のある1号墓3号棺と技術的に同じ系統であり、16世紀前後のものとみられると報告されている。

その後木櫛と木製厨子は時間の経過とともに朽ちてゆく。第4層は土層というより細骨片層ともいえ、漆の塗膜片と鉄釘もこの層からの出土である。また第2層から銅釘が出土しているが第4層上面にも接しているため第2層形成前からそこに存在していた可能性もあり、そうであれば当該厨子に使用されていた蓋然性がある。いずれにしろ第4層は木製厨子等が朽ちてゆく過程でこぼれ落ちていった細骨片と漆塗膜片が堆積したもの、あるいは朽ちた木櫛と木製厨子を撤去した際にこぼれ落ちたものであろう。

第3層から大量の人骨が出土したが、残念ながら調査員は出土状況を見ていない。実際に掘削した作業員からの聞き取りでは人骨はバラバラの状態で出土したという。第3層と第4層出土人骨を比べるとお互いその層にない種類の骨がもう一方の層から出土していること、両層から同一人物とみられる人骨が出土していることから第3・4両層は密接な関係があることがわかる。また第3層の最下部からわずか2点ではあるが漆の塗膜片が出土していることもこれを傍証し、且つ第3層の堆積も第4層と同様木製厨子が使われ始めた後でなくてはならない。こうしたことから第3層出土の人骨は木製厨子が朽ちた

ためそれに納められていた人骨が墓の奥に片付けられた結果と考えられる。これらの人骨は放射性炭素分析（第3節）によると大部分が13世紀後半から15世紀前半の範囲に収まる。16世紀前後とされる朱塗り木製厨子（漆龕）より遡ることから、もしそうであればすでに葬られていた骨を木製厨子に改葬したことになる。尚、被葬者は乳児から成人まで20名近くを数える。

第3層の分布（人骨の出土範囲）は完全には明確にできないものの大部分が4つの礎石に囲まれた範囲内であることから、人骨は木槧の下に押し込んだかあるいはその時点で木槧がなかったかのいずれかが考えられる。礎石4は他の礎石と様相が全く異なるうえ岩盤の堀方とずれていたため本来は他と同じようなニービの骨製の礎石があったが、破損等の理由で後世に集石礎石に取り替えられたのではなかろうか。礎石が再設置されたものであれば木槧を再建した可能性もある。状況証拠なので心許ないがその可能性について考慮してもよいであろう。

木槧が再建されたか否かはともかく人骨を片付けたのであれば、おそらくその後も墓として利用され続けたであろう。第2層上面が使用面であったと思われるがどのような様子であったのかは不明である。

調査区から約700m南南東、同じ浦添丘陵に位置する浦添ようどれでは発掘調査により西室から礎石や漆の塗膜片などが出土している。礎石配列を三間×二間（約6.8×4.3m）と推定していることや漆塗板厨子は14世紀末～15世紀前半には廃棄され骨は石厨子に改葬されたとされるなど、規模や時期などは異なるものの至近距離にある04-3号墓はその類似性が注目される。当山世利原古墓群のなかでも04-3号墓がこのように特異なのか、未調査の墓にも同様なものがあるのか、それによって当墓群の位置付けは大きく変わってくる。

最後に、何度か述べたが16世紀前後とみられ類例の少ない貴重な遺構であったにもかかわらず、肝心の人骨の出土状況がわからず資料価値を著しく低くしてしまった。これは調査担当者の指示が不徹底であり作業員にとって不明瞭であったこと、またこのような資料が眠っていることを何ら想定していなかったことが原因である。遺跡は掘ってみないとわからない、ということは経験上承知していたはずだが認識が甘かったとしかいいようがない。反省と自戒を込めて結語とする。

#### 〈参考文献〉

- 浦添市教育委員会 2005『浦添ようどれの石厨子と遺骨－調査の中間報告－』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『ナカンダカリヤマの古墓群』
- 中世墓資料集成研究会 2004『中世墓資料集成－九州・沖縄編(2)－』
- 中世墓資料集成研究会 2007『日本の中世墓を探る 中世墓資料集成研究報告会資料集』
- 今帰仁村教育委員会 2004『百按司墓木棺修理報告書』

## 第3章 当山宗地原近世墓群

## 第1節 遺構・遺物

### 02-1号墓

当山宗地原近世墓群は全体的な調査がなされておらず総基数は不明である。今回の調査対象墓は橋脚工事にかかる本墓1基である。本墓は、浦添城跡から牧港にかけての石灰岩堤北側斜面標高53m前後の高さに横穴を掘削して構築している。牧港川を渡った対岸の丘陵傾斜面には、当山世利原古墓群が所在する。

本墓は移転に伴う廃棄が行われていた。墓口の蓋も空いており、そのため墓室内まで表土が流れ込んでいる状態であった。

#### 構造

琉球石灰岩の丘陵斜面に横穴を掘削する、堀込墓いわゆるフィンチャーモードである。屋根は無く、墓庭は岩盤を方形に掘削し構築する。墓口の大きさは高さ約80cm、幅約60cmを測る。墓庭に廃棄されていた墓蓋は高さ78cm、幅56cmを測る切石であり、墓口よりもやや小振りなことが分かる。墓口の石積みは比較的大きな切石による布積みが見られ、ジョウカブイより上方及び墓口周りは大きさが不揃いな粗い相方積みが見られた。また一部の目地や面には漆喰が残存しており、正面を漆喰仕上げにしていたことが窺える。墓口床には切石は見られず、自然岩面をやや平坦に整形して墓蓋を据えたようである。

墓室内部は奥壁で構築の際のノミ跡を確認することが出来た。平面形は矩形に近い楕円形を呈する。棚は無い。室内の高さは成人男性が中腰になる程度で、奥行きは約13mと狭い空間である。出土遺物いわゆる厨子甕は無く、また破片等も出土しなかった。床面には柔らかく粉のような淡黄色土が数センチほど見られた。

墓庭は岩盤を方形に掘削し構築する。南西側は本墓が斜面地に構築のため土留めの石積みをし、墓庭の高さから更に20cmほど立上げている。層序は第1層の黒色腐葉土が墓庭全体を覆い、第2層で墓の使用面だと考えられる混礫黒茶褐色土が観察できた。墓を構築する際の庭の凹部に入れたと見られ全体的には広がらず、やや凸部が目立つ岩盤面と併用しての庭面と推察できた。サンミラーは無し。

墓道は南西側でみられた。崖側自然岩の上に一部切石が残存し、土留め石積みを構築しながらの墓道だと考えられた。道幅約1.5m。

#### 墓道および周辺表採遺物

墓室内及び墓庭から遺物の出土は無く、すべて本墓周辺からの表採資料であった。採集の状況として、墓の移転に伴う廃棄等が考えられる。表採のため、本墓の所属とは厳密に言い切れないが、墓域として考察できるため掲載した。

##### (1) 蔵骨器（次頁 図版の4）

陶製御殿型蔵骨器（ウドゥンジーシ）蓋の飾りの一部分である。吳須で彩色する。墓道と考えられる箇所で採取され、本墓に伴うものか不明であるが、唯一の蔵骨器破片である。

##### (2) 沖縄産施釉陶器（第27図・次頁図版の1、2、3）

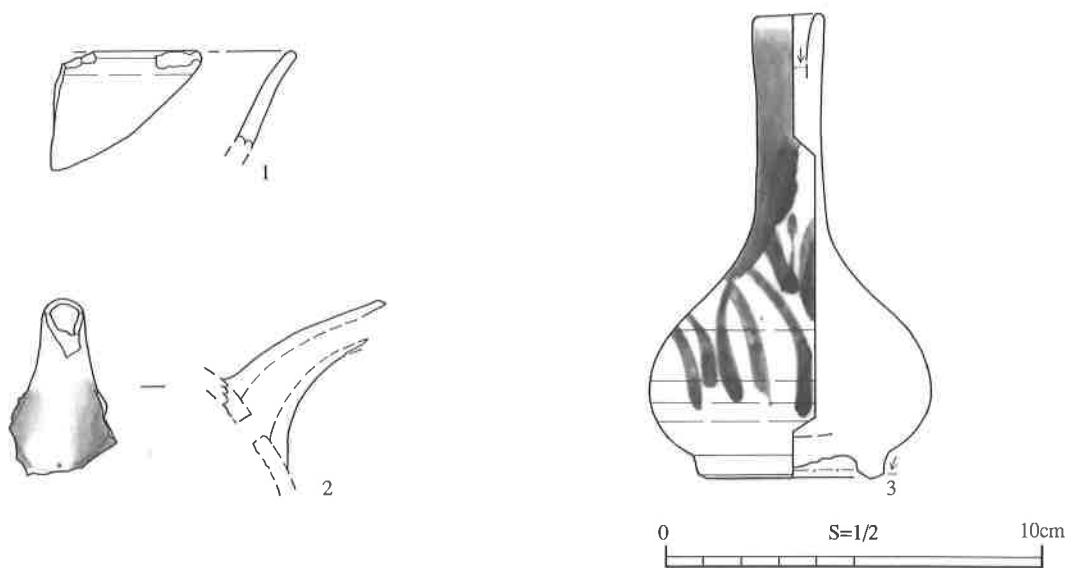
第27図1、壺屋焼の施釉碗。口縁部を僅かに外反し、白化粧に透明釉を両面に施す。胎土は黄橙色。粗い貫入が見られた。残存部に文様見られず。

第27図2、壺屋焼のカラカラの注ぎ口部分のみの破片。碗と同様、白化粧に透明釉を施している。身部付近では飴釉が見られる。

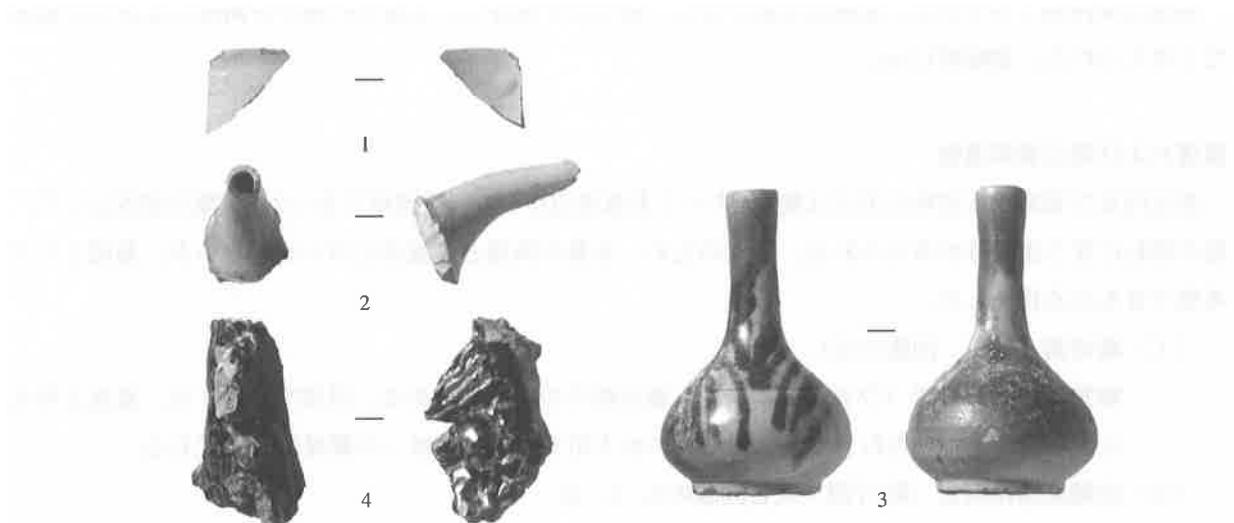
第27図3、瓶。壺屋焼の施釉陶器。器高12.2cm、最大径7.4cmを測る。豊付けは無釉で、高台脇から丸みをもって立ち上がり最大径は腰部にくる。緩やかに締まって頸部にいたる。頸部は直口しながらもやや外反して口縁部にいたる。頸部は緑釉が施され、胴部には呉須による草文が描かれる。二次焼成を受けており、片面の腰部から胴部にかけて煤が付着する。

## 第2節 小結

本墓からの出土ではないので推察の域を出ないが下図版の4陶製御殿型蔵骨器の破片出土により、19世紀から20世紀に使用されていたことが考えられる。墓室内の構造ではいわゆる「タナ」が見られず、シ



第27図 墓道及び周辺表採遺物



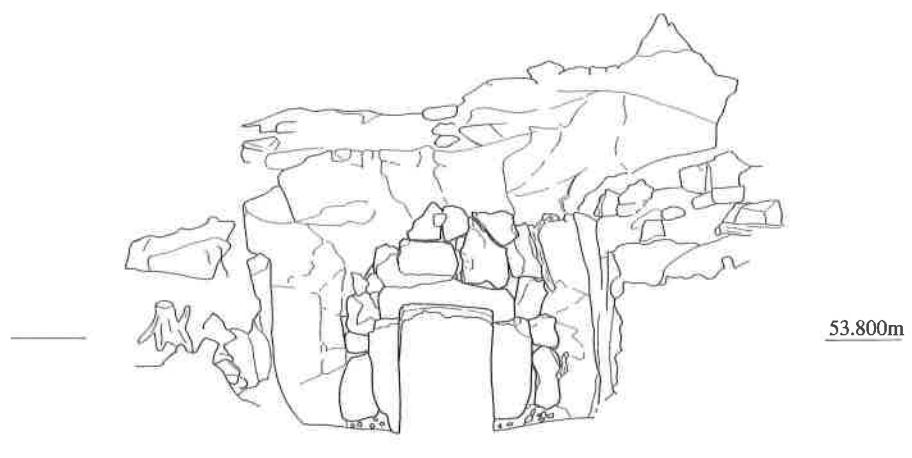
図版 墓道及び周辺表採遺物

ルヒラシと想定される範囲を除くと広さも十分とは言い切れないで、置ける蔵骨器の個数は限られてくる。そのことから小さな規模の門中墓もしくは家族墓としての利用形態が考えられた。当山宗地原近世墓群の調査は報告基數も1基ということから十分な情報量とは言いがたい。今後資料の増加を待ち、検討したい。



第28図 02-1号墓 平面図

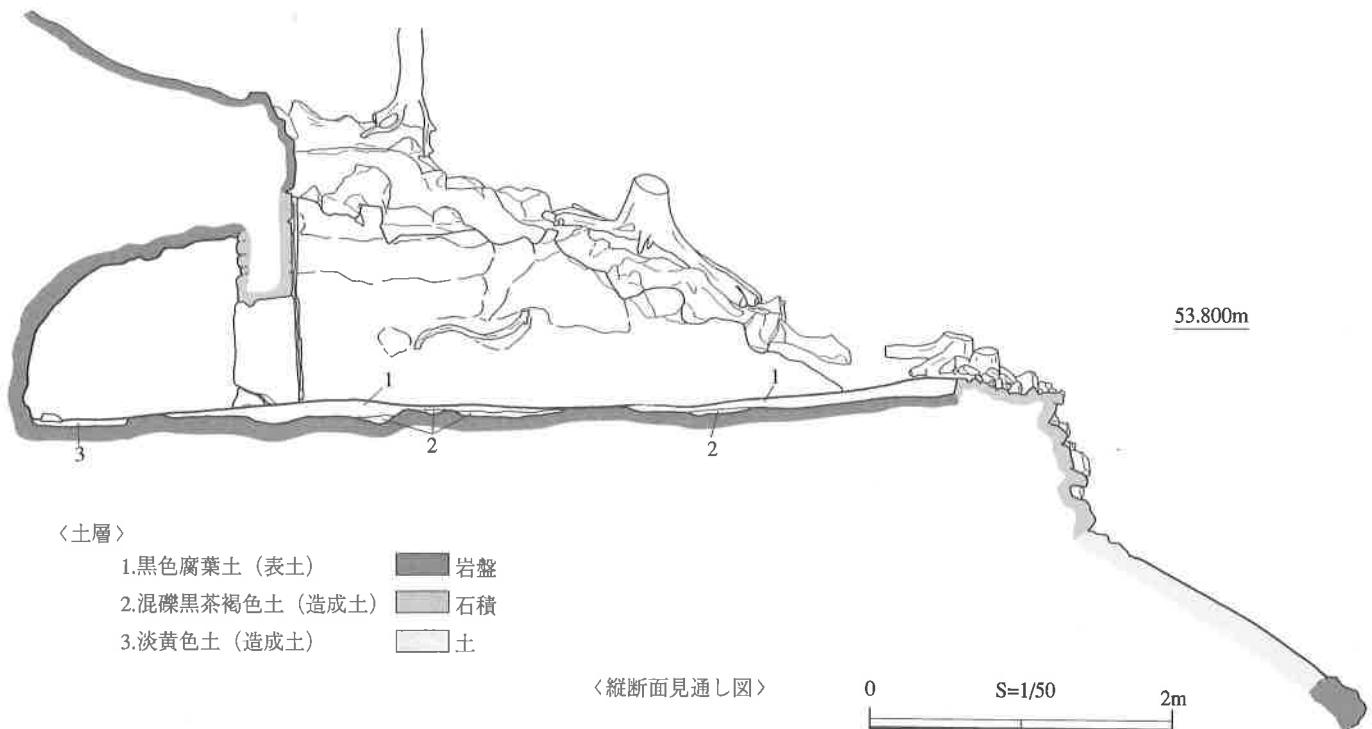
0 S=1/50 2m



〈正面図〉



〈墓室断面図〉



第29図 02-1号墓 正面図・墓室断面図・断面見通し図

## 第4章 世利原の近世墓



第30図 世利原の近世墓の位置

## 第1節 遺構・遺物

墓口床とサンミラーはコンクリートで覆われ、墓庭もコンクリート打ちでコンクリートブロックの袖があった。これらを撤去しての調査であった。

石灰岩岩盤に横穴を掘削し墓室を造る。岩盤はほぼ垂直に切り立っており、人工的に成形された可能性もあるが工具痕が確認できず、自然の断層崖面かもしれない。コンクリートで覆われた墓口の高さは約0.85m、コンクリートを除去するとその下から複数個で構成されていた蓋石のうち最下段の石灰岩2個が現れた。垂直の岩盤を高さ約2m、幅約1.5mに開けてから石積みと敷石で高さ約1.1m、幅約0.7mの墓口を作る。石積みは直接墓口を構成する部分は布積み、楣石より上については粗い相方積みである。墓口床には石列が二つあるが、墓庭側は蓋石を載せるためと正面観の化粧石として、墓室側は最下段の蓋石止めの機能がある。石列は床面の岩盤を溝状に掘削してから設置されていた。尚、蓋石を撤去すると薄く土が堆積しており、その土を除去すると墓庭側の石列上から寛永通宝2点が出土した。

墓室はシルヒラシとタナで構成、シルヒラシの平面形は矩形と楕円形の中間といった形。タナは岩盤の削り出しで左右奥に段差は設けず、左右の平面形は非対称である。天井は一部落盤しているようだが平坦。左タナの端部分のシルヒラシにはピットがあり、獸骨（偶蹄目イノシシ科）が出土した。床には厚さ2～3cmの土が堆積しており上下2層に分けられる。第1層からは缶詰片が出土し現代の堆積、あるいは攪乱を受けている層である。第2層は極めて薄い石灰質の粉の層で造成時（掘削時）に発生・堆積したか、あるいは岩盤の表面の非常に脆い部分を堆積土と誤認した可能性もある。

サンミラーは墓口同様コンクリートを除去すると並べた石灰岩切石が現れる。切石は7個で中央に比べ両脇は小さい。これらの切石は、岩盤を段状に掘削して土を敷いた上に設置している。この切石上面に接して寛永通宝2枚が出土した。

墓口の上方、垂直崖面上部に切石9個が一列に並べられており、亀甲墓でいえばマユ（眉）に相当する部分である。急斜面という地形の制約上チヂ（頂部）をめぐるヤジョーマーイ（ウスディマーイ）の有無の確認作業はできなかった。

墓庭はトレーンチを縦横に設定したが深さ0.8～0.9mで岩盤に到達、すべて戦後の盛土とみられる。岩盤は全くの平坦で、戦後の採石によるものと思われる。右側には岩盤があり袖であった可能性があるが、工具痕などの痕跡は全くない。

遺物は以下のとおりである。

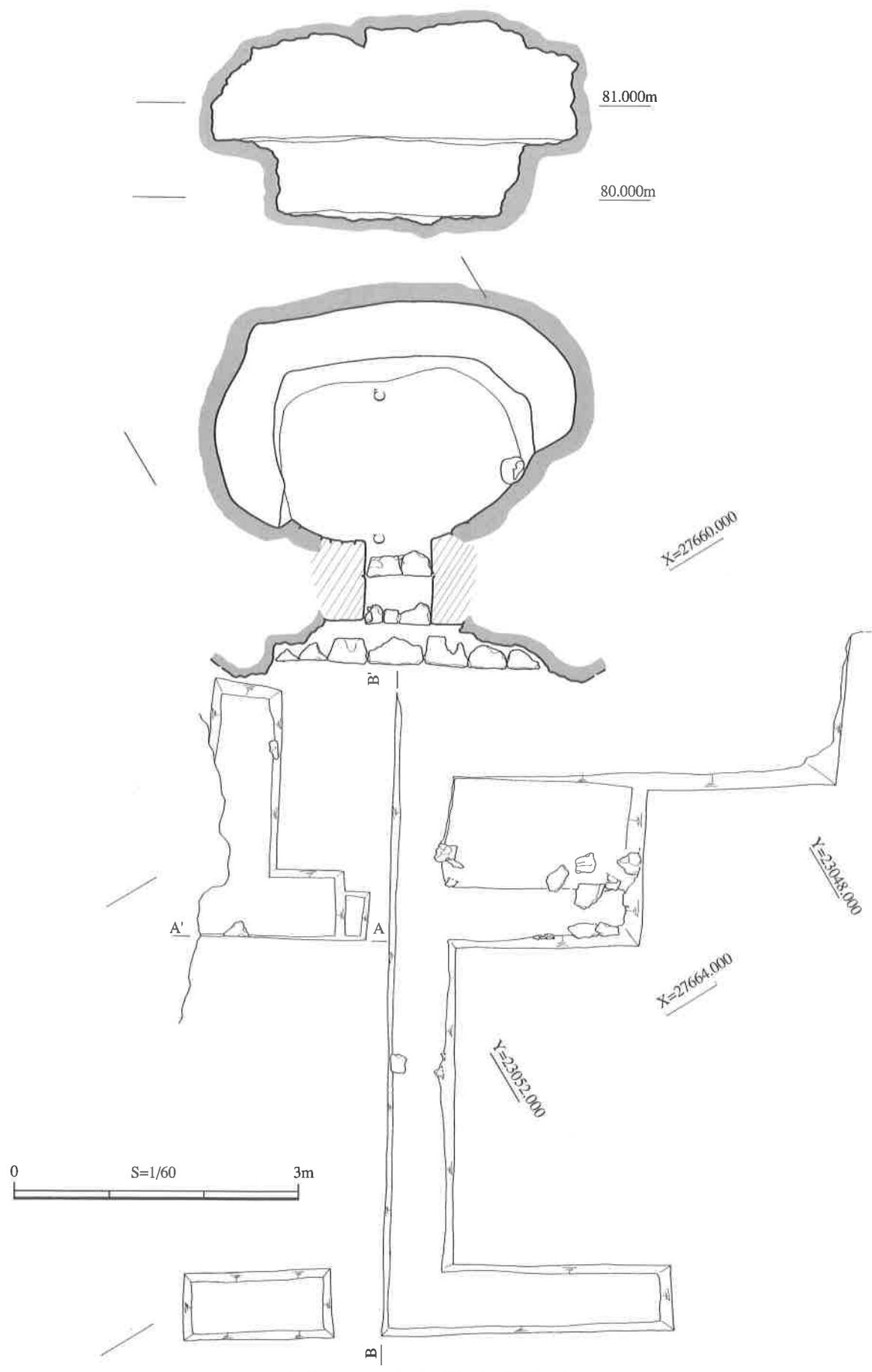
### ① 蔵骨器

当墓は移転されており、空き墓であった。

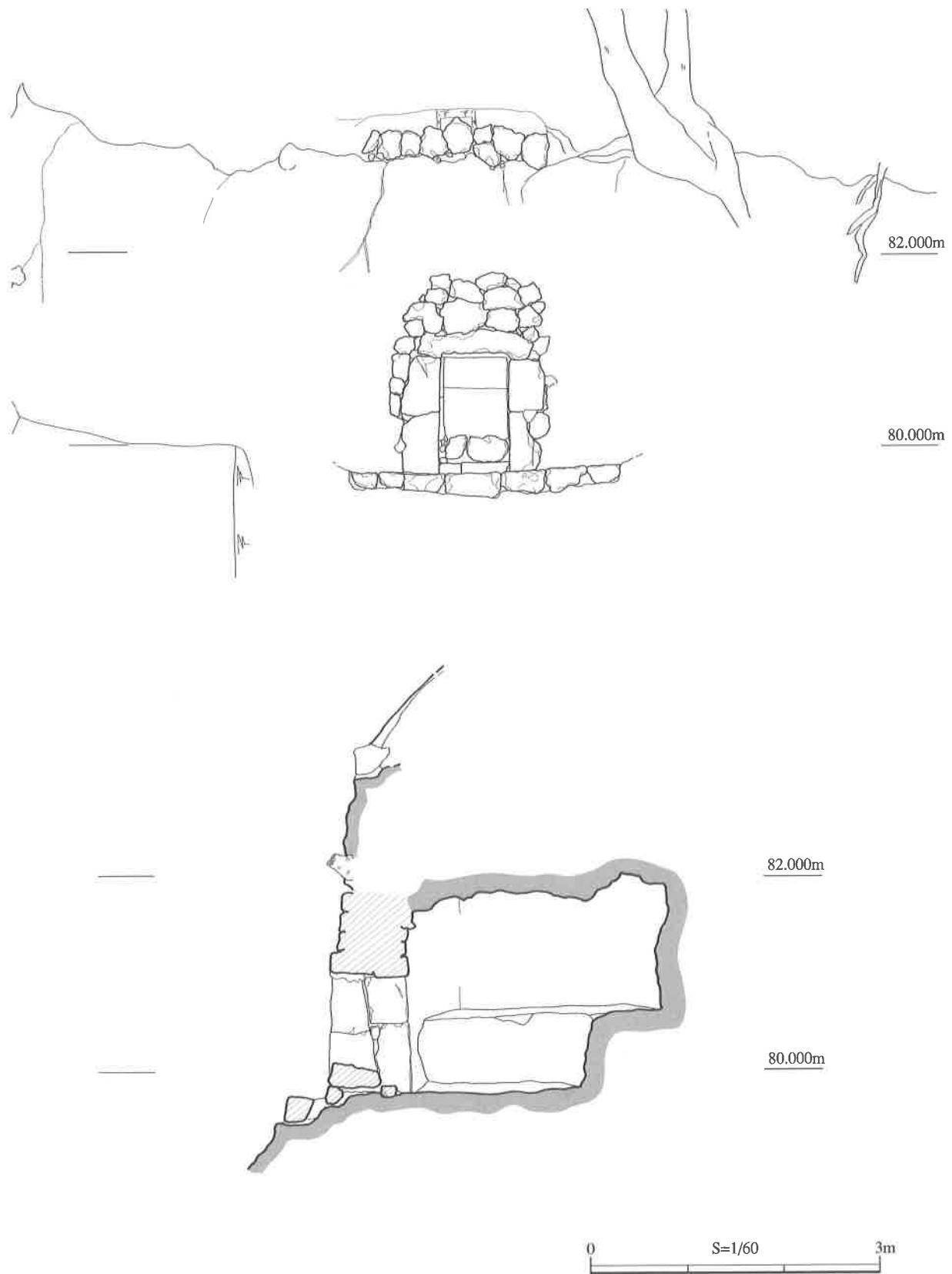
第34図4は墓室に残されていたすり鉢である。蔵骨器の蓋に転用されていたものであろうが、その際の天地は不明。内体面には10本1組のカキ目が放射状に引かれ、カキ目の上端は回転ヨコナデで消されるがわずかに残る。外体面口縁直下は回転ヨコナデにより屈曲部ができるがその下端は稜を残したものである。外底面は無調整。

墓庭の盛土中から厨子甕の蓋が出土（第34図3）。ポージャー型厨子のものでつまみはない。内側には時計回りに次のような銘書が書かれる。

「乾隆六拾年乙卯七月九日たる日嘉里之子嫡子たる日嘉里之子弔…」（乾隆60年=1795）

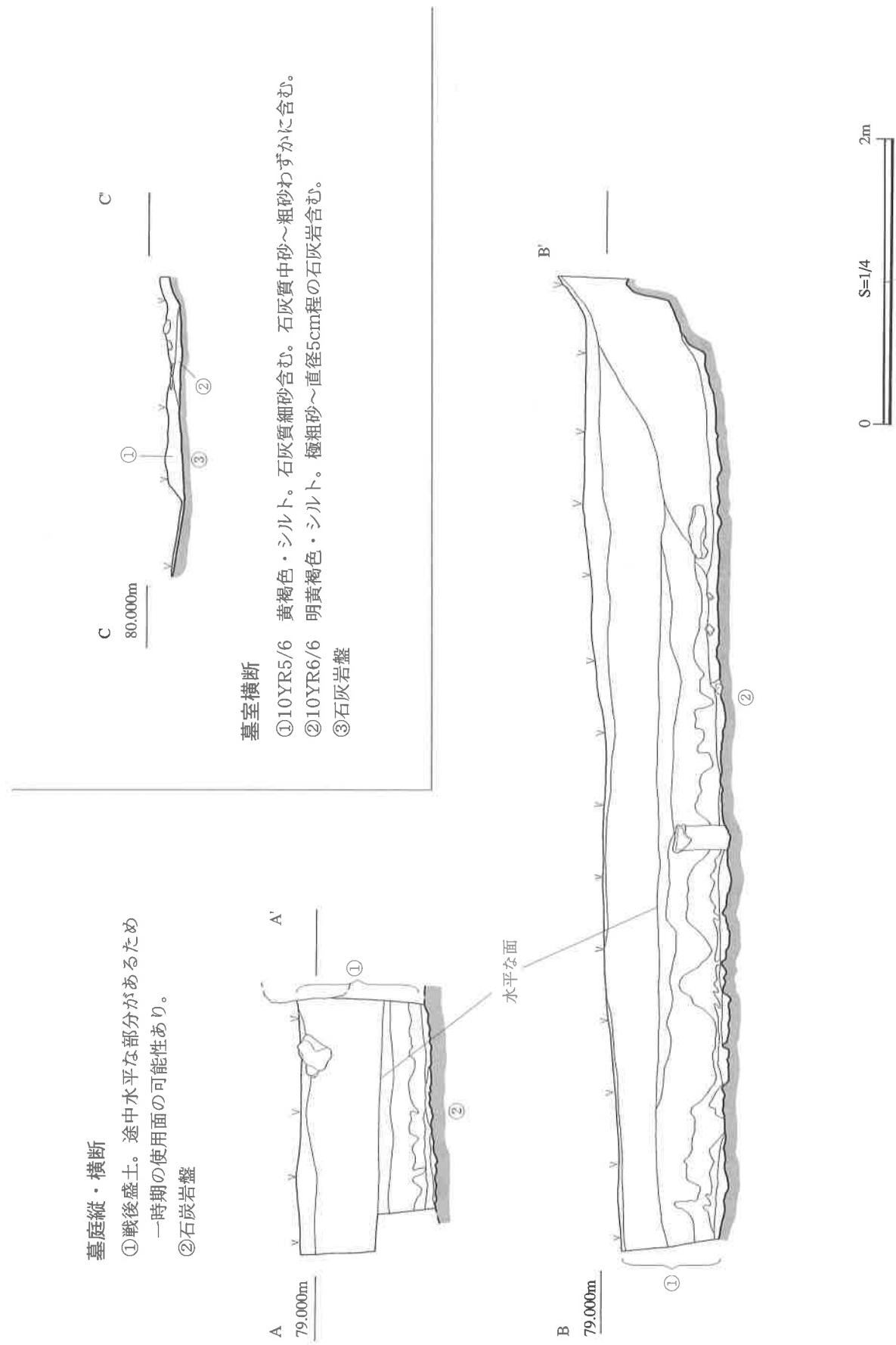


第31図 平面及び墓室横断面



第32図 墓正面及び墓室縦断面

墓庭縦・横断  
 ①戦後盛土。途中水平な部分があるため  
 一時期の使用面の可能性あり。  
 ②石灰岩盤



第33図 墓室・墓庭トレーンチ断面

## ②喫煙具

墓室第1層中からキセルの雁首2点が出土。第34図1は墓口近くで出土。陶製の雁首で火皿の下部が若干欠ける。小口断面はややゆがんでいるが正八角形に近く、火皿も八角形。所々金色の色彩が残っている。第34図2は銅製の雁首。所々緑青を生じる。シルヒラシの最奥から出土。

## ③銭貨

銅製の寛永通宝が5点出土している。

遺構の説明で触れたように、蓋石を撤去すると墓口の石列上から寛永通宝2点が出土した(第34図5、6)。いずれも古寛永である。

左から三番目(墓口の左手前)のサンミラーの切石上面に接して寛永通宝が2点出土。第34図7は背に「文」字があり、寛文8年(1668)から天和3年(1683)に鋳造されたとされる「文銭」である。一方の8は古寛永である。

その他墓室の第1層から新寛永が出土している(第34図9)。

### 出土銭貨一覧

図版番号	銭貨名	種別	背文	寸法(cm・g)			
				外径	郭内幅	厚さ(輪)	重量
第34図5	寛永通宝	古寛永	なし	2.47	0.55	0.13	3.77
第34図6	寛永通宝	古寛永	なし	2.45	0.57	0.11	3.21
第34図7	寛永通宝	新寛永	「文」	2.52	0.57	0.13	3.62
第34図8	寛永通宝	古寛永	なし	2.45	0.54	0.14	3.53
第34図9	寛永通宝	新寛永	なし	2.26	0.60	0.13	2.87

※寸法(cm)は各銭二箇所を測定した平均。

## ④獣骨(第35図)

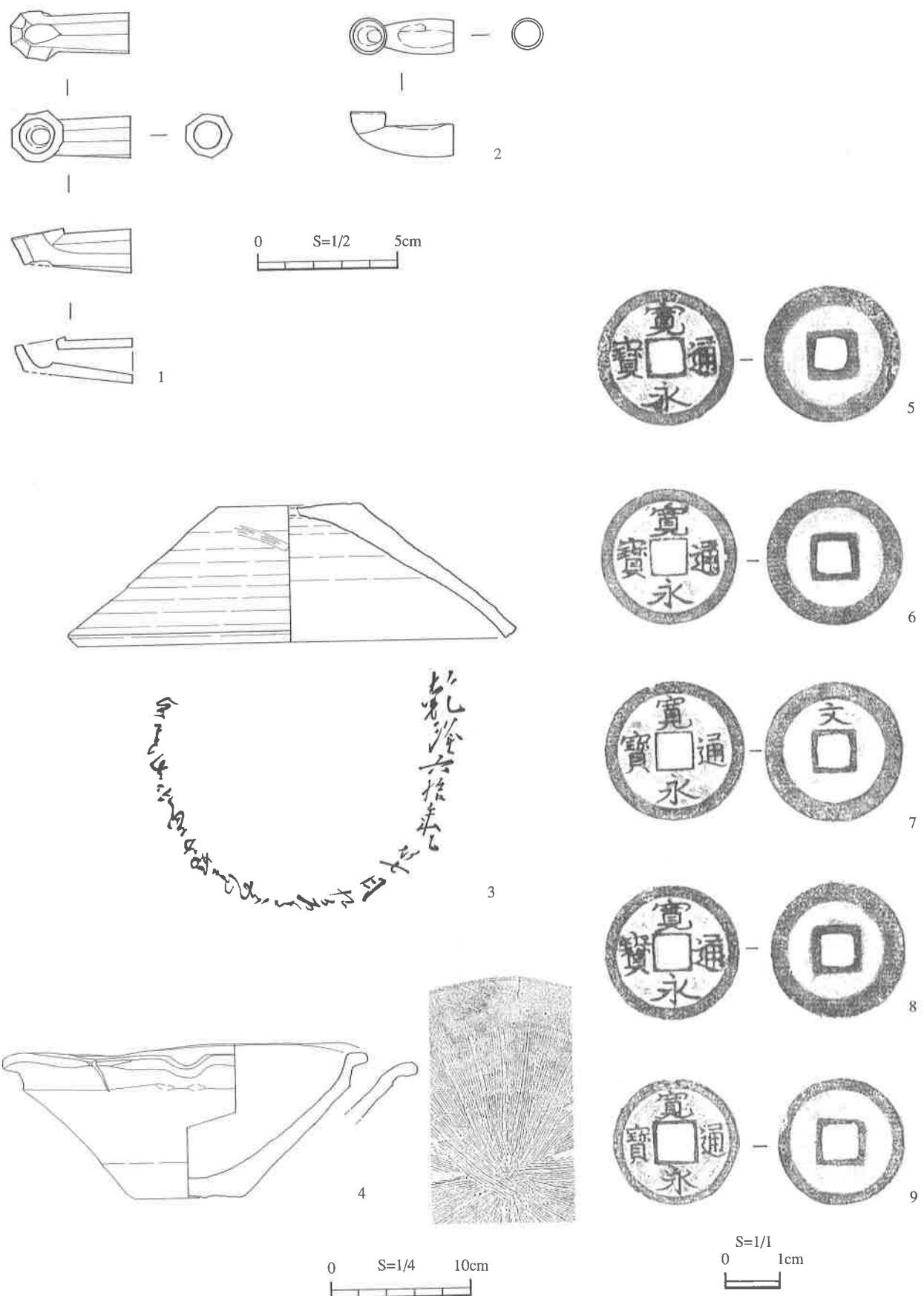
墓室のピットから出土した獣骨は偶蹄目イノシシ科のものである。頭蓋が墓口の方を向いて埋納されていた。また下顎骨の下から肢端骨が出土した。指の骨だけで7本分、いずれも第三指ないし第四指の基節骨・中節骨・末節骨である。うち5本分は基節骨の上端は欠けている。また2本分は関節したまま(うち1本は基節骨・中節骨のみ)出土している。

尚、上顎及び下顎骨は遺存状態が悪く、複数の破片となりこれらの接合は完全には無理であった。

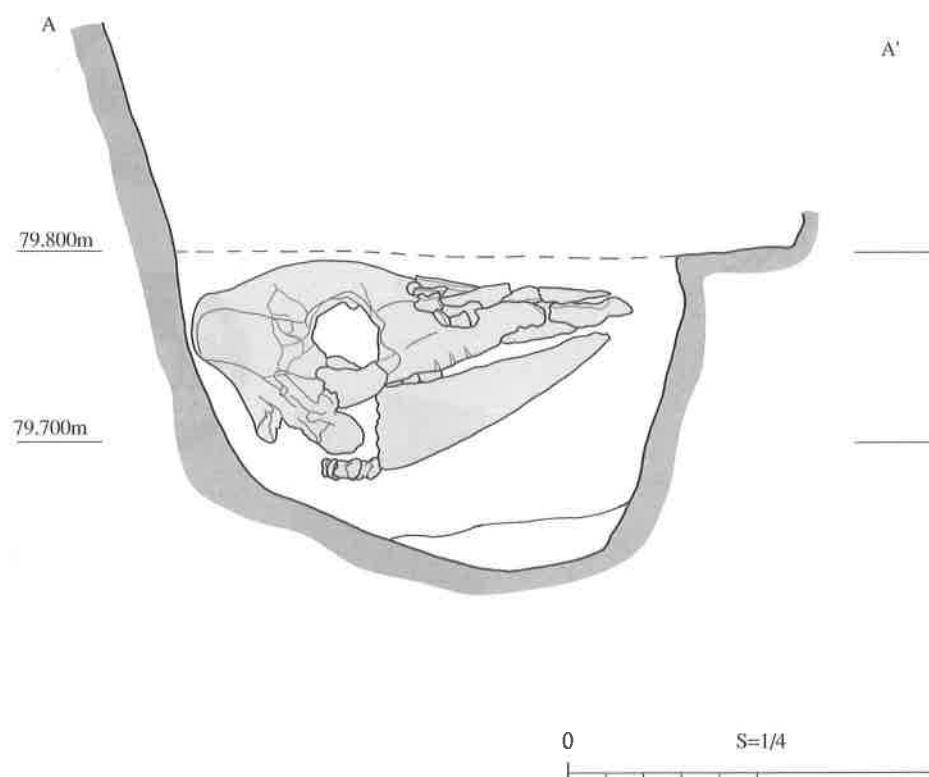
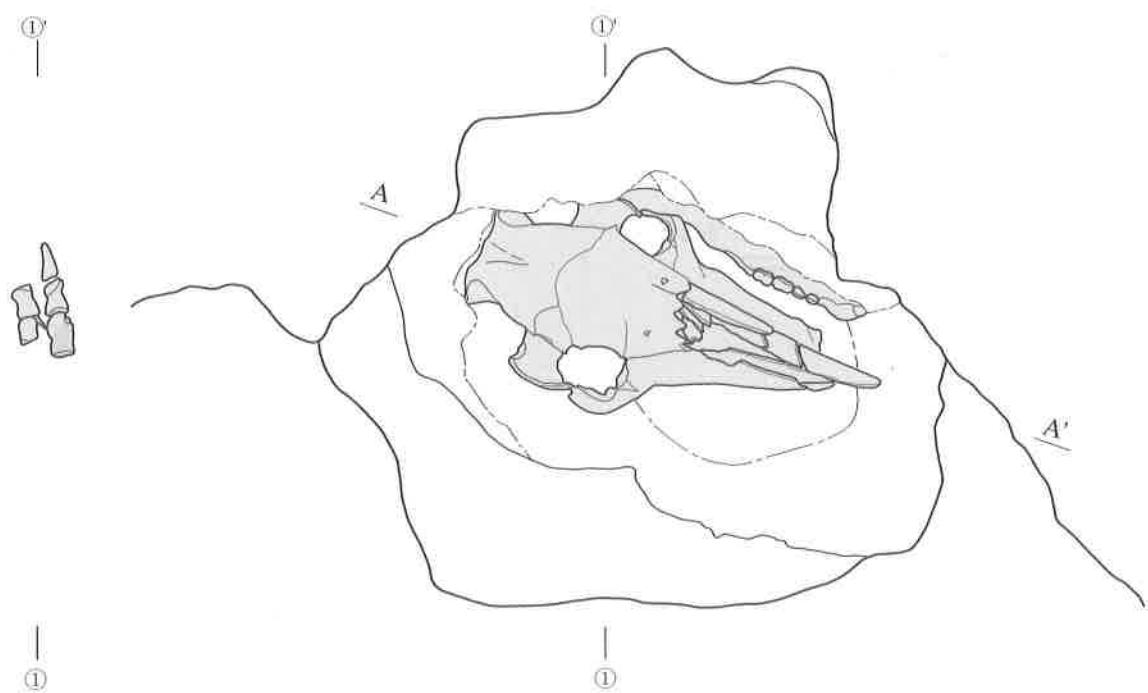
## 第2節 小結

現在浦添市で調査の進んでいる前田・経塚近世墓群は、18世紀初頭頃から墓が造られ始め以後連綿と増加し続けたと考えられる。この墓群では大部分が墓口は高さ90×幅60cm、墓室平面は矩形で左右対称という特徴をもっているが、これを18世紀以降の典型と仮定するならば当墓はその範疇からはずれる(墓口は110×70cm)。一方、墓室掘削の際は掘り始めから奥まで幅広く掘る16世紀頃とみられる当山世利原古墓群とは異なり、明確に墓口部分と墓室の幅は掘り分けており先の“18世紀以降典型”タイプに近い。当墓の造営は時期幅は広いが当山世利原古墓群と前田・経塚近世墓群の中間時期といえよう。

また墓口の上方にある石列がマユ(眉)であるならば、その位置はサンミラーから3m以上、墓口上



第34図 出土遺物



第35図 獣骨埋納状況

端からでも2m近くある。浦添市指定史跡「玉城朝薰の墓（邊土名家の墓）」は17世紀後半から18世紀初頭頃に造られたとされるが、マユの高さはサンミラーから約3.75m、墓口上端から約2.2m、墓口は130×75cmある（いずれも復元値）。内部は矩形であり、石柱で天井石を支えるなど墓室の構造は全く異なるが、外部の寸法は近似値を示している。これが時期を示すものかは不明だが、類例として挙げておく。

最下段が残されていた石の蓋の下から寛永通宝が出土しているが、いずれも古寛永である。古寛永は寛永13年(1636)～万治2年(1659)に鋳造されたものだが、これがいつ置かれたものか、あるいは墓の造営時期を反映するものなのは不明である。先に触れた前田・経塚近世墓群でも墓口から寛永通宝が出土した例があり、墓口に銭貨を置くという行為が注目される。また墓室のピットから出土したイノシシ科の獣骨に関して、頭蓋骨のみではなく脚先の骨が出土しており、その数から四本の脚先を埋納していたことがわかる。また関節したまま出土しているものがあることから、脚先をそのままか筋が残った状態で埋納していた。イノシシ科の頭骨を埋納する例は多々あるが、今回の事例から骨そのものではなく皮や肉あるいは筋の付いた状態で埋められた可能性が推察できる。

## 参考文献

- 浦添市史編集委員会1983『浦添市史』第四巻資料編3 浦添の民俗  
浦添市当山自治会2005『浦添市当山区成立八十周年記念誌 当山』  
加藤嘉太郎1979『家畜比較解剖図説』第二次増訂改版 養賢堂  
高橋照彦2001「近世銭貨の生産と品質規格－寛永通寶と長崎貿易銭の法量計測的研究－」『鹿園雑集』第2・3号  
合併号 奈良国立博物館

## 第5章 総括

## 世利原群と宗地原群の相違

今回報告した墓（群）は牧港川を挟んで存在しており、まさに目と鼻の先の距離にある。しかし川の右岸と左岸とでは明らかな違いがみられた。

まず左岸の当山世利原古墓群（以下世利原群）は、使われている蔵骨器から近世期以降にも使用されていたことは明白ではあるが（現在でもコンクリートで補修して使用しているものもある）、前田・経塚近世墓群のような浦添で一般的にみられる近世墓とは明らかに墓室の形態や墓口のサイズなどが異なる。また外観を見るとソディシ（袖石）は存在せず、シミイシ（隅石）があるものもあるが墓口上部を形成するのはジョウカブイではなく楣石というべき石である。墓口を形成する石以外にしても切石積と野面積の両者があるが、概して後述の宗地原群に比べ小振りの材で小禄墓（宜野湾市）や伊祖の高御墓（浦添市）をイメージさせる外観を呈する。99-1号墓の蔵骨器は石厨子とボージャー形厨子で構成され、いわゆるマンガン形厨子は蓋1点のみである。銘書で古い紀年銘は雍正3年（1725）であるが、それは墓が使用されていたある一時点を示すものと解される。

04-3号墓は横穴内に一間×一間の礎石立ちの建物（屋根の有無など上部構造は不明）があり、朱漆塗りの木製厨子が安置されていた。木製厨子は16世紀前後のものとみられ、世利原群は少なくともこの時期には造営が始められており、その後外部構造を替えたり内部を整理したりしながら墓群は現在まで使用され続けている。

世利原群がある丘陵崖面の延長に当山の近世墓がある。他に近くに2基の墓があるがいずれも世利原群とは言い難い距離であり、またこれら3基が関係して存在しているともいえない。ただその構造から、近世の造営であったとしても早い段階の可能性が考えられる。調査では埋納獸骨や墓口・サンミデーからの寛永錢出土など造墓時やその後の祭祀に関する資料が得られている。

一方右岸の当山宗地原近世墓群（以下宗地原群）はその全体像は世利原群より不明瞭である。墓数もさほど確認されておらず、調査も今回の02-1号墓1基のみである。しかし墓群を概観すると岩盤に開けた（あるいは開いた）横穴の前面を積石で塞ぐのは世利原群と同じだが、その塞ぎ方が明らかに異なる。宗地原群では墓口を構成するジョウカブイやシミイシと判別できる切石の石材があり、また脇にスディが造られている。総じて世利原群よりも切石を多用し、定型化している様子がうかがえる。

牧港川を挟んで向かい合う丘陵斜面に存在する両墓群であるが、その様相は大きく異なっている。墓の構造から北東に墓口を向ける世利原群が先行し、南西方向を向く宗地原群が新しいとみてよかろう。ただお互い目の前に存在する両者の関係は不明である。

## 16世紀前後の周辺の様子

世利原群04-3号墓の被葬者については浦添に関係のある有力者という想像はしてよいであろう。16世紀前後というこの時期には、第二尚氏第3代尚真王の長子・尚維衡（1494～1540）が「浦添城」に「隠居」している（『球陽』ほか）。尚維衡が移ってきた時点で城の様子は、城郭は損壊し宮殿は荒れ果て草は生い茂り「人の居る所に非ず」（『呉姓家譜(我那霸家)』）という状況であったという。尚維衡は浦添ようどれに葬られたが（後に玉御殿に移葬）、その子や孫、いわゆる浦添家の人々が1620年に浦添ようどれに移葬されるまでどこに葬られていたのかは明らかにされていない。城跡の北西側には当山東原遺跡があるが、ここでは14～16世紀の掘立柱建物跡等の柱穴が多数確認され青磁・白磁・青

花・褐釉・三彩・高麗青磁など輸入陶磁器が出土しており「有力者」に関わる遺跡とされている。この「有力者」がグスク時代の浦添按司や尚姓浦添の人々かもしれないし、あるいは「有力」な家臣の可能性もある。いずれも04-3号墓に直結する情報ではないが、当時の近傍はこのような状況であった。

## 集落との関係

では近世以降はどのような状況であろうか。墓は人の住んでいる所から見えない場所に造るとされる。世利原群が存在する丘陵の南斜面には仲間集落がある。発掘調査から12世紀には集落の萌芽がみられ、13世紀中頃から14世紀の柱穴が確認されている。また包含層からは15世紀以降の遺物や壺屋産陶器も出土している。集落背後の北斜面（崖面）に世利原群という墓域が存在することから何らかの関係を考えたくなるが、両者を結びつける証拠は現段階では皆無である。一方宗地原群に近いのは当山であるがやはり当山あるいは仲間との関係は不明である。あるいは下流域の集落も考慮する必要はあろう。

世利原群で確認された銘書をみると仲間ではなく玉城間切和納村や浦添間切西原村の地名が確認でき、また現在使用されている墓に掲げている“表札”に「浦添西原」と記しているものがある。西原については墓群から断層崖に沿って南東約800mに県立鏡ヶ丘養護学校があり、ここはかつて（1609年以前のことという）西原の集落があった古島であるといわれる（5頁第1図参照）。なぜ玉城間切の人の墓があるのかは不明だが、伝承では最初に浦添の当山集落を形成したのは島尻の「安富祖當山」からの移住者といい、それは玉城間切当山のことという。（玉城間切和納（和名）村は現在垣花の一部だが当山とは離れている）。

墓の立地や集落との関係は重要であるが、現段階でいえるのはこの程度である。

### （参考文献）

- 浦添市教育委員会1983『うらそえの文化財－民俗文化財分布調査－』
- 浦添市教育委員会2003『当山東原遺跡 市道48号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』
- 浦添市教育委員会2004『墓からわかる家族の歴史 近世墓シンポジウム報告書』
- 浦添市教育委員会2007『市内遺跡発掘調査報告書(1)』
- 浦添市教育委員会2007『仲間後原遺跡・仲間あさと原の印部土手』
- 浦添市史編集委員会1982『浦添市史第三巻資料編2 民話・芸能・美術、工芸』
- 中世墓資料集成研究会2004『中世墓資料集成－九州・沖縄編（2）－』

# 図 版

## 当山世利原古墓群

図版  
1



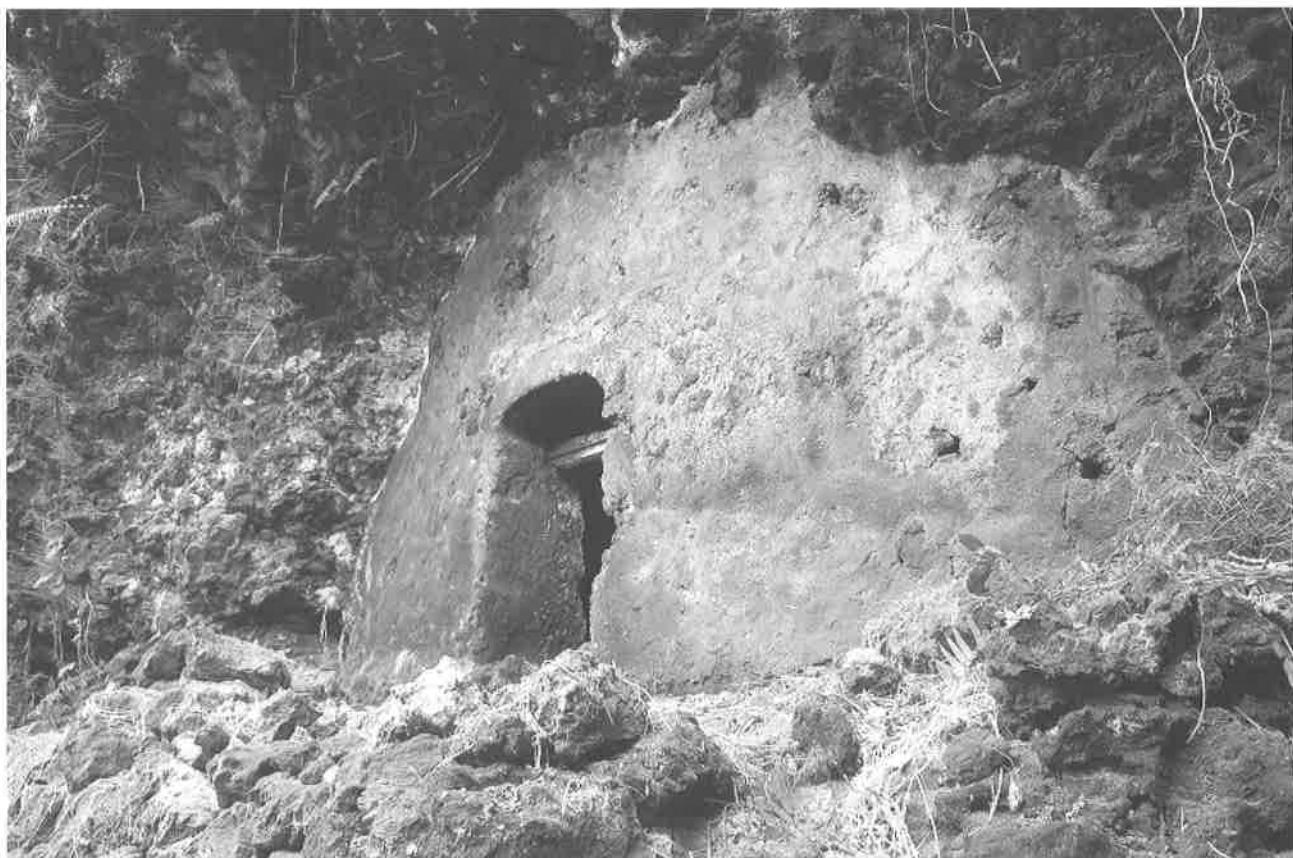
当山世利原古墓群(右側丘陵)と当山宗地原近世墓群(左側丘陵)  
中央奥に浦添ようどれが見える。河川は牧港川



当山世利原古墓群遠景  
右端が04-1～04-3号墓



当山世利原古墓群99-1号墓



99-1号墓正面

当山世利原古墓群99-1号墓

图版  
3



99-1号墓 厨子甕散乱状况



99-1号墓 墓室内1



99-1号墓 墓室内2



99-1号墓 墓室内3

当山世利原古墓群99-1号墓

图版  
5



1



2



3



4

99-1号墓 厨子甕身

图版  
6



99-1号墓 厨子甕身

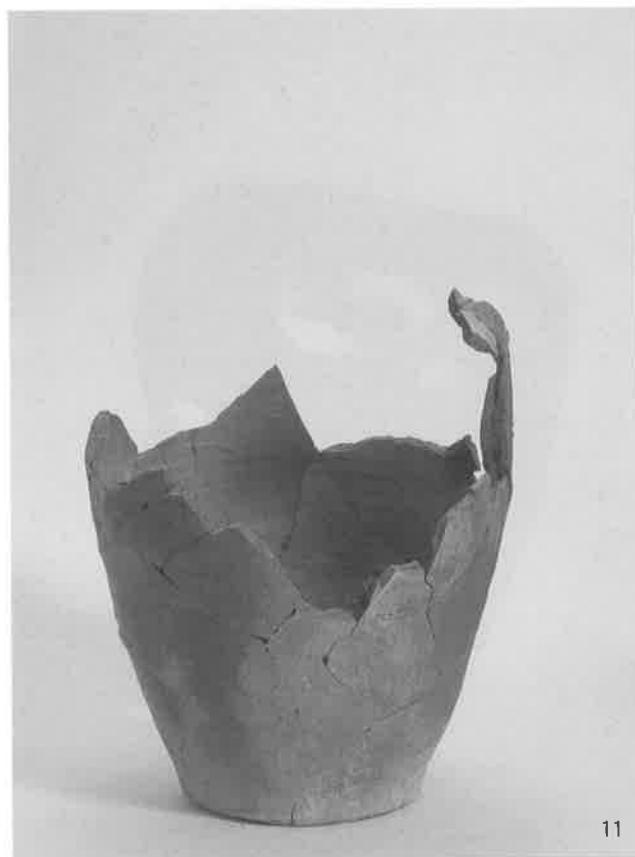
图版  
7



9



10



11



12

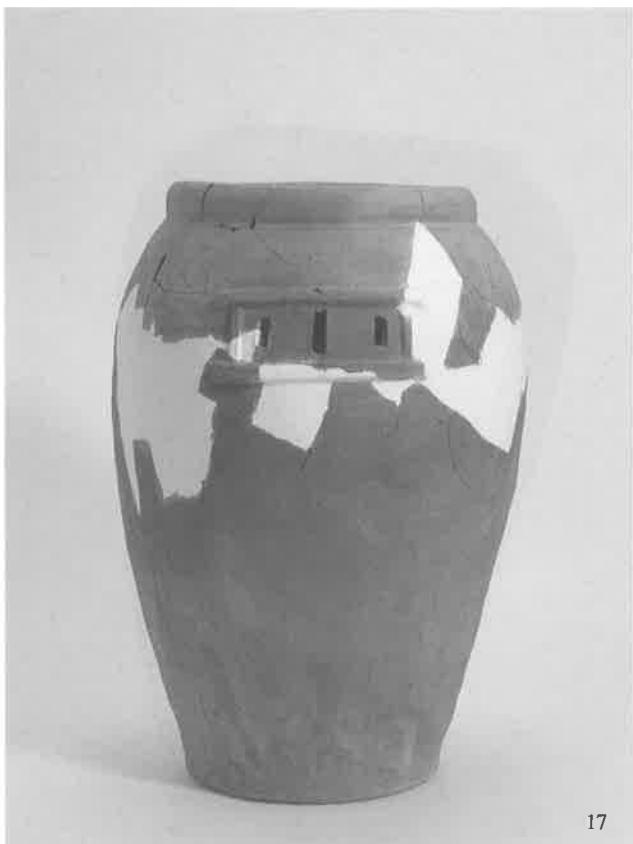
99-1号墓 厨子甕身



99-1号墓 厨子甕身

当山世利原古墓群99-1号墓

图版  
9



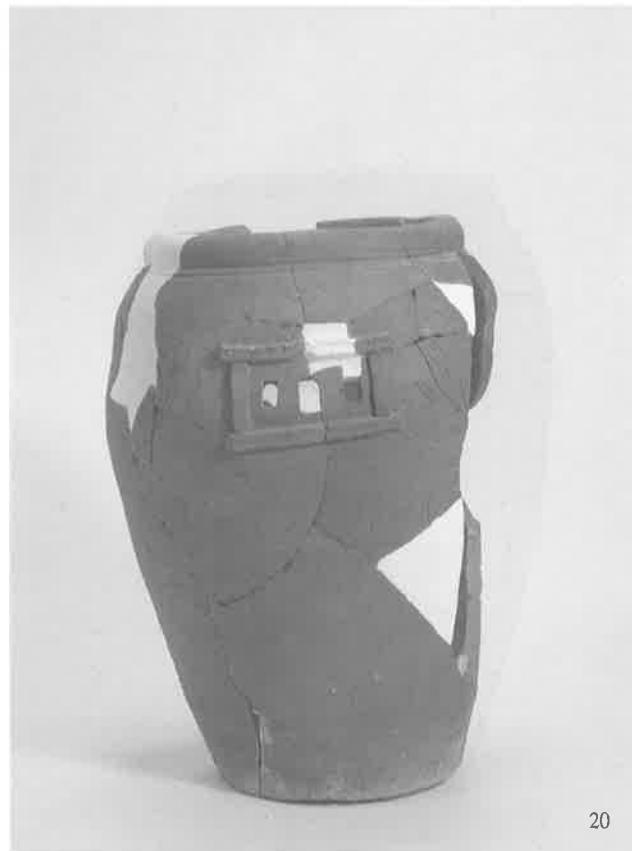
17



18



19



20

99-1号墓 厨子甕身



21



22



23



24

99-1号墓 厨子甕身

图版  
11



99-1号墓 厨子甕身



29



30



31



32

99-1号墓 厨子甕身・転用厨子

当山世利原古墓群99-1号墓

图版  
13



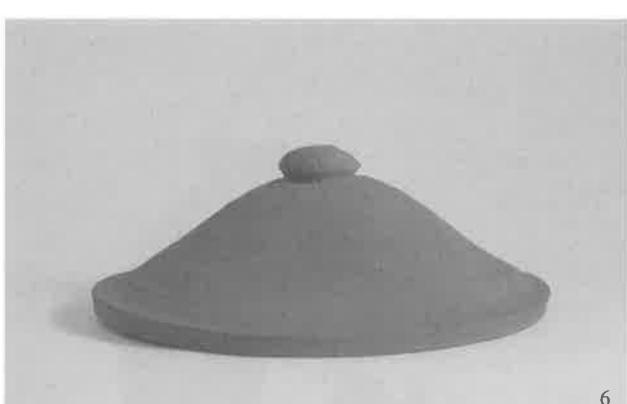
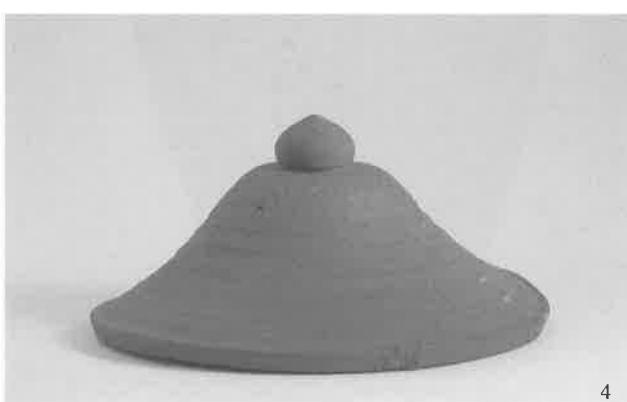
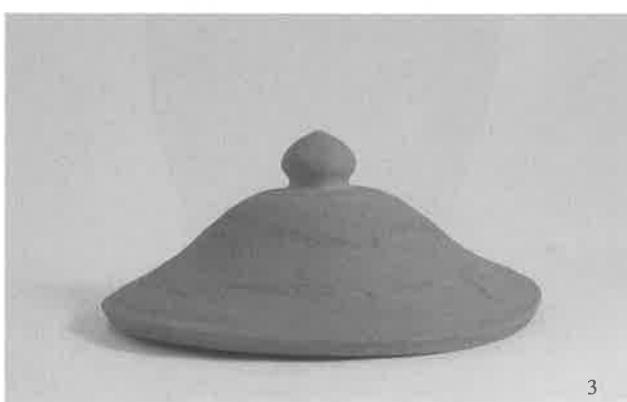
99-1号墓 転用厨子



99-1号墓 転用厨子

当山世利原古墓群99-1号墓

图版  
15



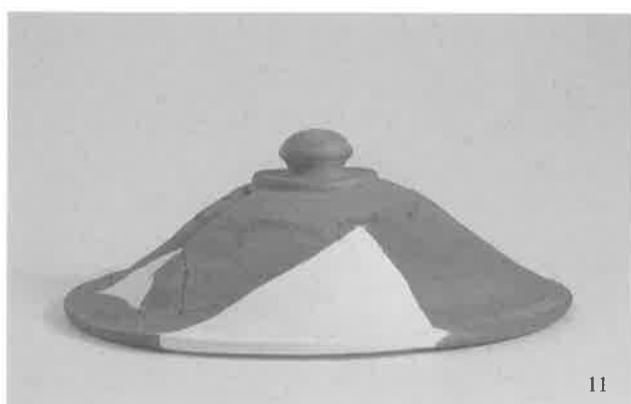
99-1号墓 厨子甕蓋



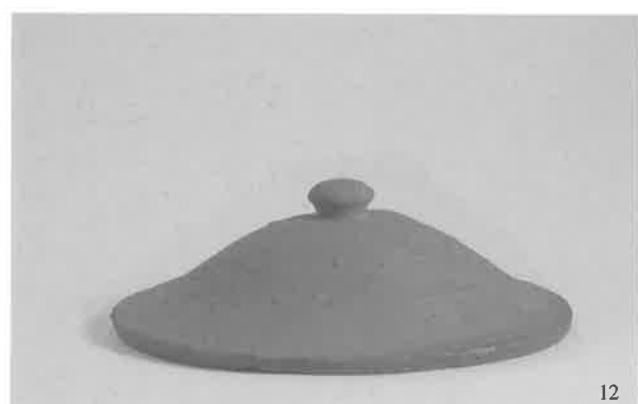
9



10



11



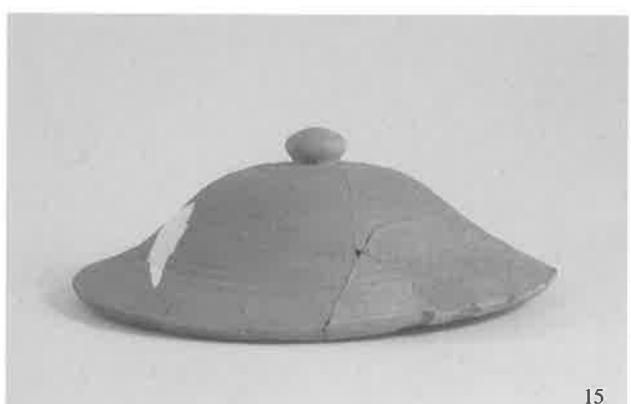
12



13



14



15



16

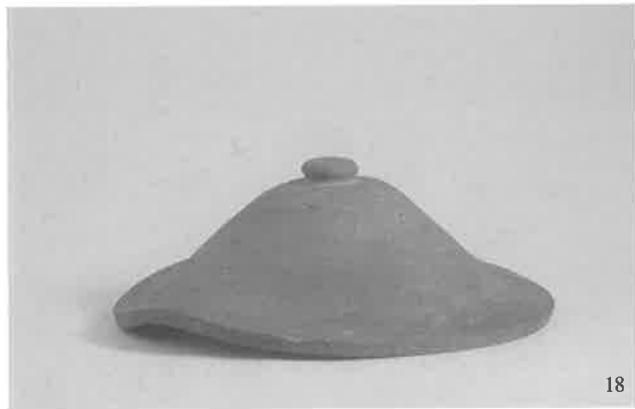
99-1号墓 厨子甕蓋

当山世利原古墓群99-1号墓

图版  
17



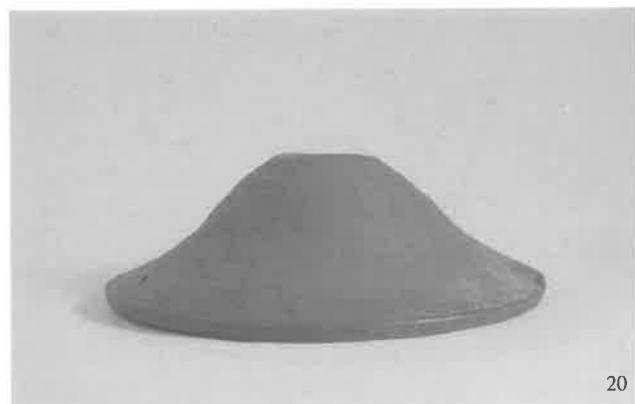
17



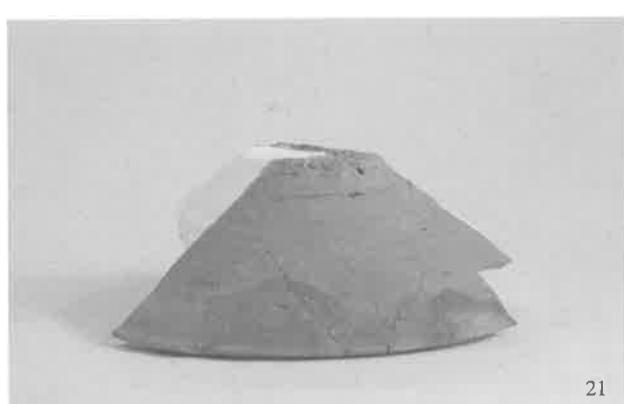
18



19



20



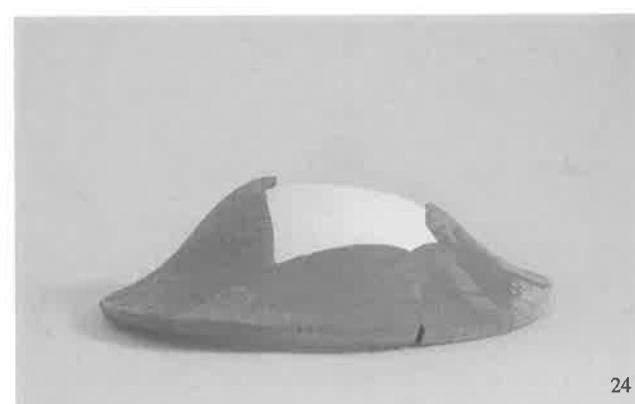
21



22



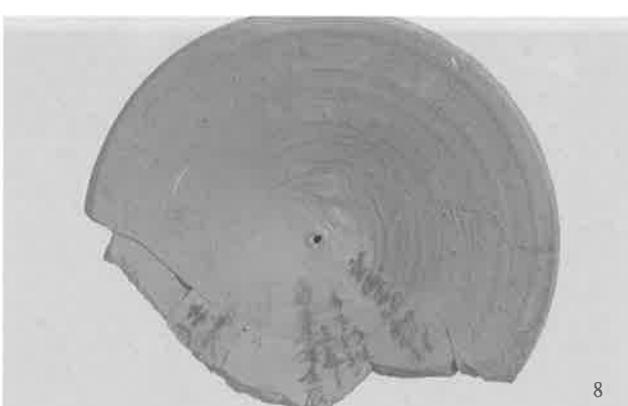
23



24

99-1号墓 厨子甕蓋

図版  
18



99-1号墓 廚子甕蓋・銘書

当山世利原古墓群

図版  
19



当山世利原古墓群遠景(調査対象外)



当山世利原古墓群遠景  
左より 04-1・04-2・04-3号墓



04-1号墓



04-1号墓完掘状況



04-1号墓 墓口のピット



04-3号墓 第3層人骨出土状況  
左端は礎石2



04-3号墓 第5層上面  
中央は土層観察用のアゼとトレンチ



磁石1(左)と磁石2



磁石3(左)と磁石4(矢印)

図版  
23



礎石2撤去後埋土断面



洪武通宝出土状況(矢印)  
礎石1(左)と礎石2(右)のピットは完掘済み

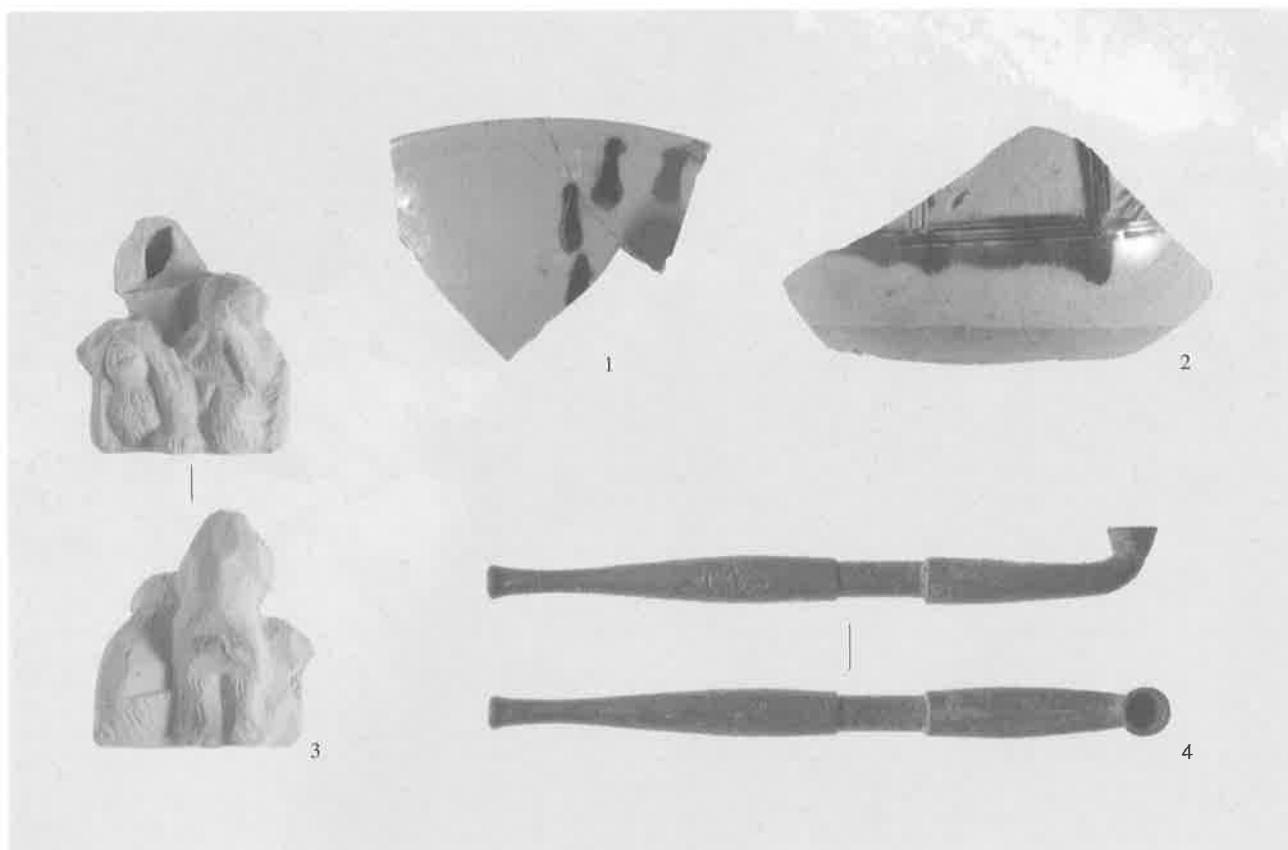


墓口堤状の土留め  
中央は岩盤の亀裂、右手奥は礎石1のピット

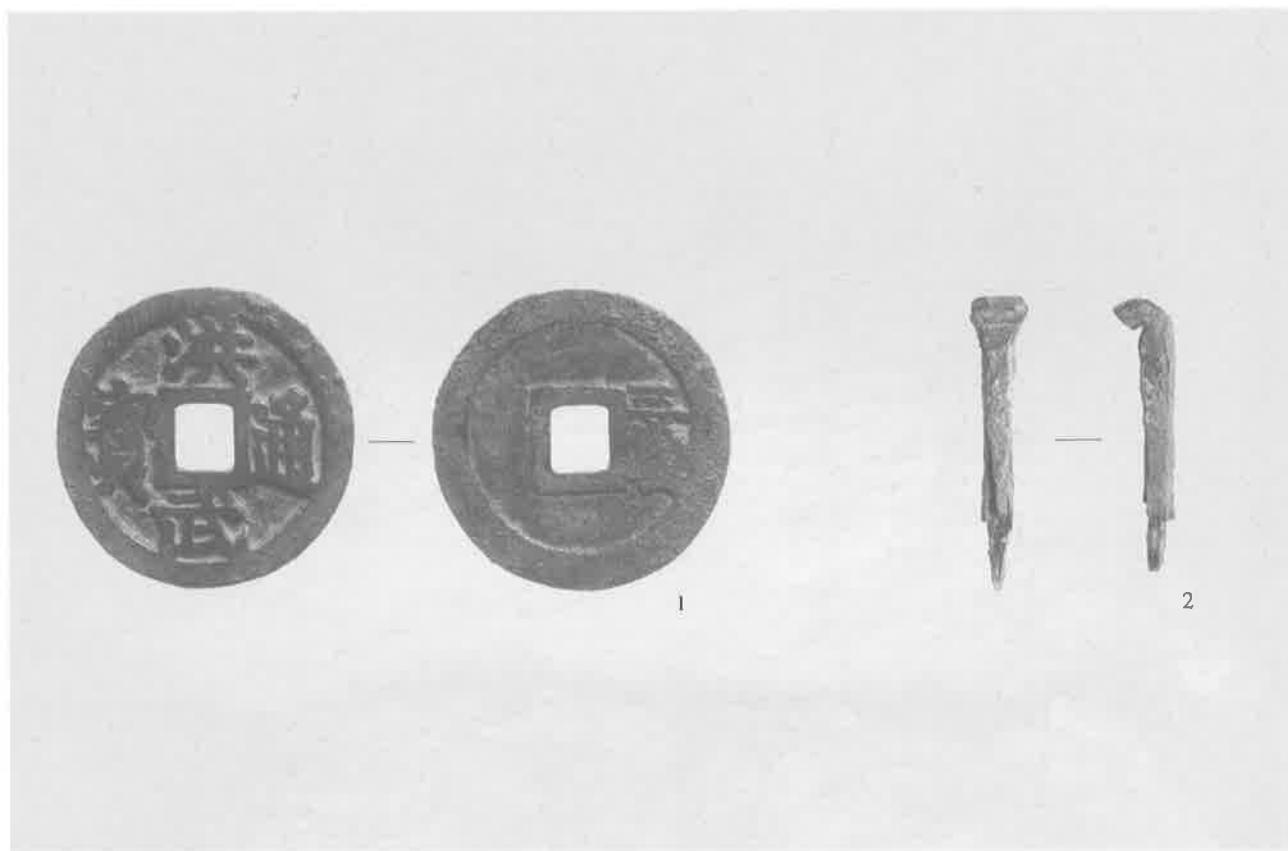


完掘状況

图版  
25



04-1号墓 出土遗物



04-3号墓 出土遗物



## 世利原の近世墓

図版  
27



遠景



調査中全景



墓正面



墓室



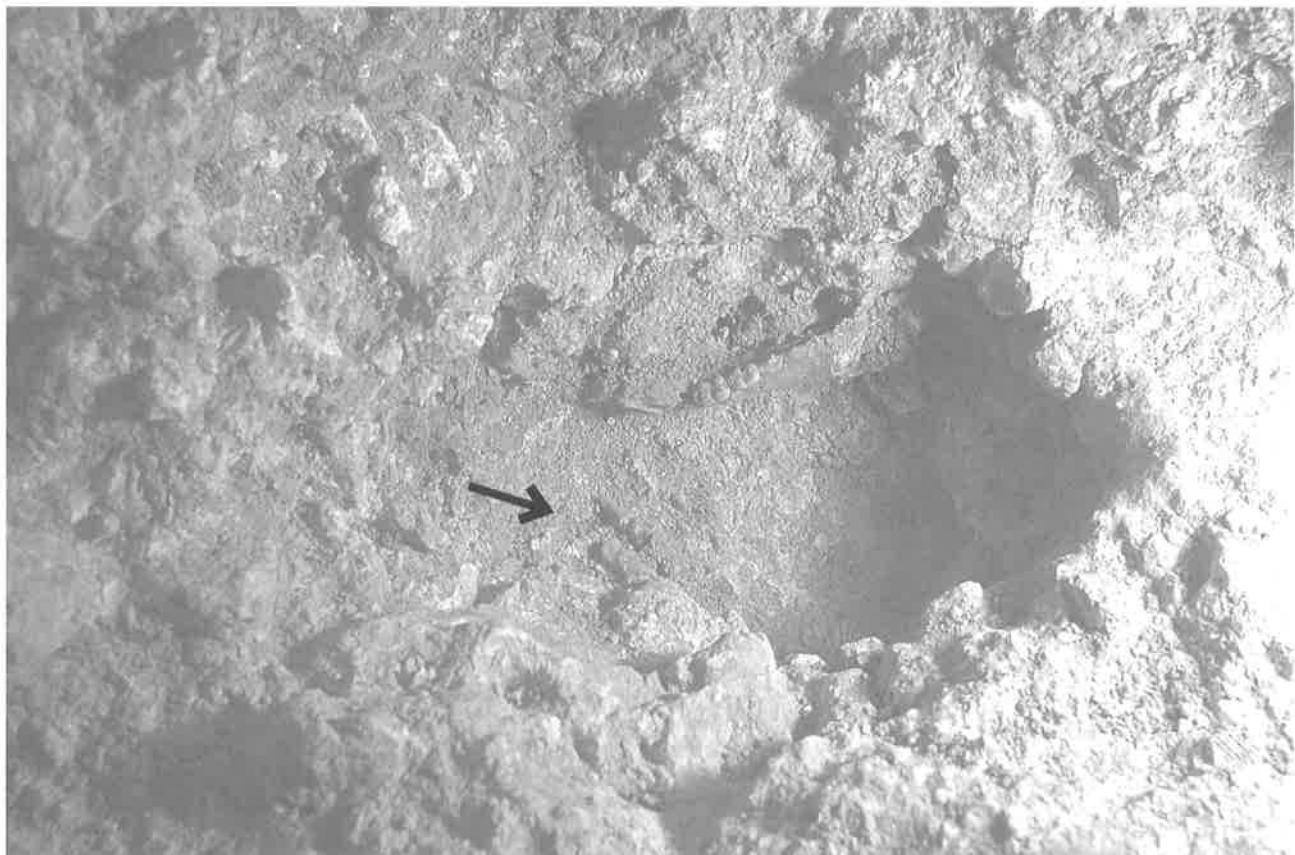
蓋石下寛永通宝出土状況



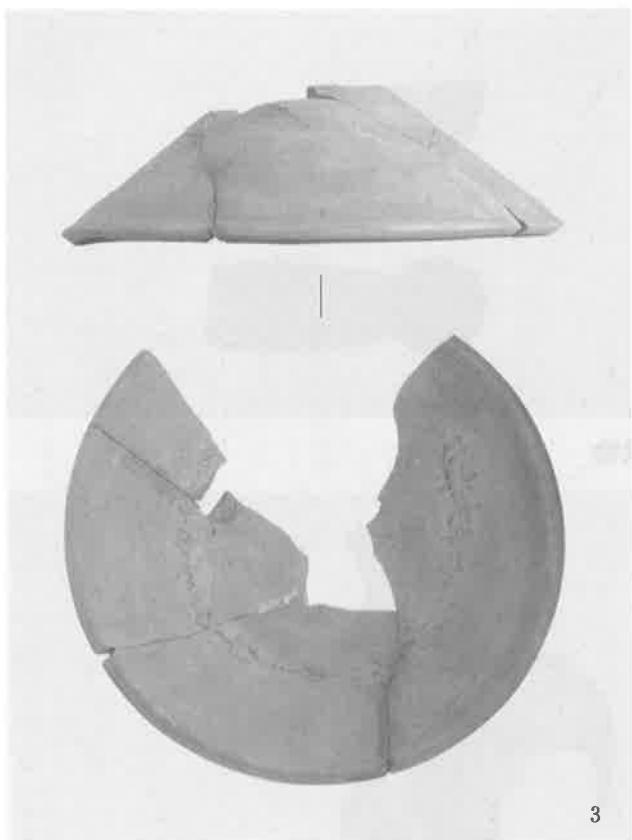
獸骨埋納ピット



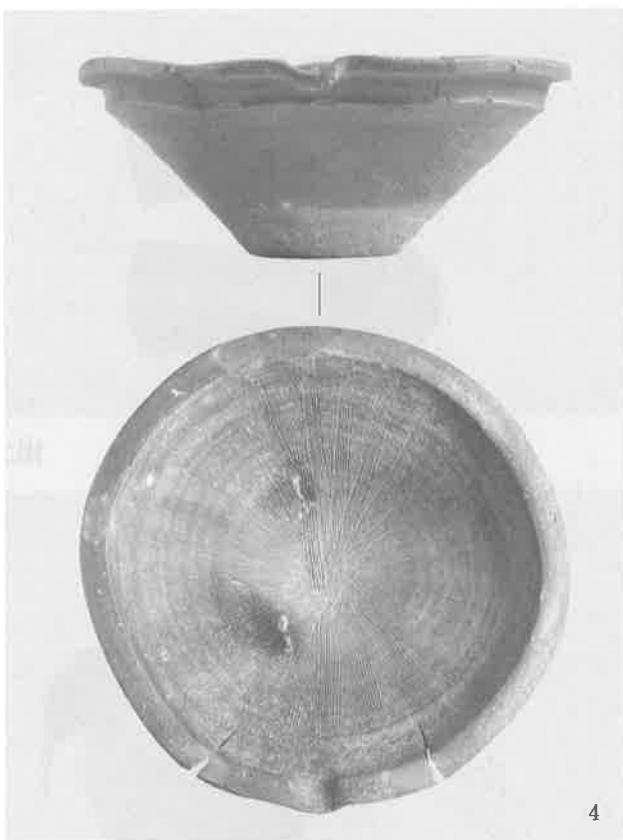
獸骨埋納状況



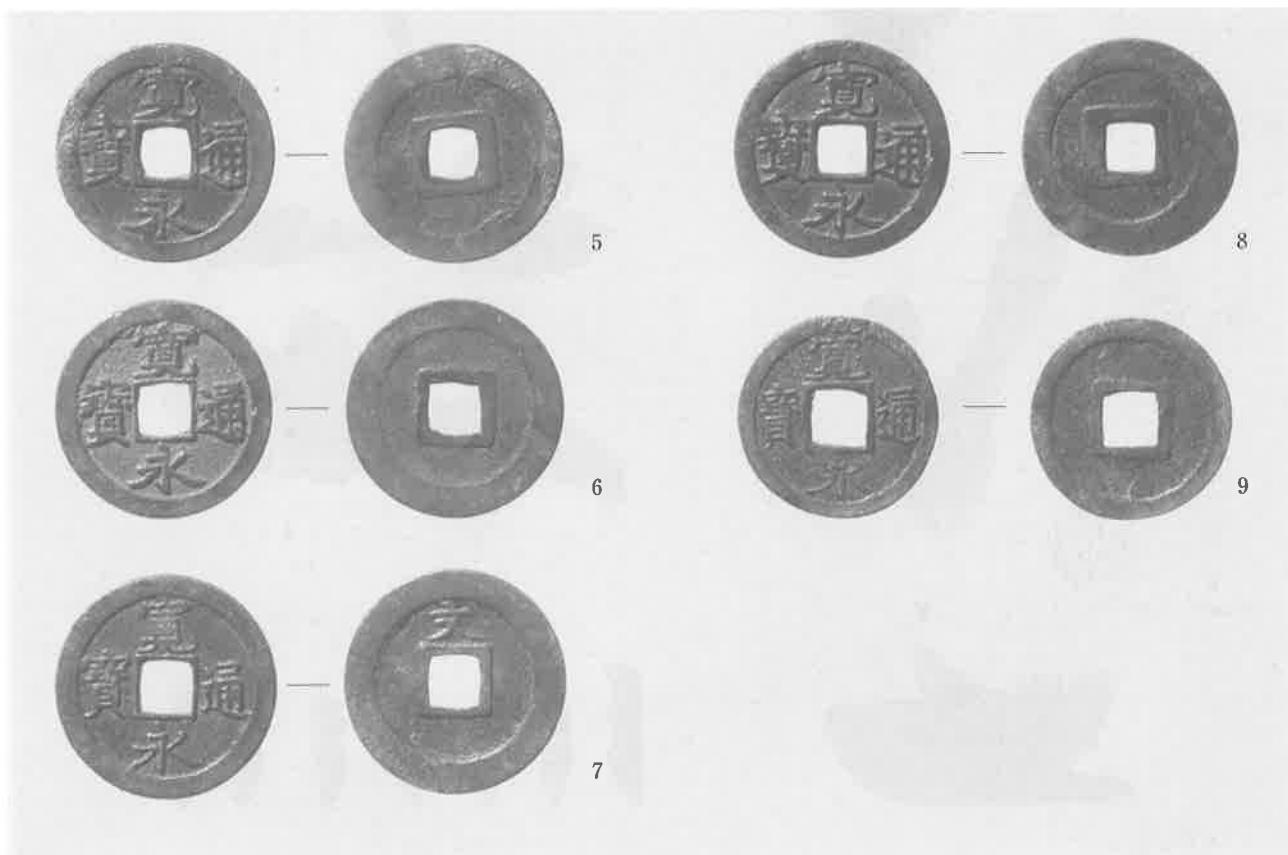
獸骨肢端出土状況(矢印)



3



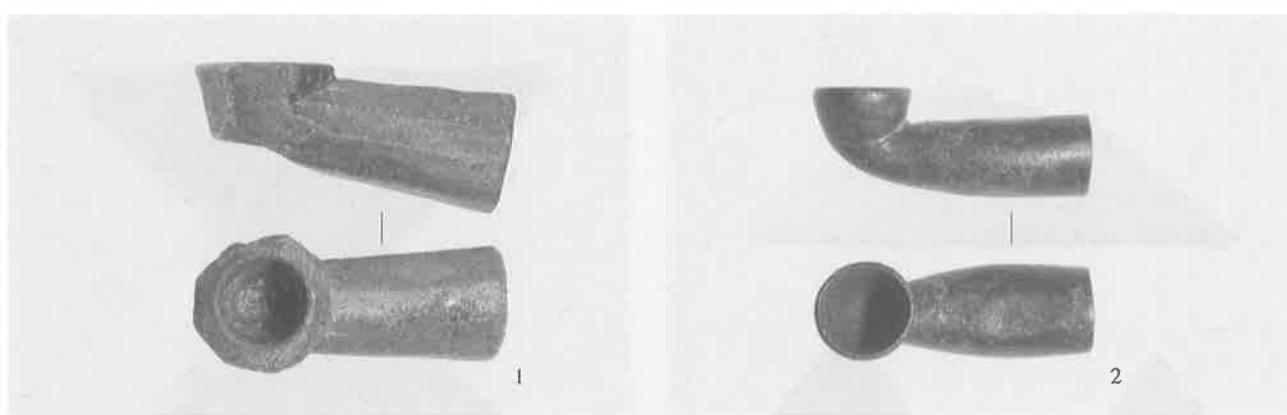
4



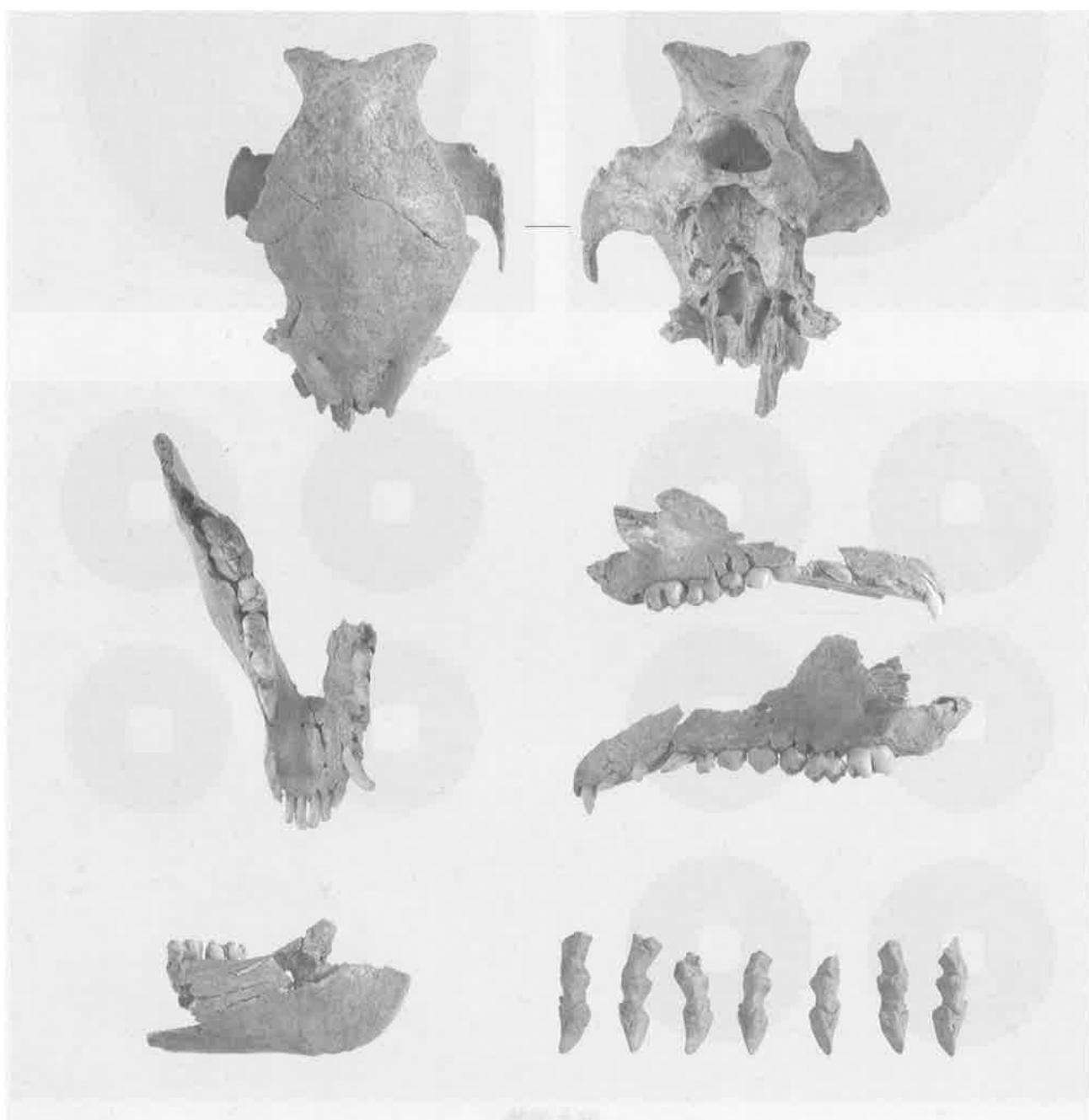
出土遺物

世利原の近世墓

図版  
31



出土遺物



埋納獸骨

## 報告書抄録

ふりがな	とうやましりばるこほぐん・とうやまそうちばるきんせいほぐん・しりばるのきんせいほ							
書名	当山世利原古墓群・当山宗地原近世墓群・世利原の近世墓							
副書名	浦添大公園整備事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	浦添市文化財調査研究報告書							
編著者名	仁王浩司、仲宗根久里子、佐伯信之、北條真子、四柳嘉章、パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	浦添市教育委員会							
所在地	浦添市安波茶一丁目1番1号							
発行年月	2008年3月							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうやましりばるこ 当山世利原古 ぼぐん 墓群	おきなわけん うらそえし 沖縄県 浦添市 とうやましりばる 当山世利原	47208			1999.6.11 ～ 2006.1.19			公園整備
とうやまそうちばるきん 当山宗地原近 せいぼぐん 世墓群	おきなわけん うらそえし 沖縄県 浦添市 とうやまそうちばる 当山宗地原	47208			2003.1.6 ～ 2003.3.5			
しりばるきんせい 世利原の近世 ぼ 墓	おきなわけん うらそえし 沖縄県 浦添市 なかま 仲間	47208			2005.11.21 ～ 2006.1.19			
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
とうやましりばるこ 当山世利原古 ぼぐん 墓群	墓	古琉球・近世	掘込墓	蔵骨器 漆塗膜片		墓室に礎石立ち建物、 朱漆塗り木製厨子		
とうやまそうちばるきん 当山宗地原近 せいぼぐん 世墓群	墓	近世	掘込墓	墓前祭祀品				
しりばるきんせい 世利原の近世 ぼ 墓	墓	近世	掘込墓	錢貨・煙管 擂鉢・獸骨				

浦添市文化財調査研究報告書

当山世利原古墓群  
当山宗地原近世墓群  
世利原の近世墓

浦添大公園整備事業に伴う発掘調査報告書

2008年3月発行

編集・発行 浦添市教育委員会

〒901-2501 沖縄県浦添市安波茶一丁目1番1号  
TEL.098-876-1234 FAX.098-878-1487

印刷・製本 有限会社 サン印刷